文明十三年三月二十九日

衛門督ニ有之候得共、御家譜に無之に付不誌之也、

一御母君、姓氏不詳、

一御内室、小田讃岐守持治候御息女也、明應五丙辰年六月廿九日御逝去、御墓所結城小塙乘國寺ニ有之也、

一此君御儲子、政朝公御壹人也、

一本ニ、政朝公御舍弟右衛門尉氏行君い、田一跡を續、其次御女子、上椙兵庫頭御室、其次御女子、長沼駿河守御室と有之候得共、結城御家譜ニ無之を以、爰ニ棄之也、

一此君結城御名跡ニ被爲立候後、御姉君を以、御家臣多賀谷左近大夫家植ゐ被爲嫁候也、〇中略

一文明十三辛丑年三月廿九日御逝去、御四拾一歳也、乘國寺殿日峯宗光公と奉稱、御廟乘國寺持、慈眼院ニ有之、

晴朝公高野山並乘國寺ゐ被納置候御系圖ニた、御期年不詳、三月廿九日御三拾一歳と有、本文御期年者、結城御家譜幷乘國寺ニテ奉崇祭候所を以誌之也、又此君御三拾壹歳之御逝去ニテハ、寶德三辛未年之御誕

氏廣迎ヘラレテ嗣ゲ

室小田持治ノ女法號

氏廣ノ弟妹氏行

姉ナ多賀谷家植ニ嫁ス

廟所

生ニ當り、嘉吉元年より十一ヶ年後也、嘉吉元年、結城御落城之節、御當歳と有之候得者、御家譜之御四十一歳可也、

一御家譜ニハ、御法號宗光、御道號日峯と有、本文者、晴朝公高野山幷乘國寺ゐ御納被成候、御系圖ニ有之所、幷乘國寺ニて奉唱候所を以誌之也、

一乘國寺者、元福嚴寺と云也、御拾貳代持朝公御開基也、後氏廣公御再興、乘國寺と相改、氏廣公を御開基とに、持朝公御譜中ニ詳也、

一安永九庚子年、乘國寺樣三百回御遠忌、於乘國寺二夜三日御法事有之、御法事料銀拾枚、外ニ金拾兩、是者御水引法被等御寄附相願候得共、御斷ニテ被下之、先達テ同寺出府被在候ニ付、御留守居或者御勘定奉行より達之、御同姓樣、御近緣樣、水谷家幷御領主水野家等ゐ御法事御執行之趣、爲御知有之、御名代奏者番、小河原齋宮被遣候、御香奠銀壹枚被備候、銀貳枚乘國寺ゐ右ニ付被下候也、水野日向守殿より御寺ゐ役人中被差出、御香奠金貳百疋御代香を以御備、其外寺院幷十人衆始、御譜代御由緒之面々、御香奠相備、拜禮有之也、

〔結城系圖〕御十四代結城左衛門尉氏廣公、實結城左馬助長朝公御男也、文明十三辛丑年三

乘國寺持朝ノ開基氏廣再興ス

三百回忌

文明十三年三月二十九日

氏廣小山持政ト伊豆堀越ヲ攻メテ敗退ス

氏廣成氏ニ從ヒ鉢形ヲ救フ

月廿九日御逝去、乘國寺殿日峯宗光公ト奉稱、御墓所慈眼院、御內室小田讃岐守持治御息女、明應五丙辰年六月廿九日御逝去、御法號、英宗雄勝大姉ト奉稱、御墓所乘國寺、御儲子御壹人政朝公、

〔下總國舊事考〕五結城氏世紀　氏廣稱七郎、任中務大輔、文明三年三月、成氏遣氏廣、小山持政等攻伊豆堀越、足利政智逆戰于三島、氏廣等敗退、宇佐美孝忠伏兵筥根山、要其歸途、氏廣等又敗、五月、長尾景信窺筥根敗、發大兵圍古河城、陷成氏奔千葉、氏廣獨從之、多賀谷祥英遣子家植護送而歸、圓福寺記錄四年、氏廣奉成氏弟若宮別當尊徹、立爲將、盡力招集將士、以計復成氏、宇都宮正綱黨上杉氏、白川文書一乘院文書白川文書氏廣搆策屬成氏、尋成氏復古河、九年七月、長尾景春保鉢形城、乞援成氏、氏廣從成氏援之、十三年三月廿九日卒、年卅一、法號乘國寺日峯宗光、有二子、曰政朝、高朝、長子政朝嗣、

○成朝卒シ、氏廣嗣グコト、康正元年十二月二十九日ノ條ニ、氏廣、成氏ヲ援ケテ、下總古河ニ復セシムルコト、文明四年二月三日ノ條ニ見ユ

〔參考〕

〔花押彙纂〕ユ之部　結城氏廣

發句御製

義政加點ス　中院通秀ノ和歌

加點セラレシ人々

三十日、甲辰、三月盡和歌御會竝ニ和漢聯句御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　三月卅日、御ゑうんあり、（等貴）ぞうも御ありり、御三ゐまてく御しやうそんまてゐいる、

〔十輪院內府記〕三月卅日、盡御會也、御和漢也、御發句、おしめ猶日うにもぎふう三の春、

予歡樂之氣有之、仍早出、三之面也、

四月八日、早旦參內、○中略抑今日盡御會、准后御點被進之、御披見、余戀歌御合點也、凡御點十五首、總御人數廿四人、點衆十四人、（並枕語戀、ここの葉なかに枕よもろともいつとりをいわゝこゝとゐる、

御製、親王御方、內大臣、舊院上臈、中院一位、余也、冷泉大納言、（爲當）二首海住山大納言、（高清）

按察右衞門督、（甘露寺親長）侍從中納言、勾當內侍、季熙朝臣、元長、雅俊、宗巧、

○白川文書（二陸前）二月三日書狀

漏點衆、仁和寺宮、三條前(曾量)左府入道、勸修寺大納言、新宰相、宰相中將、以下十人也、

歌題　落花入簾

〔實隆公記〕(前田家本)　三月十九日、癸巳、晴、當番之間早參、(略)中盡御會題(落花入簾、並枕語戀、三月盡夕、雅康卿出題、)各可令詠進之由、可催遣之由、被仰下之間、則相觸了、今夜候黑戶、

卅日、甲辰、晴、小浴、今日盡之御會、兼日可參候之由被仰下之間、參內、有和漢御會、中院一位、勸修寺、海住山等亞相、予、(執筆、)新宰相、承英、元修等祗候、萬松軒宗山令參給、月次詩御懷帋、今日三首御短冊等各取重之、(○月次詩御會ノコト、正月八日ノ條ニ見ユ、)予奉行之、今夜爲民部卿代候番、

〔續歌〕(自應永至文明九箇度)　(文明十三年三月盡、)

落花入簾

冷泉前大納言

色もうもこにのあミめやあらうらしミお吹と狹す軒のミる風

親王御方

玉ミされ吹まく風ま散とミてあるへき花の袖まとまれる

內大臣

三月盡　御製

朝やらさ名ま聞峯れ雪とふるミおのミるまもまねもミされ哉

海住山大納言

玉ミされ(の脫カ)こにもる窓れ春風まとおろすゝりれ塵となりぬる

はらひきてこにのうちまも散ミおのましきの玄とね風う敷ける

按察

元長

恨しまおにのまおとま吹いれくまそまちらさぬ花の夕風(十八首無點略ス、)

御製

三月盡

春いねふ名殘つきぬるさひしさをゐすれんとすゐい入相のう多

冷泉前大納言

春ふわうるゝゟふのゆふへおろ又もあふへき身といさのまね

右衞門督

行春のあとおき空にとりうへる也

侍從中納言

此くれと立いてゝミれい行春のあとおき空にとりうへる也

並枕語戀

〳〵ふくれぬまちへし花の餘波さにうへつきさるさねのしら雲〇十無點首

略ス、

並枕語戀

舊院上臈

〳〵わりなくもうさにあされをもらにおと枕ゐことの袖よや忍さん

中院一位

〳〵ことのさをかさに枕を知とてもねるういつさりをいうゝことさは

勾當内侍

心ならぬとさえのやとをうさるうお去のふるおうに枕ならへて

季熙朝臣

〳〵わうおみさ人のおみさもうくいうあふさい何をかこ川心う

雅俊

略ス、

〳〵うひおしや枕ならぬるむつことも心をうさに契ならにゐ〇十無點九首

僻案愚點十五首

義政上

是春、近江永原吉重、同國永原北野社ニ於テ、法樂千句連歌ヲ興行ス、

景三永原某所藏梵字天神像ニ讃ス

〔補菴京華續集〕（古重）梵字天神讃

江州永原心月善清居士藤公、文事武略出於人上、蓋知輕重大丈夫也、而諸藝之中、最長連歌、夫動天地感鬼神、莫過於連歌、公遊于藝也可見矣、平日歸依北野神君、祭之如在、先是歲春飛梅盛開、就江邊（地名）神廟、賦一千句連歌、此日偶有持神像來者、公大喜曰、水清則月現、非感應乎、購而得之、像乃梵書、非庸史所企也、虛堂讃金書大士曰、以波羅蜜多圓其相、以喝羅怛那蒙其身、有所以哉、且又神君者大士應化、而公於大士也、如歸神君、其理不誣矣、命余記其顛末、以傳不朽、係以小詩、々曰、

連歌興行ノ日天神像ヲ得

北野庶前神助多、緣君千句賦連歌、梵文上有春消息、小字梅花五色阿、

天滿天神社

〔參考〕

〔近江國輿地志略〕六十九　江部庄　野洲郡　四　永原村　天滿天神社　永原村にあり、祭神菅相丞の靈なり、江部庄の產土神なり、社領御朱印八石四斗三合、祭禮毎年四月初の午の日、三の午有時は、中の午の日を用ゆ、勸請の年月詳ならず、或は曰、右大將源頼朝是を勸請すと、然れども憑なる證なし、延文五年庚子十

一月十六日修覆再興の棟札あり、當享保十四酉年まで、三百七十年になれり、亦二百三十二年以前、明應七年卯月十四日修覆棟札あり、願主永原越前守重秀、山門末別當實光坊とあり、それより以來段々と再興の棟札あり、本殿は檜皮葺、樓門、拜殿等あり、攝社には八幡宮、惠比須宮、夜叉神の宮等あり、且當村に於て、往古より天下安全の爲、毎年正月、連歌十梅の發句にて、十句興行あり、古例として、守護地頭或は御代官より發句を出さるゝ、或は云、右大將賴朝公の時代より此事ありと、毎年廿五日月竝の連歌百韻是あり、

通秀ヲ陪セシメラル　陪膳實隆

二臺御出座

四月大　乙巳朔盡

一日、乙巳、御祝、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　四月一日、あさ御はう月あいる、ふしミ殿よりめてたさ文よて御申、〇中略御いわひいつそれおとし、

〔實隆公記〕〇前田家本　四月一日、乙巳、晴、孟夏初節幸甚々々、〇中略入夜有朔日御祝、天酌事了退出、

中院通秀、酒饌ヲ勝仁親王ニ獻ズ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　四月一日、〇中略中院より宮へ御ろくへ御さる色々ありる、めして御さう月あいる、おしあいられて、御ひしく〳〵と五こんあいる、御そいをんよ侍從中納言めも、御いわひいつそれおとし、

〔十輪院內府記〕四月一日、當番也、次於宮御方御一獻申沙汰也、於件御方二臺御出座有御獻、時宜快然也、祝著之究也、微聲巡舞等也、御土器物五、御樋二荷也、入夜事終、宿事誂勸修寺中納言了、

〔實隆公記〕〇前田家本　四月一日、乙巳、晴、孟夏初節幸甚々々、早旦行水、晝間有

渡御　召之間參內、今日中院一位被進一樽於親王御方、仍內々主上渡御、及數獻、源亞相、重治朝臣、源富仲、民部卿等祗候、入夜有朔日御祝、天酌事了退出、

○吉田兼致、酒饌ヲ勝仁親王ニ獻ズルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　九月十七日、○中略宮ゟ御ろうそくまいらせる、おとこうちをもめす、もり、御さるゐいらせる、おとこうちをもめす、もり、御さるゐいらせる、おとこうちをもめす、もり、御さるゐ

和漢才學比類無シ　朝儀ハ今ノ後指南ス　ベキ人無シ　臨終ノ狀右筆ニテ遺言ス　法名覺惠

東福寺内普門寺ニテ葬儀ナヲ行フ

云々、御歲八十也、不可有御本復之條勿論歟、爲天下爲朝家歎存之外無他、經刻後退出、立寄都護許、次歸宅、次右衞門督來云、禪閤只今御事切云々、酉刻始也、雖存內驚歎無極、和漢御才學無比類、殊朝廷之儀向後誰人可指南乎、諸人之所歎也、公家之滅亡時刻到來歟、可悲々々、則金吾(中御門宣秀)同道參門外、令驚申置、今日有御右筆事、御本性不違言語分明、御沒(歿)後事等被仰置云々、殊勝事也、御葬禮可爲東福寺云々、御稱號後成恩寺、同御遺言也、御法名覺惠、

八日、壬子、晴、〇中略次自二條殿御使來、一條殿御葬禮事也、次右金吾俊通等來、一條殿御葬所事、普門寺築地崩有之、御葬所之咫尺也、至其崩外可參之條、不可爲穢、且以指圖尋伯卿之處、不可苦之由返答、此上者以懇志可參云々、令同心了、一宿事俊通知人之在所點定云々、

五日、己酉、晴、申程雷鳴雨下、〇中略次冷泉大納言(爲富卿)來、一條殿御葬禮可爲來十日、其在所依穢有否、可參之由相談之、東福寺之內ハ不可苦、其內又可爲普門寺、然者其寺中參入不可然、猶可尋申之由、令返答之、聊有盃酌事、

七日、壬子、晴、〇中略次參一條殿、於門外尋申御葬所事、普門寺內之間、參入之輩可穢之條勿論云々、

葬禮ノ狀況

中陰ノ期日ニ就テノ論

喪家書帖ノ觸穢ニ付中御門宣胤白川資益ニ問フ

九日、癸丑、晴、向一條亞相許、次晚頭冷泉前大納言、爲富、頭中將朝臣、宣親、俊通等來、令同道行東福寺、近所點定宿、御葬禮寅刻云々、各平臥之後聞曉鐘行普門寺築地崩、各直也、奉見御葬禮儀、顯基引綱、忠顯持御位版(牌カ)諸大夫二人持行燈、天曙事了、

十日、甲寅、晴、一條殿御葬禮天曙事了、歸法性寺宿、改衣裝、昨日衆同道歸宅、

十八日、壬戌、晴、曉參一條殿、於門外招忠顯朝臣有申事、御中陰來晦日可被沙汰終云々、早速之儀外聞不可然、五月强不可憚、無勿體之由申入之、雖所申勿論、不事足之子細種々有御返事、但猶違所存、末代之體可悲々々、今日尋伯卿、折紙寫左云々、

自喪家或穢所書帖通達事、可爲如何哉、無軸書無憚之由申談候、其分候哉、若可憚者、折紙、尙以不可取入候哉、可勘給候也、

不叶候、同前候、於當官者尙以憚之候、遠仰候、恐々謹言、

資益

實胤(富)

白川殿

以同文章、尋侍從二位之處、返事云、

吉田兼倶ノ返事

法家輩不可憚云々、猶當官者或雖同法家儀（候）、多分憚之候、雖然近代不憚之候、其故者故禪閤之御素意此分候、仍可同之候、

兼倶

除服宣下

廿九日、癸酉、晴、〇中略樽一荷・蒟蒻一折進一條殿、明日御中陰可被結願云々、早速不可然之由雖申之、猶被憚五月之條、定而女中事歟、中陰者自葬禮以後結之、然者只廿日也、不幸（孝）之至莫言々々、又今朝有御使、夏弘、御中陰被結願者、則凶服可令脱給歟云々、五旬以後被尋日次、被申除服復任宣下、可令脱給之由申之、

五月廿四日、戊戌、陰、〇中略參一條殿、〇略左幕下御座前左相府御方、鷹殿司殿則參彼御方一獻時分也、除服宣下事、去廿二日分被申之處、禁裏御衰日之間、可爲他日之由、頭中將申之、一向來月可被申請、先於凶服者令脱給云々、

〔實隆公記〕〇家本前田　四月二日、丙午、晴、〇中略抑禪閤（一條）今夜薨去給云々、此七八日不例、痰咳等相痛、老躰滿八十之間諸人雖思儲、殊愁傷不淺、一朝之悲歎併在之者乎、不堪勒筆端矣、

十日、甲寅、晴、入夜向左幕下、禪閤事相弔申者也、

〔實隆公記〕〇文明十五年十月二十九日裏文書

其後御疎遠過法候、何等御事之渡給候哉、旦暮御床敷存候、定御同心候哉、旁以可參申之由、連日相存候ならう、不得例之貧隙、おもとやらんうとやらん罷過候、眞實〳〵相似疎略候條口惜候、さても禪閤之御事、賢慮察存候、極老之上、有待之習、存儲おうら、當時迷惑周章斯事候、今日已二七日候歟、只如夢候、う樣之事おともちと遂閑談候いやと存計候、凡世間病氣流布物忩之由令謳歌候、憑敷候樣、貴慮定無爲御事候哉、目出候、此間如何樣にも、眞實々々けに〳〵と存候て、遂面話候いてと存候、又帝王系圖御本御所持候いゝ、如何樣よも□へちと恩借候いゝ、可爲祝著候、只今指而所用い候いほとも、存出候時□（カ）覽仕度事等候、可被□（マヽ）□（季）候哉、不可有外見候、又先日□帋之時獻愚狀候キ、御會之時分、自元□可及貴報之由申候了、定入見參候哉□（ノカ）間、不能出頭候、世事併如向壁候□□雖無異題目候、あまりに〳〵恐鬱之間染短毫候、態可令勘付給候也、恐々謹言、

（ウハ書）「西殿」　三條殿

十四日　廣光

文明十三年四月二日　廣光」

半井明茂祇候

冬良家ヲ嗣グ　五百年以來ノ才人　江次第ノ侍講ナリ果サズ　義政ノ落膽

〔歷代殘闕日記〕八十七　言國卿記　四月六日、去四日一條禪閤万歲云々、言語同斷事也、

〔長興宿禰記〕中　四月一日、乙巳、晴、〇中略　是日予參一條殿、禪閤近日御所勞難治之由承故也、人々多參候、醫者扣和氣（半井明茂）二位入道等祇候、過半難治之由申之、參病床下、奉拜見、無憑御氣色也、

二日、丙午、晴、今日申刻一條禪閤（前關白太政大臣准后兼良公、御法名覺惠、）薨御、（御年八十歲、）天下才人、近代無雙名譽御事也、世以奉惜、公私悲歎不可過之、長男前關白去年冬於土佐國薨給、〇文明十二年十月五日ノ條參看、末子右大將（冬良、興、權大納言、）有御相續、本朝五百年以來此殿程之才人不可有御座之由、有識人々令沙汰、於禁裏、江次第御談義不周備、可爲御無念、朝家被失御力者乎、室町殿（准后、）御悲歎、世上彌無御執心之由被仰云々、御稱號、奉號後成恩寺殿云々、

十日、甲寅、晴、今曉一條禪閤御葬禮也、於東福寺有其沙汰、先奉出達（塔頭下同ジ）中普門寺、自彼達中令出葬所給云々、

〔東寺執行日記〕十四　四月二日、一條殿樣御入滅、（八十餘歲、）禪閤申之、

〔大乘院日記目錄〕三　四月二日、申畢、後成恩寺殿薨、八十、九日御葬送於東福寺也、

五七日忌

尋尊夢ニ兼良ノ最期ヲ見ル

兼良病ム

五月六日、予歸禪定院、今日卅五日佛事、

〔大乘院寺社雜事記〕七十六　三月卅日、

一自京都衛門男來、禪閤廿六日御違例以外云々、御祈禱事仰祐松了、珍事之由各御書ニ見之了、

〔大乘院寺社雜事記〕七十七　四月朔日、立夏、

一家門禪閤廿六日四時分より御違例以外也、公武御仰天也、自武家清法眼等被召返之、且可爲如何哉之由、昨日御使下向了、今日便宜書狀共到來、御老體之間、迷惑之由醫師共申云々、

三日、雨下、丁未、大風、

一午刻自隨心院御書到來、昨日二日申畢禪閤御入滅、以外之由返事申了、夜前予夢ニ御入滅之由見之了、其體希有也、御寂後ノ御歌ヲアソハス、其御砌ニ予祇候、歌ハ阿彌陀ノ迎ヲ待之由句也、下句ノ末ヲアソハシハテスシテ筆ヲ置テ、則御入滅之由見之了、如安（案）ニ此注進在之、予則移住成就院了、宮壽丸、堯順召置之清賢法眼父子自元祇候、龍光權坊、淨土坊主參候了、

一乘院教支使ヲ遣シ尋尊ヲ訪フ　葬禮ハ東福寺十三塔頭ノ沙汰　近衛政家等使ヲ遣シ尋尊ヲ訪フ　初七日

尋尊料足ヲ贈ル　位牌

四日、戊申、

一自一乘院殿、御使付衣好實法橋來、御訪之由承之、小衣清賢法眼申次、

五日、己酉、

一專實寺主進京都料足十五貫文上之、巨細令申之、幷隨心院殿佛具共上之、於長谷寺借用、昨日到來、

人夫七郷一人、馳賃取之、粮物以下六百文下行了、

一英照得業師弟、小塔院坊主、清宣院、舜恩、五郎太郎參訪云々、

六日、庚戌、

一來十日早旦可有御葬禮云々、東福寺十三塔中（前下同ジ）沙汰、於不二奄（奄）跡可有之、成恩寺殿御例分云々、近日用却（脚）不叶珍事也云々、專實來十日可下向云々、御道具事被仰置之云々、御牌位後成恩寺入道前關白太政大臣尊儀、文明十三年四月二日、八十歳、

一松林院得業、大安寺代官、已心寺代官、極樂坊、九條殿御使、近衛殿御使、竹屋、三寶院同、又四郎、各御訪云々、二條殿御書到來、

八日、癸丑、

一初七日也、小塔院、極樂坊、淨土寺衆合五人、各十疋宛布施、本尊羅カン御影

九日遺骸ヲ板輿ニテ普門寺ニ移ス　葬禮ノ次第　侍女等出家ス

各十疋宛、合八十疋支配之、時菜十種汁三麵各供之、不動尊造立二疋下行、

小塔院茶一筒、極樂坊同、幷隨求タラニ御寫持參了、

十一日、乙卯、

一專實寺主、前判官入道自京都參上、御葬禮昨日寅刻、九日曉也、於東福寺之普門寺（十刹也）在之、龍前念誦、

九日晝內々御板輿ニテ渡御、僧兩人御共申、

奠茶　奠湯　起龍　鎭龍　起龍之念誦　掛眞　下火　山頭念誦

擧經各役者、東福寺新長老西堂以下也、松殿中將御位牌持之、此外御影持在之云々、（脚）勸修寺兵衞佐顯基、前綱引之、判官五位丞夏弘右官別當新左衞門尉常弘各御輿舁之、本力者四人在之、右左衞門尉宗弘色差之、公家衆少々參申、隨心院殿、幷毗丘（比丘尼下同ジ）女中衆悉以御共云々、大將殿花頭未先途ノ間不參、大將事ハ一廻之間御辭退也、去八日女中衆上下五人被出家了、

一御石塔事早々可被立之由、自東福寺申云云、各申合可立之由、自隨心院承候者也、

一自惠林寺方丈料足五百疋替之、早々可用意之由承候、仍予沙汰上分合二

十貫文、東福寺十三堂中沙汰也、三十貫被下行了云々、成恩寺殿御時ハ二百貫文也云々、

拾骨遺骨ハ中陰中一條家ニ留ム大和法華寺ニ分骨

一十日申刻御拾骨、西堂勤之、家門へ御中陰ニ奉置之了、少々法花寺ニ被取之、

冬良ニ遺言ス

十二日、丙辰、

一專實條々相語、去月廿六日東福寺長老入滅之間、新長老入院事申入之、二日早旦被參申、公文如常御事ニテ被出了、官領畠山參申御見參、何題目や(管)らん御判申出之、其樣事色々御沙汰之後、頭北面西ニ御入滅、兼日色々大將殿ニ御服儀御記以下事、念比ニ被申置之、凡希有之由皆々申云々、

二七日忌骨ヲ金ノ五輪塔ニ納ム

十三日、丁巳、小雨、

一自京都料不足之由重而承間、又五貫文分替之了、巨細近衞殿御使ニ仰付之了、

十五日、己未、

一二七日御佛事於極樂坊修之、又羅漢供如形修之、

一御骨用金五輪出來、百文下行、

三七日忌八萬四千基ノ塔摺寫

一內山學衆貳貫文、禪徒一貫文訪錢進之、

十六日、庚申、

一定寬書狀到來、御葬禮御共申之由、念比ニ申之、

一松林院僧正在京也、筒一兩種（メン）圓豆、送給之、

一京都返事到來、御中陰事、今月卅日ニ可被沙汰上云々、

廿二日、丙寅、

一今日三七日也、佛事如形修之、淨土、眞如院、辰巳坊、南坊、良通房召之、羅漢供等在之、眞如院八万四千基塔摺寫之云々、持參、辰巳坊曳茶持參之、請僧各十疋、聖共四人召之、八疋下行云々、各時供之、

一長谷寺執行樣三荷、兩種（メン）昆布、持參、幷借下十五貫文進之、見參得其意、披露惣山之由、□□執行當年初ノ間松殿扇給之、悉皆今度卅貫進上之了、今日兩奉行百疋宛出之云々、就中二百疋持參新御所了、

廿六日、庚午、

一信貴山御訪錢壹貫文進之、定使伊與守取進之、

一三輪寺御訪錢壹貫文進之、定使慶力法師、

一中陰結願吉日相尋幸德井三位反重、五月六日八日兩日ノ間可然云々、仍三十五日事者、五月二日可沙汰之由、仰付淨土寺了、

廿九日、癸酉、

一四七日佛事也、近所今度穢屋共衆(供下同ジ)内外僧膳給之、在家出家其衆八十餘人云々、

四七日忌

遺骨ヲ六ケ寺ニ籠ム

一御骨奉籠之、大安寺、不退寺以西者、自法花寺殿御沙汰也、御間(數ケ所ノ間ト)寺極樂坊以東者、自此方沙汰也、橫坊、明禪兩人爲籠使六ケ所也、極樂坊分者金之五輪(キンノ)ケ也、代百文、六ケ所燈明六十、明禪布施五十文下行了、万陀ラ堂内陣、西方長押打之、

五七日忌

一夜前奉見後成恩寺殿於夢了、

卅日、甲戌、

一森屋一堂一貫文訪錢以公文進之、

五月二日、丙子、

一立野代官百疋持參申、法貴寺公文貳百疋持參之由申入之、

一於淨土寺五七日始行之、自兼日五百疋送之、法花經一部頓寫之了、於法花寺也、新御所、本願經在之、一束、

杉原一束　東林院、

檀紙一束　樊舜、

同一束　繼舜法眼、

同一束　泰弘、

同一束扇一本　賢秀法橋、

同一束一本　光秀、

同一束　成就院、

油燈二連　成舜法橋、

六七日忌

四日、戊寅、

一六七日佛事、請僧五人各百文、佛布施□三百文、時濟(齊)等如先、

七七日忌

六日、庚辰、

一七七日佛事、三百佛布施等、五百請僧、時以後籠僧退出了、則五貫文布施、以橫坊送淨土寺了、其後予歸禪定院、步行、於權僧正御房所一獻在之、

一今日荷坂油座衆棧代五百文進上之了、

十二日、丙戌、

一順盛御妻各書狀到來、禪閤御事驚入候、

六月朔日、甲辰、

一朔日事、御後見調進如例、惠林寺方丈入御、京都事色々御物語在之、自禁裏

勅使ナ一條家ニ下サル

齋藤妙純錢ヲ贈ル

曼殊院良鎭石塔ノ資ヲ寄ス

桂悟傘良葬送ノ奠湯法語ヲ製ス

百ヶ日忌

様香合一、高檀紙、爲武者小路大納言(雲世)勅使被下家門、殿上人不出合、諸大夫取繼之、大納言無内外隨仰仁也、雖然不可然之由申云々、持(齋藤妙純)是院法橋以舍弟僧千疋進上、自竹内門(曼殊院良鎭)跡御石塔用五百疋被上之、自是心院殿御佛事料五百疋被上之云々、籠僧三人、布施六百疋、毗丘尼御衆被沙汰立之、

〔大乘院寺社雜事記〕七十八下　七月十二日、

一後成恩寺殿百ヶ日也、於淨土寺佛事在之、如例大安寺被出云々、三百疋行、(下脫カ)

〔了庵桂悟和尙語錄〕後成恩寺禪定殿下奠湯惠日檀越藤氏、

擧盞云、鷄蘇水鬻粟湯、未爲濟世甘露漿、烏豆毒孰非活人、將謂無妄勿藥、豈計薄奠菜蘋、共惟、某溫良資性、淸虛益神、覺則惠發、滌蕩群妄於念々、惠則覺成、流通眞空於塵々、抹八万蘇迷盧、九々欲算桃坊壽釀二三波羅蜜、一々得服杏壇仁、劑和道香、辟邪養正、呪咀禪味、辨僞明眞、敢將綿州附子作杜漏籃、不把雲門丹砂比藥汞銀、吁騰芳乎文明帝籍、昆季貽詞於修鳳、發蘊乎元亨僧史、夫子絕筆於獲麟、一朝易簀、記毘耶示疾之作、七日停龕、先悉達降誕之辰、攀慕雲殿、拙偈重陳、

命世聖王善逝身、不生滅處示來因、大家留得君臣藥、花發凌霄億万春、(殿下自號覺惠、)

直志院惡養書狀

初七日

東福寺ニ墓ヲ立テントス

佛事ヲ營ムム

四月二日、薨、

〔大乘院寺社雜事記〕八十二　○文明十四年閏七月朔日裏文書

ひんき御うれしく候て申入候、なによりも〳〵ゑつらふ御いり候よし申やとこ、めてさくく御心やすく御ほえさせおいしまし候、こなたもゑつらふ候て、めてさくて候、又御ちやことうけ候て、申候つるよ給候、返〳〵御うれしくおぼへさせおいしまし候、この月二日の御こと、おなとも御れうけんも候はねとも、色〳〵にしあいり候て、御七日うさのことくさせあいらし候て、二日とく御せうきをして、とくとうふくしに、御はうおともたてあいらせさく候つれとも、まつこの御前にてうさのこと、くも候いねいとおもいあいらき候て、やう〳〵御七日のあいさも、御そうおとをき候て、御所さまみな〳〵御心さしいかり御きやうをあそいし候、又御けらやのうさゝも御あいり候て、御心さし候人いあそいし候やとよ、うさのことくのこととまてよて候て候つれ、又中とのよりこの二三年いめもしを給候て、うんにん申候、いろ〳〵と御ありかさくおほえさせおいしまし候よし申て、よく〳〵申候てさひ候へと申され候、ほことよありうさき御事にて候、御とう

うん候叙しく候へとも、おを〳〵□して御ふち候てさひをいしまし候
いゝ、我々まて御うれしく候へく候、よろつ又々申入候へく候、めてさき事
候て、ふと〳〵御のやり候いゝ、このよし申候へく候、うしく、な筏〳〵御ち
や御うれしくて候、卅ふくろたしうよ給候、

大きういんとのへまいる

御ち□の御中　申給へ

〔東寺過去帳〕後成恩寺殿　一條前閤　俗諱兼良、法號覺惠、文明十三四二薨、八十才、

〔公卿補任〕非參議從三位藤兼良、十二、應永廿年癸巳四月十六日敍越階、同日
左中將如元、關白經嗣公息、母、應永十九年十一月廿八日元服、同日正五
下、禁色昇殿事宣下、十二月廿四日右少將、同廿年正月五日從四位上、同日右
少將如元、十四日左中將、四月十六日從三位、越階、同日左中將如元、同廿一年
甲午正月五日敍正三位、三月十六日任權中納言、同廿二年乙未正月六日從二位、
院當年御給、同廿三年丙申正月六日正二位、四月五日是定宣下、十一月四日任權大
納言、同廿五年戊戌十一月十七日喪父公、同廿七年庚子壬正月十日任右近大將、
三月廿六日轉左近、同廿八年辛丑月日喪母、七月三日復任、七月五日任內大臣、

同八日大將還宣下、同卅年癸卯三月廿一日奏大臣大將慶、六月日辭大將、同卅
一年甲辰四月廿日轉右、同卅二年乙巳正月五日從一位、〇以上三十八、正長二年己酉八月
四日轉左大臣、永享四年壬子八月十三日詔攝政、同月廿八日辭左大臣、十月廿
七日辭攝政、未拜賀、仍不及出仕、〇以上三十九、文安三年丙寅正月廿九日任太政大臣、不及兼宣
旨饗祿、依例也、同四年丁卯六月十五日關白詔氏長者兵仗牛車同日宣下、今度別
無內覽宣、關白例內覽故云々、又兵仗事初度ハ爲勅書再任ハ爲宣下云々、然攝政之時
兵仗牛車等事不被仰、仍前攝政也、還補也、今必准初度、兵仗爲勅書、寶德二年
庚午四月廿八日辭太政大臣、〇以上四十、享德二年癸酉四月日止職、六月廿六日准三
宮宣下、年官年爵一准三宮、食邑三千戶以內、舍人二人、左右近衞各以六人爲
隨身、兵仗幷帶仗資人卅人、如忠仁公故事之由、勅書中務甫不參、權少外記康
純持參本家、〇以上四十一、應仁元年丁亥五月十日關白詔、第三度、文明二年庚寅七月十九
日謙退、未拜賀、文明五年癸巳六月廿五日出家、法名覺惠、〇以上四十二、

〔一條家譜〕兼良　經嗣男、母參議原秀長卿女、　應永九年壬午五月七日誕生、同十九年十一
月廿八日元服、十二才、聽禁色昇殿、同日敍正五位下、同年十二月廿四日任右少將、同
廿年正月五日敍從四位上、十二才、少將如元、同月十四日轉左中將、同年四月十六日敍

三位、中將如元、同廿一年正月五日叙正三位、院御給、同年三月十六日任權中納言、中將如元、十四才同廿二年正月六日叙從二位、院御給、當年十五才同廿三年正月六日叙正二位、同年四月五日爲橘氏是定、同年十一月四日任權大納言、同廿五年十一月十七日服解、父、同年十二月廿四日復任、同廿七年正月五日奏慶著陣、同年閏正月十三日兼右大將、左右大將共有闕之時、攝家任左、清花任右、此先規也、仍公光卿十九才日任左大將、今日被任右大將、同年三月廿六日轉左大將、同廿八年五月六日服解、母、同年七月四日復任、同月五日任内大臣、重服中、同月六日大將還宣旨、同年八月廿八日除服宣下、同卅年三月廿一日奏廿二才大臣大將慶、同年六月日辭大將、同卅一年四月廿日轉右大臣、同卅二年正月廿三才五日叙從一位、同日爲一上、永享元年八月四日轉左大臣、同四年八月十三日廿一才詔爲攝政氏長者、同月二十八日辭左大臣、同年十月廿六日止攝政、未拜賀不及出仕、同九年十月廿日蒙内覽宣旨、文安三年正月廿九日任太政大臣、無兼宣旨并近例依饗禮、同年太政大臣、享德二年三月廿八日辭職、同年六月廿六日准三宮、勅年官年爵一准三宮、食邑三千戸、以内舍人二人、左右近衛、左右兵衛各六人爲隨身、并賜帶仗資人三十人、如忠仁公故事之由、作勅書、中務輔不參、權少外記康純持參本家、長祿二年十二月十三日辭准三宮并兵仗、内々以狀申之、不及上表儀、應仁元年五月九日詔爲關白、文明二年七月十九日辭職、未拜賀、依亂中也、同五年六月廿五日於大乘院出家、法名覺惠、同十三年四月二日薨、葬東福寺、號後成恩寺、

〔攝家系圖〕一條殿流

關白氏長經嗣 成恩寺、

- 攝政氏長關白 文明十三年四月二日薨、八十、後成恩寺、
  - 兼良 母同、梅津、
    - 教房 母同、招提寺末院、
      - 尊秀 母同、灌頂、
        - 僧正 同 教賢 母同、早世、
          - 君 母同、早世、
        - 教賢 母同、早世、灌頂、
      - 尋尊 母同、長谷、興福寺別當、大僧正法務興福寺、
      - 女子 母同、早世、東大寺別當、大僧正法務東寺一長灌頂、
      - 嚴寶 母同、十二月二日入滅、號後密乘院了、文明十三年十二月二日薨、
    - 關白氏長小林寺殿、癸卯歲誕生、文明十二年十月五日薨、妙花寺院、
    - 尊秀 母同、灌頂、
    - 僧正 同 教賢 母同、早世、灌頂、
    - 尋尊 母同、寶池院、
    - 君 母同、早世、東福寺、號後成恩寺、

君　同、東福寺不二庵、
　早世、
君　同、早世、
君　同、早世、
秀高　同、惠林寺方丈、
　嵯
大僧正北野別當灌頂
　山
良鎭　同、竹內、
　權僧正寶壽院灌頂
　山
桓澄　同、岡崎、
　同
　早世、
益養　（綠カ）同、直志院、
光智　法花寺　母屋女房、香臺寺殿、灌頂、
女子　母同光智、
了高　梅津是心院、
惠助　仁　母光智同母、相應
　院、母皇后崇光院、法皇後崇光院、早世、
秀賢　法花寺　母從三位康俊女、法花寺殿、改尊秀云々、兄弟同名也、門徒各別故也、灌頂、本秀高弟子比丘尼、
女子　母同、鷹司殿北殿、
女子　母同、十方院尊好、
女子　母同、桂林寺殿宗方、

君冬良　母從三位顯鄕女、爲教房公子、右大將、正三位、權大納言、
　寺
君　母同、花頂殿、政尊　文明十三年六月十三日入滅、十七、
女子　母同、梅津弟子、
女子　母同、丙申歲誕生、南御所御弟子、文明十四年八月廿九日入室、御臺御猶子、

〔一條家譜〕

經嗣　關白、左大臣、從一位、氏長者、實父攝政良基、房經早世依無胤子器入之云々、
兼良　母同祐殿、關白、攝政、左大臣、車隨身兵仗、應永九年五月七日誕生、文明五年六月廿五日於南京出家、法名覺惠、同十三年四月二日薨、八十、號後成恩寺、
教房　關白、左大臣、左大將、從一位、母中納言宣俊卿女、
教賢　權僧正、早世、寶池院、
尋尊　法務大僧正、興福寺別當、
嚴寶　法務大僧正、准三宮、東寺長者、大乘院、
良鎭　大僧正、北野別當、曼珠院、
桓澄　大僧都、權僧正、早世、實乘院、
惠助　家女房、早世、相應院、

政尊母、早世、圓滿院、
女子母、從三位經子、關白政平公北政所、
政房權大納言、從二位、早世、
房家權大納言、正二位、
冬良關白、太政大臣、實關白兼良息、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲七十六

後成恩寺禪閤(關)行跡

攝關度々年序
准后宣下年紀
極官位年紀
落飾年紀

一攝關度々年序

永享四八十三攝政、初度、廿一、文安四六十五關白、第二度、四十六、應仁元五九關白、第三度、六十六、

一准后宣下年紀

享德二六廿六勅年官爵一准三后、食邑三千戶、

一極官位年紀

文安三正廿九太政大臣、四十五、應永卅二正五從一位、廿二、

一落飾年紀

文明五六廿五於大乘院出家、七十一歲、戒師法務前大僧正經覺、法諱覺惠、

薨逝年紀
歸依ノ宗教禪淨土二宗ニ歸依ス
自像ニ贊ス
公事參勤年紀
禁中洞中晴御會作詠事

一薨逝年紀

文明十三四二春秋八十、自三月下旬之比寢膳乖例、鍼艾無驗、臨終焉之期、去常寢所退出客亭、(北)比首右脇合掌而薨、

一歸依宗事

以禪淨土二門、爲平生歸依之宗、金剛般若經、普門品、爲每朝持經、又唱無量壽佛寶號、每夕不懈、

壽像自贊曰、君聖臣賢相逢、謝斐相具釋法服、男婚女嫁未畢、慕龐老趨選佛場、更有平生一大錯、聲々念々是西方、(已上取要辭)

一公事參勤年紀

應永廿六年嵯峨寶幢寺供養初出仕、
同廿七年勤敍位執筆、爾來三節會、敍位除目等執筆、及數度勤仕、(年々不遑記、)
寶德二正十六勤踏歌節會內辨、(于時關白太政大臣、)

一禁中洞中晴御會作詠事

永享九十廿一行幸室町亭、三船御會詩歌兼作、再(并カ)獻和歌序、(于時前攝政、)
寬正五十二仙洞三席御會詩歌兼作、

勅撰集之儀　新續古今和歌集序チ撰ス
歌道相傳之儀　相傳ノ師籠ナシ
神道相傳　義政ノ囑ニ依リ北野社一日
注釋書籍事　於柳營參會事

此外禁裏洞中和歌御會、再(幷カ)御連歌會等、度々接席、

一勅撰集之儀

永享十一年勅撰和歌集、新續古今和(歟)序、綸命兼作之、

一歌道相傳之儀

後京極攝(良經)政以來代々相傳之、別無師範、但冷泉大納言持爲卿、爲家禮有通志之事、

一神道相傳之事

日本紀卅卷成恩寺(一條經嗣)關白、又卜部兼熙卿以來相傳之、於神道者無別前相傳歟、

一注釋書籍事

涉和漢雖有數部、令江次第抄、神書纂疏、重綸(倫)職源末洛(々、)等爲詮要、此外和字抄、如花鳥餘清(情)、愚見抄、連歌式目之類、不可勝計矣、

一於柳營參會事

永享四七任大臣大饗爲尊者、于時左大臣、

十月六日、北野社一日一萬句連和(歌カ)序、依武命書進之、

一萬句連歌序チ製ス著述　三條西實隆歟　勸修念佛記
鴉鷺問答　四條隆生奥書

此外和歌再(幷カ)連歌會、春花秋葉遊覽、接宴筵及度々畢、

〔勸修念佛記〕(奥書)下

寬正四年の秋冬のころ、淨土の法門ともを一見するつゐでに、いさゝかこの一卷をしるしいたして、四衆の信心をすゝめて、九品の得生をねがはしむるもの也、

此本以一條禪閤御筆、令書寫者也、

永正二年乙丑五月廿九日書之、

勸修念佛抄記者、後成恩寺製疏也、宣揚曇鸞善導之眞宗、不違黑谷西山之奧旨、粗加一覽、詞語玄妙、忽發三心、悲喜交流、不出卷而知要津、其此書哉、頃者武庫少令源政定得之、以爲座右銘、至卽悟無生之夕、庶乎玩之、於勸修念佛之功未必無補云、源子勉旃、

永正丙寅(三年)暮春上幹(勝)記之　欣求淨土優婆塞內大臣(三條西實隆)

〔鴉鷺問答〕(奥書)

故禪閤御作鴉鷺問答二策、一日桃華左幕下(一條忠香)公借用之貴命蒙之、仍新寫藏書呈上之、

日本紀纂疏

安政三稔孟夏　前權大納言(四條)隆生

〔日本紀纂疏〕上一

日本書紀纂疏序　藤兼良述

敍曰、混沌元氣、沖漠無朕、廓神明之本體、圓法界之眞機、寂爾赴感、譬鑑含像、動而滋萌、如轂衆黃、清濁判位、謂之器界、中和發識、名以情分、純粹全氣、合天地爲同根、雜糅離性、見善惡于異塗、推前後而三世可了、通幽明而六趣歷然、知非歸正、授先覺之模範、澤物利生、啓來蒙之輔相、至施變化之妙用、必歸誠信之極功、蓋思玄古之事、豈能靑史而傳、神靈憑人宣言、聖賢操觚紀載、以三敎之可證、知一書之不誣、自古解釋雖多、鮮窮要旨、方今狂斐而述、庶效流通、闢吾土以神州、躋斯民於壽域、

吉田兼敦ヨリ日本紀ノ奥祕ヲ傳フ

〔日本紀神代抄〕三　八洲起原亥

後成恩寺殿ハ、曾祖父兼敦(吉田)ニ御相傳也、其ノ作ノ纂疏ニハ、口傳相承ヲハ一モ載ラレス、尤深切也、〇上下略

公事根源

〔公事根源〕

(奥書)應永廿九年正月十二日書之畢、　內大臣

偏爲嬰兒也、外見有憚、

右の本は、後成恩寺の殿下、いまたうちのおとゝと申侍りける比、しるしをかせ給ぬ、あまねく世に流布せさるにや、此本(町廣光)うちの卿內へめさるゝ由申されしを、かた時の程とてかり、みたりの筆をもて、文龜三のとし末の秋中の十日にうつし侍りぬ、彼本にせ書きにうつしたる本なれは、筆の跡たしかならす、かたのやうにうつしとゝめぬ、のちに正本にてよみあはすへき者也、

ましはりはかるおほきみのくらゐ藤基春(持明院)

〔仁和寺諸記抄〕　假名文年中行事跋　內大臣

(奥書)本云應永廿九年正月十二日書之畢、

偏爲嬰兒也、外見有憚、

寫本云右奥書、以他本注之、雖令校合、猶落字濟(々脫カ)烏焉之誤等難決之、追而可改正而已、

都護柳原一位資定卿草名也、

故禪閤御抄也、本爲上下二冊今爲一冊、可祕之、

江次第抄談義ノ爲拔萃ス

本云
這抄以桃華坊本、馳禿筆草寫之、仍字體不分明、尤莫出窓中、可祕之、
大永三歳閏三月下旬　桃蹊隱叟冬良

〔江次第抄〕一
永享十一年正月上旬、爲談此次第、所自抄也、追可加清書者也、
竹陰閑子 同朱印

〔江次第抄〕二
江次第々二卷抄也、相違亥可改之、
後成恩寺也、
御判

〔江次第抄〕四
本云
以愚勘令抄出畢、定有僻事等歟、
左大臣忠榮判

〔江次第抄〕七
彰考館本奥云、
天正五年十月廿五日書寫畢、
權大納言信基
又云、
文祿三年五月廿三日、以禁裏之御本、令書寫者也、
權大納言藤原判

東岡基賢奥書

此一冊者、柳原辨資廉、本不慮令披見之間、令戀望令書寫、此本之義、予年來書寫之亥、雖爲念願、公用繁多、不及投筆、空送多年、然處松室賴母介重英、助於予志、被投健筆、故不日終以遂書寫之功者也、誠可爲朝庭(廷)公事之補助、且者愚家累代之重寶、謂彼謂此、千喜萬幸、尤此亥也、仍以短毫聊加奥書置者也、
于時寛文第六晚夏後六日　權中納言藤原判

三革說洞院實熙奥書

江家次第抄者、後成恩寺關白(兼冬公)、亘御抄出也、如今拜借東園中納言基量卿藏本、而謄寫之了、所謂寛文第六權中納言藤卿者、基量卿家父基賢卿也、
貞享元年春　前右兵衞大尉藤原爲實在洛

〔京都御所東山御文庫記錄〕百五十二番
〔追加〕三革說一條前攝政殿兼良公御作　在盛」

永享十二年庚申九月廿七日、以前攝政本、卽刻馳筆加校合了、是者建仁度後京極攝政被擬作之勘文也、彼正本被免一見之間、則所令書寫也、辛酉革命之深奥、大略盡于此一卷哉、寔可祕々々、努々〳〵、
洞院大納言實熙〻〻
權亞相藤臣判

〔京都御所東山御文庫記錄〕百五十二番
辛酉甲子事

四六二六革卦圖　賀茂在盛奥書　四六二六配革卦圖（奥書）新意　以清行所立之年數取義

一條（奥書）前攝政（兼良公）御抄也、革卦祕術不出此卷、尤祕而可傳子孫而已、

嘉吉三年十二月廿四日　陰陽頭在盛　御判

令聞書　兼良ノ子隨心院巖寶ノ手寫

〔令聞書〕（奥書）文明第八曆小春中旬、令全部十卷書寫、已後奉受禪閤御說、同鈔出少々繕寫功訖、

法務前大僧正嚴寶

冬良奥書　令抄　一條内房奥書

〔令抄〕（奥書）右者後成恩寺殿下之御抄也、以舊本、仰從者、令書寫者也、

後成恩寺殿御抄也、不可外見、可祕々々、

親衛大將軍藤原（二條冬良）朝臣（花押）

官位令

寬文壬子林鐘十六　權大丞右大將（二條）內房

紘位次第　轉法輪三條公敦奥書

〔紘位次第〕（奥書）這本一條禪閤次第也、當年右府紘位執筆之時被書遣之、此時右府內大臣也、初度云云廣橋大納言（綱光）所持之間、借請之、不日令書寫、再三挍合之後、私所存加朱點畢、不可外見々々、究賢〳〵、

代始和抄　宗祇ノ爲メニ著述ス

〔代始和抄〕（奥書）依僧宗祇所望馳筆畢、

文明十年二月日　內相府左大樹（轉法輪三條公敦）（花押）

宗祇奥書　文明第八曆應鐘上旬

三知抄

御名○御代始鈔、幷ニ宮內省圖書寮所藏御讓位之事及ビ御讓位一件、異事ナキニ依リ略ス、

二判問答　二階堂政行ノ問ニ答フ

〔群書一覽〕（二有職類）御卽位假名抄（寫本）一卷　一條兼良公

異本ハ三知抄トモ、御讓位の事、御卽位の事、御禊行幸の事、大嘗會の事等汰記す、奥書ハ云、依僧宗祇所望馳筆畢、文明十年二月日、後成恩寺禪閤、又一本異位重行の事より、大宋の屏風の事ハいさゝまて十箇條汰記す、奥書ハいとく、此抄一條禪閤御作也、重尋申上條々、追書加之畢、宗祇、又八箇條をくとへく奥書ハ、依種玉老人嚴命、聊顯累葉之家風者也、莫赦外見矣、文明十一年十二月日、神道長上卜部朝臣（兼俱）卿

〔二判問答〕（奥書）二階堂山城判官政行問題也、愚管勘付之、

文明十年六月日

後成恩寺禪閤、二階堂判官政行給之物也、則御自筆也、

權大納言（一條冬良）御判

冬良奥書

關白宣下次第

關白宣下次第

件次第一條前殿（教房公、）詔之時、冷泉大納言（爲富、）爲上卿奉行之時、禪閤（兼冬公、）眞令新作給、賜彼大納言之次第云々、文明十一年二月廿九日以按察卿（親長）本令書寫之訖、件本勘解由小路前中納言（高清）筆也、

町廣光奥書

權中納言藤（町）廣光

權大納言藤宣胤（中御門）

中御門宣胤奥書

明應六年六月十四日以右本寫了、

資胤

群書一覽

女官飾抄

（二有職類）

女官飾抄（寫本）一卷

女官飾抄ノ中女房衣色々ヲ作ル

そしめよ、女房の官品の事を記す、うの奥書よ云、永德二年二月一日作進、攝政判、○（中略）次よ女房衣色々、此奥書よ云、此一てうい、後成恩寺のくわんそく御製作也、すおとちうの殿下の眞跡の本淡、桃花坊へ申うけ、そしうき筆よく、字形淡たうへす、うつしとゝめ、持く參り返納申候時、御ふさり校合申て、

持明院基春奥書

あやまりとも淡直し付侍りき云々、大永元年十月六日、左衞もんのうさ藤（持明院基春）原判、又云、此一帖子細見前奥書畢、就右雖不出紙窓、土岐五郎源光之懇望之間、奉聽一覽、然而被書寫之、堅禁他見、不可被出窓外者也、享祿四年夏四月日、前左金吾藤原在判、一本、延德三年乃春、諫議大夫藤基春の奥書なり、

三節會次第

近衞尚通奥書

〔三節會次第〕

此一本（奥書）一帖、以後成恩寺禪閤自筆本寫留之、最可爲有職之指南者乎、

近衞准后（實名尚通）判

〔世諺問答〕

世諺問答

花のみやこのかたはら、よもきか門のうちに、世にかすまへられぬひとりのおきなありけり、おほからねとも、來るを友とせるたくひもありけらし、春の日のつれ〳〵なくさみに、よも山の事ともかたり侍るついてに、さても世のことわさとして、としのうちにさま〳〵の事とも申つたへ侍るは、いつれも根源たしかなる事にや、いとおほつかなきよしとひ侍りしかは、おきなの申やう、そのことに侍り、とはすかたりもせまほしく思ひたまふれと、そのことゝなけれは、いたつらに心のうちにくらし侍るに、おもひよ

發良自序

一條兼冬歟

兼良記述ヲ終ラズシテ止ム

りとひ給こそさいはひなれ、おほかたはいたつらなるたはふれ事のやうなれと、をのつからもろこしより、つたはれることもあり、また我國にはしまれる事も侍り、おほくはわさはいをはらふましなひ事ともに侍るへし、老のひかおほえのみそあるへけれとも、いち〳〵にとひ給ふならは、こたへ侍らむと申侍りしを、よろこひなから正月朔日より、しはすのつこもりまての事とも、おきなのこたへ侍りしを、ひとつももらさすかきあつめて、世諺問答となつけ侍るなるへし、〇中略

右世諺問答は、後成恩寺禪閤のかゝしめ給はんとて、みとりの紙に、かうはしき筆のあとをのこし給ふといへとも、わつかむ月のはしめより、若水のみなもとにいたりて、八ヶ條をしるし給、つゐにその功終らさりしかは、目錄のみ殘りて詞はなし、こゝに桃花の林にあそひて、累葉のちりをつくひとりの童侍り、しかりといへとも、雪をあつむる教をしらす、いはんやすたれたるをおこし、かけたるをきなひて、ふるきをたつねあたらしきをしるは、まさしく先達のしはさなれと、かつうは班彪の史記を班固か受つき、紫式部か源氏物語に、大貳の三位か宇治十帖をくはへ侍りし事の有やうに、心經とやらむ教經とやらん申物語さうしにて、み給ひし事のおもひ出られて、かの目錄のむねにまかせて、正月七日のあつ物より、十二月晦日の事にいたるまて、そこはかもなきあまのもくつをかきあつめて、しつかたく火のほのかに、世の諺をあらはさんとする事しかり、

天文第十三曆中春下旬日

正二位行權大納言藤原(一條)兼冬

牙齒十六歳撰之

御判生年廿歳

諒闇記

一條冬經增補スト云フ

小夜のねさめ

愚竹馬昔作此抄、今遮眼前、頗不思議之聞詞等有之、自嘲不少、堅可禁外見者也、

〔諒闇記〕

右一冊、外題曰凶事部類記(奥書)端後成恩寺兼良公作、奥末孫冬經公增補之由也、云々、案按到此所、後成恩寺殿筆作、此奥ニ中右記大治、薩戒御記正長永享、親長卿記長享、二水記大永、迎陽貞治ノ抜書等載之、是多經公之增補歟、然而頗草稿未清書物歟、

〔小夜のねさめ〕

文明十三年四月二日

義政夫人日野富子ノ爲メニ書ス
伏見宮邦高親王奥書
源氏和秘抄

文明十三年四月二日

此一帖、文明の比、（日野富子）妙禪院へ後成恩寺かきてまいらせられ侍る、本のまゝうつして、一臺へまいらするものなり、

于時大永六年八月廿二日　（邦高親王）兎園叟

〔源氏和秘抄〕

（奥書）源氏の物語は、ひとへに色このみの道とのみ思ふへからす、ないけう、けんのふかきむねをはしめとして、おほやけのことのたゝすまゐ、やまとうたの道、いとたけのしらへ、しやうそくの色あひにいたるまて、世にありとしあること、一としてしるしあらはさすといふ事なし、この物語よくよめらんは、わか國のことおもひなかはにすき侍へし、又五條の三ほんは、うたよみのけんしみさるは、ほいなきことに申され侍りき、そも〳〵河海、すいけん、しめいなといふ抄は、事ひろきによりて、しよしんの人はみることたやすかるへからす、これによて一ふしあること葉の心えかたく侍を、あら〳〵この一てうにしるしあらはして、道に入るものゝなかたてとし侍り、たゝしこれにきはまれりと思ふへからす、すへて五十四てうのつくりさま、よみやう、くてん、こしつなとは、せん達にならはすして、たやすくたとりしらんことは、いとおほつかなくおほえ侍り、ほう徳元年しも月中の五日にしるし侍り、

一條太閤兼良公製作也、可謂初學入門、珍重云々、

（曼殊院良鎭奥書）

〔和祕抄〕

（奥書）文明七年孟春之比、隨思得抄之、追可令清撰者也、可禁外見也、

三關禪人覺惠

（源語祕抄冬良ニ與フ）

〔源語祕訣抄〕

（奥書）唯傳一子之書也、不可出闥外、付囑中納言（冬良）中將畢、

後成恩寺殿
老衲覺惠

文明九年二月吉日

前大僧正良鎭

（三條西實隆奥書）此一冊（密）蜜々以懇望、申請左大將（冬良）卿、家本、（後成恩寺殿自筆、）書寫之、縱雖爲親昵之人、曾以不可免披見之由懸春日大明神、住吉、玉津嶋等明神、所相誓也、永可存此旨者也、

文明十三年四月二日

文明十八年四月廿四日　逍遙院殿　正三位行權中納言兼侍從藤原朝臣判　廿三才

一校畢、

〔源語祕訣〕

（奥書）此一帖、後成恩寺入道殿下之製作、花鳥餘情之別注之祕訣也、已三箇條之事被載之、如惜眼命、深可停外見耳、借請肖柏小弟寫留之、余多年留心於彼物語、依道之冥加及今書寫、珍々重々、

文明十三年十月十日　從一位源朝臣（中院）通秀判

灯下令校合之畢、

〔源語裝束抄〕

（奥書）文明十二年季春、申請一條禪閤御註了、　肖柏

右一冊者後妙花寺（冬良）殿下芳翰也、可爲重寶物也、

天文十三曆仲夏上旬　特進藤（花押）

〔實隆公記〕

二十九　文龜三年九月廿七日、辛卯、天晴、○略　中杉原來、後成恩寺自筆源氏物語不審勘答一卷持來之、有其興之間留置之、

〔群書一覽〕

三物語類　源氏物語年立　二卷　（一條兼良公）同上

花鳥餘情ノ別注
源氏物語不審勘答
中院通秀奥書
源語裝束抄
源氏物語年立

卷首ヨ、源氏物語諸卷年立トテ、源氏君誕生の年より、卷々ヨヲヒル事トモ、其後、條目を立ク、次第ヨ云ルセリ、

上卷　桐壺卷より、眞木柱卷ヨイヒル、源氏三十八歳、

下卷　梅枝卷より、廿九歳、幻卷源氏五十二歳、薫五歳、ヨイヒル、これより以下、薫の年立ヨして、夢浮橋卷廿六歳ヨイヒル、

頭書ヨ、諸抄年曆の相違共ヨル、季吟の所爲也、

奥書ヨ云、源氏物語年立一冊者、故禪定閤下所製也、件正本、應仁大亂、於桃坊文庫、爲白浪奪取畢、爰經十年、不慮感得之云々、永正七載季夏中吉、前博陸叟、後成恩寺殿御息、一條殿冬良公也、

一本奥書云、右年立者、愚身四代曩祖後成恩寺禪閤之述作也云々、桃花（兼冬）末葉、生年十六歳書之、

〔伊勢物語愚見抄〕

（奥書）長祿之末年、披覽此物語之次、粗考古抄之誤、聊書今案之說、件本漸流布世間、有傳寫之輩歟、爰上都擾亂之後、南都閑居之暇、重加校合、非無訛謬、仍更染禿翰、別編愚抄、專以閑麗翁之躰調爲肝要、併以定家卿之勝說爲指南、蓋不失昔

伊勢物語愚見抄
奈良ニテ改訂ス

物語之本意歟、爲大和物語之助緣也、舊爲一卷、今分上下、若數奇之輩有書寫之志者、以此本可爲正而已、

文明六年小春仲幹日　沙門螢〇(兼良ノ法名覺惠ノ花押ヲ誤レルモノ、)

愚見抄二帖、大內左京兆(政弘朝臣)令所望之間、所令附屬也、老筆狼藉、定可招後嘲者歟、

文明八年七月澣日　老比丘螢

此愚見抄上下二帖、一條禪閤之所作也、奥書等巨細見右、借請政弘朝臣、以彼自筆之本、於周防國勝音寺書寫之、再三令校合而已、

文明十二年仲秋日　從一位(轉法輪三條公敦)御判

〔言繼卿記〕天文十九年九月廿九日、己未、天晴、未下刻小雨灑、薄所へ罷向、一盞有之、梁塵抄(神樂催馬樂抄)後成恩寺殿御注也、令借用候也、

〔國朝書目〕(中管絃)　二卷

梁塵愚按抄(本名神樂催馬樂注秘抄、後成恩寺殿)

〔古今和歌集祕鈔〕(奥書)

古今集之釋、以相傳祕說、令書密勘僻案兩抄漏脫事者也、堅可禁外見、

桃華老人御判

大內政弘ノ囑ニ依リ附屬ス
轉法輪三條公敦之ヲ政弘ニ借リ周防勝音寺ニ於テ書寫ス
古今和歌集祕鈔
梁塵抄

先年書寫之本、去年七月火事燒失之間、以或人所傳授之本、倉卒加書寫者也、深祕篋底、莫令外見矣、

文龜初元仲冬上吉　從一位藤(一條冬良)(花押)

〔古今集祕抄〕(奥書)

右古今集祕抄、後成恩寺殿下御作者也、則此一冊御筆也、可祕々々、

文字誤等閑日披見之次、改直之了、可祕々々、努力々々、

從一位(一條冬良)(花押)

〔古今集聞書〕(下巻)

此一冊者、祖公御自抄也、深可禁外見而已、

天文第十五曆仲秋下旬　內大臣(一條冬良)(花押)記之

〔國朝書目〕(下和歌撰集注)

古今釋義　兼良公、　一卷

古今大歌所鈔　兼良公、　一卷

〔歌林良材集〕

冬良奥書
古今集祕抄
冬良奥書
古今集聞書
兼冬奥書
古今釋義
古今大歌所鈔
歌林良材集

文明十三年四月二日

林にしけき良木のけたうつはりとなるへきも、ひたのたくみのをのまさかりをめくらして、きりもちゐるにあらされは、その材をあらはす事なし、詠歌の道も是におなしかるへし、ならの御門の萬葉集をはしめとして、三代集等にあつめおかれたることとも末の世に定家、家隆ことときのひたのたくみにあはさらは、是をきりもちゐる所なくして、雲のまさかり月のをの、其妙手をあらはす事なかるへし、爰をもつていとけなきわらはつたなきたくみに、その心をつけしめむために、おろかなることの葉にまかせて、是をしるしあつめて、歌林良材集となつくるになむありける、

（第一巻）

以御正本寫之、

此篇上下者、故禪閤令述作給、和歌之奥儀也、勝説也、殊本末流布世間、傳寫之輩希有之歟、新三位（公敏）忠顯卿以彼御自筆本新寫焉、余被見設（誤カ）字等改正之、深祕函底、敢莫他見、

後妙華寺殿
從一位判

永正五年仲秋上旬

〔和歌深祕抄〕一思ひ草の事、○略中後成恩寺殿歌林良材といふ物に、千草と

あそはしたり、もし相違歟、いかにも〳〵ひせらるへき事第一の相傳也、

〔群書一覽〕二記錄類　明月記和歌部類寫本　一卷

卷首よ、歌道事と有て、彼記の中の和歌よあつうれる事のミを、一條禪閤兼良公の抜書したまひしそのよて、文臺の圖なとも、むしめく此書よ見えさより、奥書云、本云、以後成恩寺禪閤殿下令書抜給御自筆之本、所書寫也云々、

〔群書一覽〕四家集類　草根集抜書寫本　一卷

一條禪閤兼良公、草根集全部のうちより、撰ひ出しさまひさる千首也、一名正徹千首といふ、

〔連歌新式追加並新式今案等〕

新式今案奥書

右應安新式者、此道之龜鏡也、永不可違背、但未定之事、近日相論之題目等、或以愚意料簡之、又訪宗砌法師意見、所記置也、此外漏脫之條々及滿座諍論者、自他加酬酌、後日訪先達、可決是非者也、

後成恩寺殿
關白御判

享德元年壬申十一月日

〔連珠合璧集〕上

文明十三年四月二日

冬夏奥書
初心連要鈔
雲井の春
内裏蹴鞠御會ノ記

文明十三年四月二日

一本奥書 斯集上下卷故入道殿御作也、初學之輩尤可熟見之、愚自竹馬之昔、聊志雪螢之學、結春日野草茅、翫菟久波言葉、爲懼當座之廢忘寫留之者也、莫言々々、

黄門羽林(良冬)(花押)

〔連珠合璧集〕下

奥書 斯集愚老爲少年人所書也、而流布世上、有寫之輩歟、爰中納言羽林爲連歌稽古、聊以染翰墨、仍示愚老、乞奥書、依是錄其子細耳、

南華老人(兼良)(花押)

〔國朝書目〕下 連歌

一卷

初心連要鈔 後成恩寺殿、

後成恩寺關白(兼冬)

〔享德二年晴之御鞠記一名雲井の春〕

○本文略ス、

享德二の年三月廿七日、内裏の晴の御鞠の日記、女房に代りて是をしるす、貞治の御鞠の衣かつきの日記と申侍るは、後普光園(二條良基)の攝政の書給へる物也、今はかゝるおもかけも殘らぬやうになり侍れは、念なき心ちもし侍り、且は又後代のためしにもなりぬへき事と思ふ給へれは、筆にまかせて、かたのやうに書とゝめ侍り、定めてちかひたることも侍らんかし、あなかし

一卷

後成恩寺關白(兼冬)

東齋隨筆
持明院基春奥書

〔東齋隨筆〕

奥書 右抄者、後成恩寺殿下令述作給云々、以彼御自筆本寫之、尤可比於禁方者歟、不可出閫外而已、

文明十七年春二月日

羽林藤原(持明院)基春(花押)

右一冊者、後成恩寺禪閤令述作給之物也、證本分欠之條、以基孝朝臣所持本加寫畢、爲令寫之間、定而僻書多歟、

天文第十四曆極月下旬

桃花園人(二條尹冬)(花押)

傘冬奥書
酒食論
寐覺記

〔國朝書目〕中 飲食

酒食論 後成恩寺殿、

〔國朝書目〕中 禊書

寐覺記 後成恩寺殿、

〔宋本〕朱點令案加之、僻事多可改者也」

兼冬十七歲記之、

一卷

〔本朝書籍目錄外錄〕

文明十三年四月二日

一卷○本朝書籍目錄外錄ニハ三卷トアリ、

四書童子訓　元亨釋書注　語園　尺素往來　關藤河記　職原鈔ニ跋ス

四書童子訓

元亨釋書注

〔群書一覽〕六雜書類　語園　二卷　一條兼良公

漢土乃故事を、諸書より採出して、うかゝ譯したる書なり、卷末ゝ、桃華老人ハ、兼良公乃別號なり、寛永四年刻、

撰と云るされゝり、桃華老人ハ、兼良公乃別號なり、寛永四年刻、

〔群書一覽〕二往來類　尺素往來　二卷　藤原兼良公

〇上略、細目ニカ、ル、此書、兼良公著述の事ハ、松下見林ゝ公事根元集釋ゝ、古筆屏風傳汰引て、これをいへり、

〔蔗軒日錄〕天　文明十七年二月廿六、晴、〇中略證忍以藤禪閤所製之關ノ藤

河ト云書一卷爲借、蓋亂中禪閤□□赴濃州、上下□(遠カ)中紀行詩歌也、

〔群書一覽〕三記行類　藤川の記　一條禪閤兼良公

一名美濃の記行といふ、兼良公、應仁の亂汰避て、南都ゝ住ゝまゝふ此美濃の國ゝ行給ふ時の道の記也、〇兼良美濃ニ赴クコト、五年五月二日ノ條ニ見ユ、

〔職原鈔〕(奧書)此鈔者、北畠准后大納言源親房所集也、百官之始末、諸家之勝劣、殆如指掌、宜

官職唐名ヲ錄シテ末尾ニ附ス　跋ヲ敎具本ニ加フ　韋海編智證大師年譜ニ序ス

著眼耳、

〔群書一覽〕二有職類　職原鈔　二卷　北畠親房　桃華老人

傳來の說ゝ云、北畠准后源親房、南朝村(後脫)上天皇の與國二年、吉野ゝ於て編集す、一卷の文書汰も考へすして筆記せり、時ゝ法名宗玄といふ、此時四十八歲也、そつとゝ博識の人也、與國二年ハ、北朝の光明院曆應三年なり、准后の自跋なり、官職唐名以下、一條禪閤兼良公の作ゝして、附錄とす、跋尾ゝ桃華老人とゝるゝ、兼良公の別號也、

職原鈔句解　十二卷　六本　白井宗因

卷首ゝいふ、此職原鈔もと二本なり、一本汰顯統本と號す、親房の男顯統朝臣、南朝の正中二年ゝ、これ汰書寫してより、始て世ゝ行それゝり、一本を敎具本と號す、これハ公の五世の孫敎具卿の校定するところゝしく、後花園院の御宇、一條禪閤の跋汰くゝへらをし本なり、〇下略

〔智證大師年譜〕清和陽成光孝三朝國師智慧金剛智證大師年譜序　桃華老人撰

崑崙之河、濫觴竺土、支分派別、泓澄百折、無不宗於海者、吾佛法東漸亦爾也、能

忍氏始出現于世、隨機鈍利、說法度生、既滅渡之後、其大弟子阿難陀、多聞惣持、有大智慧、結集修多羅、而諸尊者、或先或後、各執一說、大闡化源、性相顯密大小禪律諸宗、於是判矣、如是歷二千年、東漢明帝永平十年、金人入夢、騰蘭始來、蓋是中國佛法西來之始也、厥後譯經三藏、傳燈諸祖、繼踵而臻、或有木葉旁行飜爲華言、使人理會法義者、或有以玄言德祥、開佑至尊、通明神足、雖造化之功可奪者、自餘不可悉言矣、又四百載而吾欽明帝十三年、百濟聖明王獻釋迦銅像經論幡蓋、扶桑人肇聞有三寶之名、達磨善無畏二師、梵儀桑門而禪密之祖也、無畏則塔毘盧舍那經于久米寺、達磨則遇于太子而歌於片岡、蓋二師先來、徵後世二宗熾行東垂矣、其餘性相顯密諸師、或自彼而來、或自此而去、絡繹不絕、所謂弘法海、傳敎澄、慈覺仁、求法西游之稱首也、相繼有智證大師圓珍者、又負笈如西、在唐六寒暑、聞天台止觀義於智者九世法孫良諝及道邃法孫物外、傳瑜伽密旨於無畏五代孫法全阿闍梨等、稠載而歸、別立門戶、見今園城之徒是也、師之行業異迹、載在國史本傳、比有三井遠孫名曰尊通者、重校家譜、爲師年表、以便觀覽、其志可嘉焉、吾聞中國佛法、敎外之宗獨盛、而台密中微、亙不絕如綫、按傳記云、吳越王錢氏因覽永嘉集、有同除四住此處爲齊若伏無明三藏卽

劣之語、以問韶國師、師曰、此是敎義、可問天台寂師、召問、寂曰、此出智者妙玄、自唐末喪亂、敎籍多出海外、於是遣使十人、往日本取敎典、以回而建伽藍、顯密二宗、於吾邦不散失者、諸師西游之功、於是爲大矣、以此言之、則東流佛法、以扶桑國、爲沃日之海也乎、寬正歲次實沈陽月敍、

〔翺之鳳禪師文集〕乾　竹居西遊集序

翺之禪師過予桃華書齋、自袖出一小冊、謂予曰、某去年冬爲西州之行、因逆旅郵亭中所得者、裒而筆焉、名以西遊集、彼有保壽惟參翁者、切以求獲、是以近日欲附舶、願借一詞以重之可乎、予披而讀、無一而不文者、吁五十年來不有此作哿矣、天之未喪斯文、斯文自重何借予辭、輒說其意以還、想惟參翁獲必寶惜、寬正乙酉（六年）三月中澣、桃華野人書、

〔梅庵古筆傳〕兼良公

一條太政大臣從一位關白准三宮、號后成恩寺也、經嗣公息、博聞强記、無書而不讀、々無不通、故倭漢之學識、不愧古人、自負才氣、無歌學之師承、將讀古今集、慨然歎曰、一關之市必立之乎、一卷之書必立之師、況歌道之奧乎、竟噬臍就冷泉持爲卿學三代集之祕訣、乃賜手書曰、自今而可爲當家之羽翼云々、其手書

至今在家、凡所著

四書童子訓　日本紀纂疏
歌林良材　花鳥餘情
源氏和字抄　古今祕抄
令抄　江次第註（抄イ）
公事根源抄　除官雜例
東齋隨筆　樵談治要
筆之慰　尺素往來
等此外雜著不可縷擧、今（剱カ）綱大綱而已

〔辨疑書目錄〕（中十一本朝作者書目）

日本紀纂疏（八冊）　公事根源（三卷）　後成恩寺兼良公書作（或號一條禪閤、亦桃花老人トモ云、）
四書童子訓（二卷）　五經鈔　曉筆記（二十冊）　梁塵愚案鈔（二卷）
樵談治要（一卷）　歌林良材（二卷）　寐覺記（三卷）　鵄鷺物語（三卷）
東流記（一卷）　明玄記（上中下）　新玉集　邪說論（一卷）
古今大歌所鈔（一卷）　東齋隨筆（一卷）　清水寺記（一卷）　佛氏論（八卷）
文明一統記（一卷）　和祕鈔（一卷）

和訓押韻（一卷或十一韻ト モ云、）　勸修念佛記（二卷）　源語祕訣（一卷）　源氏物語年立（一卷）
世諺問答（一卷）　漢和式目（一冊）　小夜の詠さ（一冊）　語園（二卷）
燈下吟談（十卷）　豐秋津島卜定記　令鈔（十卷）　花鳥餘情（二十卷）
古今祕鈔（一卷）　源氏和字鈔（六卷）　關藤川記（或ハ東行記ト モ云フ、一卷、）
伊勢物語愚見鈔（五冊）　重編職原（一卷）　筆之荒（一說ニ、二條殿眞基公作ト モ云フ、一冊、）
連珠合璧集（二卷）　雲井之春（一卷）　節會次第（一卷）　元亨釋書記（或ハ註ノ字ニ作ル、一冊、）
精進魚類物語（二卷）　尺素往來（一卷）　江家次第鈔（四冊）　連歌新式目（一卷）
御讓位御卽位御禊大嘗會和字鈔（一卷）　桃花藥葉（一卷）　除官雜例（一卷）

〔續本朝通鑑〕（百七十四卷後土御門天皇五後號覺惠、歲八十、號後成恩寺、兼良博識多聞、該通倭漢、最熟朝儀、且達神道、善倭歌、長連歌、又識佛書、當時推稱無雙廣才、所著有四書童子訓、日本神代紀纂疏、令抄、江次第抄、公事根源抄、重編職原抄、源氏花鳥餘情、源氏年立、源語祕決（訣）、歌林良材集、連珠合璧集、連歌新式追加、關藤河日記、筆占、伊勢物語愚見抄、樵談治要、文明一統記、東齋隨筆、桃華藥葉集、除官雜例、雲井春、元亨釋書註、勸修念佛

夏四月乙巳朔、丙午（二日）、一條太閤藤兼良薨、剃髮（文明十三年）

記等、

傳稱、兼良自謂、吾勝菅丞相者三、彼爲右府、吾爲相國、彼其家門微賤、吾累世攝家也、彼知漢事者、李唐以前而已、知我朝事者延喜以前而已、吾既知倭漢之古、而加之以李唐以後之事、延喜以後之事、然吾百歲之後、世人尊吾不如彼、非無遺恨焉、故時人招請兼良、則不能掛菅相影像于床上、若偶見之則怒曰、彼何在吾頭上哉、其自許如此、兼良居所號桃華坊、故自稱桃華老人、或稱桃華野人、又號三關老人、

菅原道眞ニ優ルモノ三アリト傲語ス

壬生官庫記

〔京都帝國大學所藏文書〕七十九 壬生文書 二

唐尚書門下二省、本朝併名曰太政官矣、凡每官□□(所)謂長官、次官、判官、主典是也、太政官以三公爲長官、九卿爲次官、兼攝二省之事、判官以下分而爲二、少納言及外記屬門□(下)、左右辨及史屬尚書令謂受事上、抄□(錄)□(勘)□(署)文案、撿出稽失、讀進公文主典之職、由是外記史、專主二省之文簿、就中尚書爲喉舌之職故國司任符、僧尼度牒、吉凶軍賓、恒例臨時大小之公文案記等、左右都事之所掌、而莫不悉收藏於官庫也、昔清和帝貞觀十六年、小槻今雄始敍大史、卽承勅行造東大寺之事、爾來爲槻氏之世官、而繩々不絕、官中文籍、遞代相踵充棟如山、

有勞於掃灑、無術於防鼠、何況雨露之濕損、火災之焚滅、出不虞□(者)豫不可知、由是二條天子永萬初元、創建史庫、東西五間、南北四楹、架棚聚之、掛籤分之、至今殆餘千函、雖爲鄴侯三万軸、本藏五千卷、未足多矣、元曆朝廷以小槻隆職壬生私宅、暫爲七條女后御在所、後日回賜主而居焉、見今官庫之所在也、夫雖爲私之書、錄公之務、已爲公事之書、私諸可乎、故倉庫少有漏、則自公命匠而葺治、爲近代之恒規、粤應仁亂逆以來、公私諸家文籍盡爲盜火而散失、今後天下還治、朝禮再興、則何以爲文證、顧幸官庫歸然獨立、寧莫補皇化朝儀之万一耶、文明龍集丙申季冬之月、因尚書左大都事小槻晴富之求、記乎南京邸舍云、

印

此記一條禪閤御作御自筆也、寫之、

〔北白川宮御所藏文書〕

先日被仰候料紙義、加思案同可申入候、得賢慮候哉、

此僧位兩人口宣事、申御沙汰可爲本望候、皆大乘院坊官候、清賢此者宿坊々主候、將亦源氏抄物御料帋可被下之由被仰候、とても明春可致上洛候、先少々にても被下候、明旦風度可罷下候、相携且加書寫、以便宜可進上候、同得御

意候哉、謹言、

十二月廿二日

（兼良）
（花押）

按察とのへ

〔後法興院政家記〕五　文明十二年五月廿三日、癸卯、晴、〇略　中次向随門坊、禪閤被講孟子、今月中以前兩度被講之云々、先日随門入魂之間、今日始在講筵、鷹司前左府（政平）同被出、

廿九日、己酉、晴、向随門、有孟子講尺、

六月九日、戊午、晴、向随門、有孟子講尺、

廿二日、辛未、自未明降雨、午刻又雷雨、深更又雨下、向随門、有孟子講尺、第三卷終、

廿八日、丁丑、晴、向随心院、有孟子講尺、

七月三日、辛巳、晴、今曉甚雨下、〇略　中向随門、有孟子講尺、

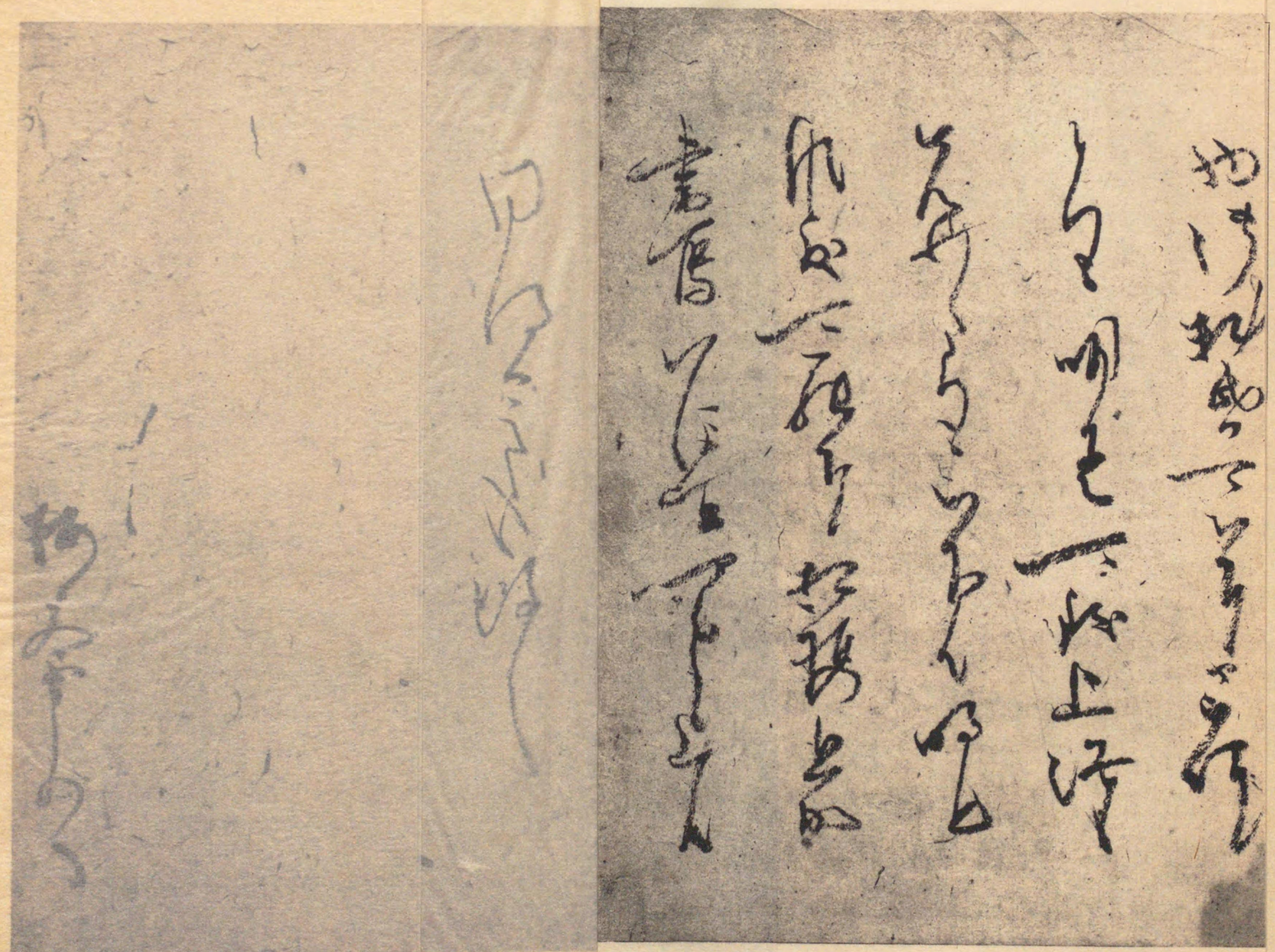
〔攝家系圖〕天神贊　御作

維德惟馨北野宮、無情臭味現神通、九州梅走三千里、一夜松生十八公、

桃華居士藤兼拜贊

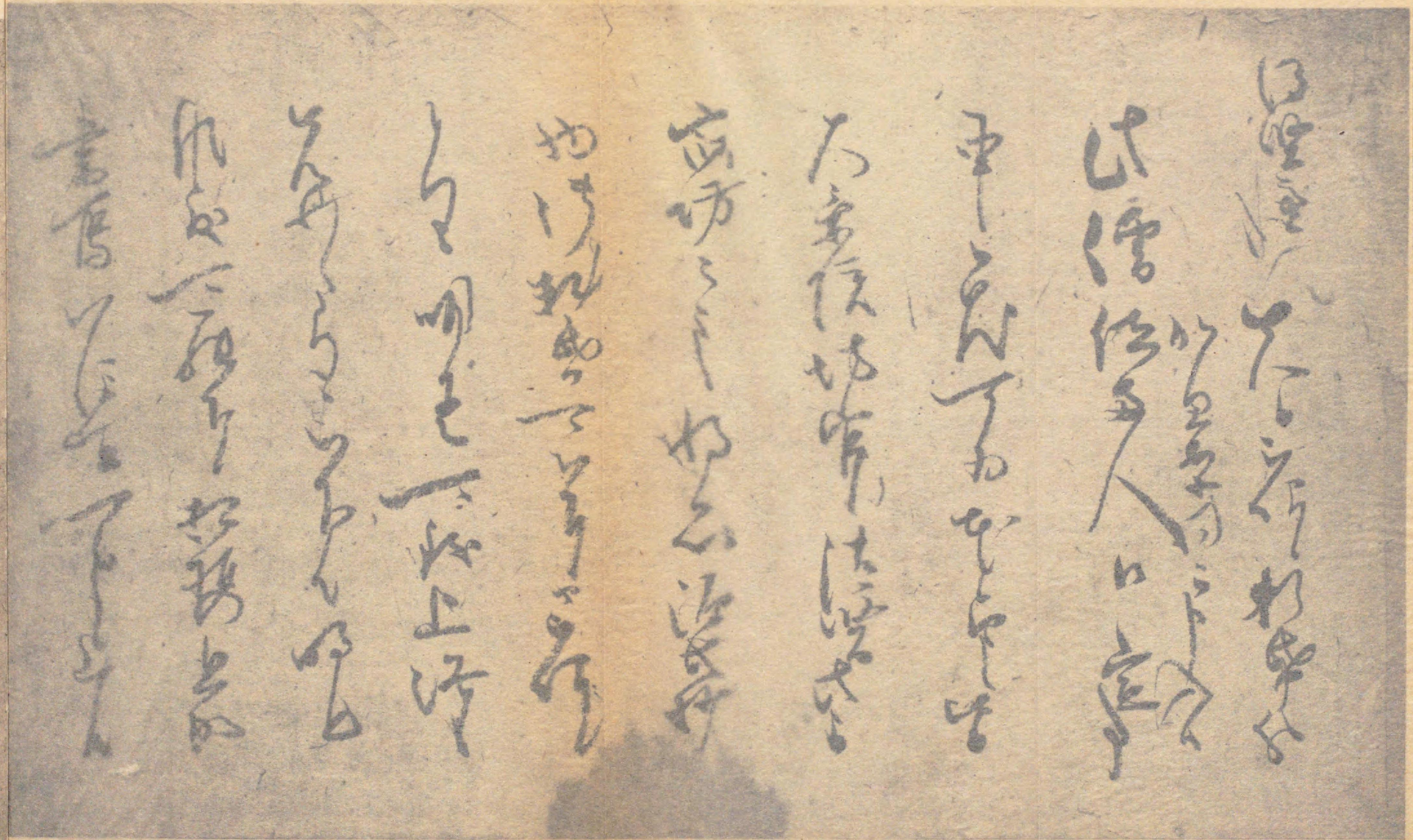
一條兼良隨心院坊ニ孟子ヲ講ズ　近衛政家鷹司政平等講ヲ聽ク

天神像贊ヲ製ス



東京印書館印刷株式会社

一條兼良筆蹟　北白川宮御所藏

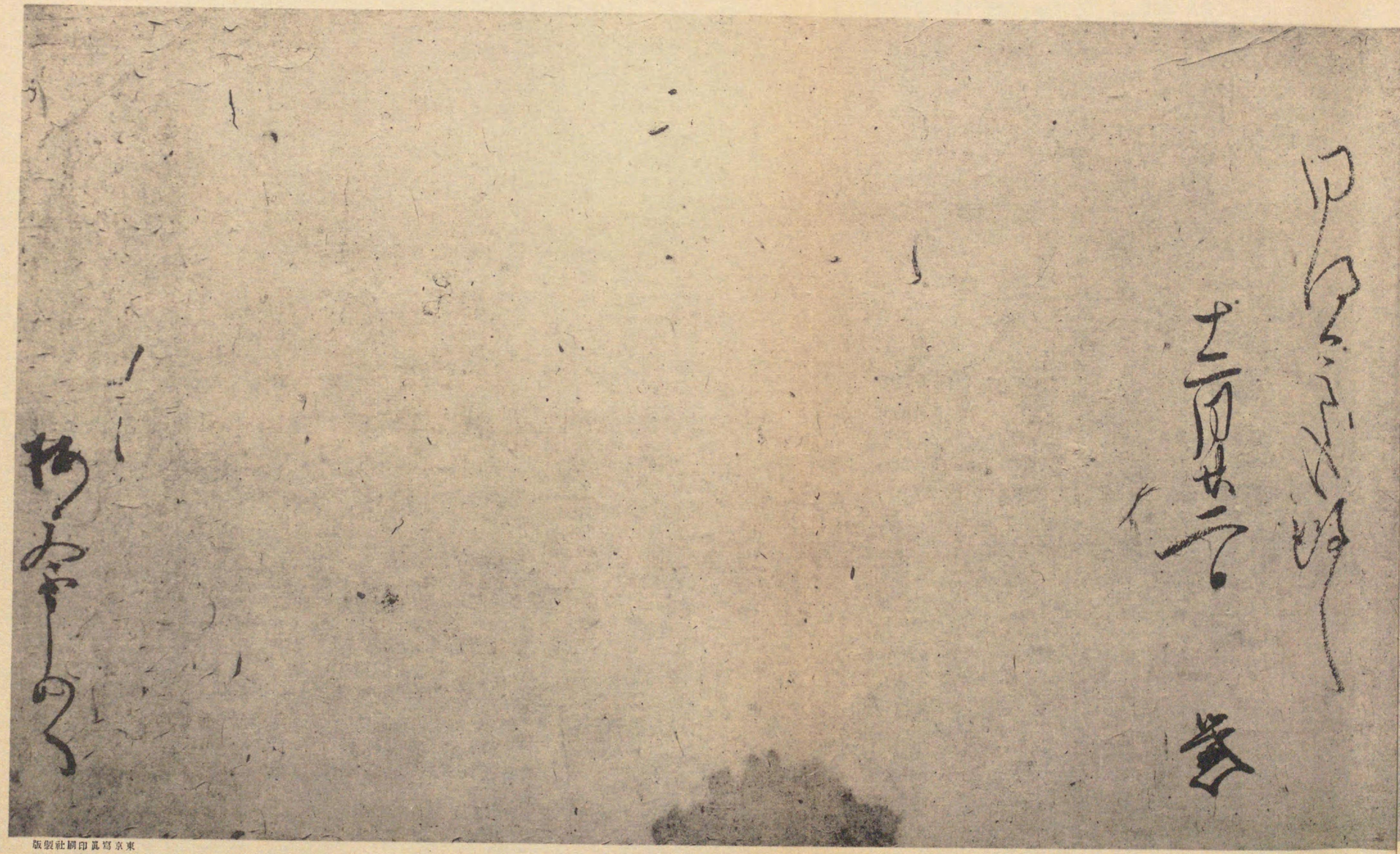


原寸　縦〇・二七九　横〇・九四五

東京寫眞印刷社印版

一條兼良筆蹟　北白川宮御所藏

原寸　縦〇・二七九米　横〇・九四五



東京寫眞印刷社製版

宗深ニ詩ヲ送ル

周鳳兼良ノ湖山圖ノ詩ニ和ス

靈彥兼良ノ瀟湘夜雨圖ノ詩ニ和ス

蜀山圖ニ贊ス

【佛日眞照禪師語錄】行狀

後成恩寺攝政兼良公作詩寄師曰、聞說龍興雲亦浮、雲龍變化卷潭湫、喝雷棒雨無途轍、天下蒼生蘇息不、師和答曰、喝雷轟起盡閻浮、解道龍興百丈湫、殿下仁風扇九野、等間吹散陣雲不、〇上略下

【臥雲稿】

詩到梅邊不厭寒、孤山處士凍吟安、桃花坊裡春風底、猶把橫斜和雪看、湖山圖、和一條殿勻、一條

【雪巢集】乾

公退晝閑黃閣春、題詩看畫想騷人、如何耐得瀟湘夜、雨打船篷獨宿身、奉和一條相公題瀟湘夜雨圖、

【續本朝通鑑】百七十二後土御門天皇三

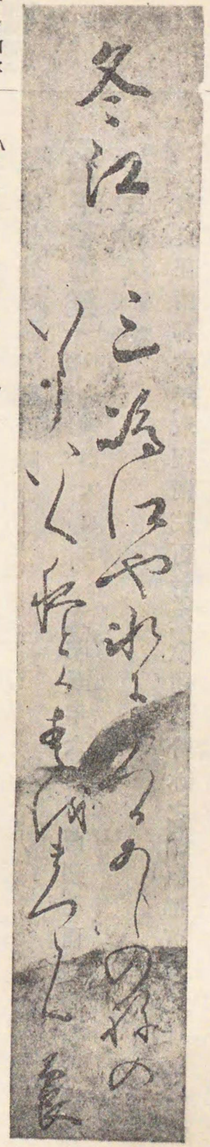
文明五年六月辛酉朔、乙酉(二十五日)前關白准后藤兼良剃髮、改名覺惠、

兼良在南都六年、取堀河院百首倭歌題、以吟詠之、號南都百首、〇南都百首ノコト、五年是歲ノ條ニ收ム、又見蜀山圖、有感於當時、而作贊曰、豺虎縱橫滿鳳翔、故人一別永相望、江通上下挹衣帶、山抱西南矗劒鋩、鹽井絕閑煙正白、草堂茅破髮彌黃、

文明十三年四月二日

幾回從此圖中逝望帝啼時又夕陽、

〔一條兼良短册〕○山城妙心寺塔頭桂春院所藏



和歌

百首和歌ヲ獻ズ

〔新續古今和歌集〕一春歌上　百首歌奉りし時、待花、

前攝政左大臣

咲きやらぬ花をまつちれ山の端よ人たのめなる春の白雲（以下六首略ス、）

〔新續古今和歌集〕三夏歌　左（足利義敎）大臣詠ませ侍りし新玉津島の社れ三十首の

歌よ、江螢、

前攝政左大臣

飛ふ螢堀江の波乃よることもおもくてふ玉ゐかすや添ふらん

〔新續古今作者〕

兼良　一條後成恩寺　文明比

〔續倭歌作者部類〕乾執政　前攝政左大臣　新續九首

足利義敎勸進三十首和歌

藤兼良（後成恩寺、號）

〔常德院殿御集〕その比、後成恩寺殿の詠草を見て、内（冬良）大臣に返しつかはすとて、包紙に書付て侍し、

さくもゝのことはの花の鏡にもたつ面影の水くきの跡

彼作者桃花也、故如斯、

返し

君か今みかきそへすは塵つもることはの花のかゝみならまし

十二月十二日、姉小路宰相（基綱）自詠を百番歌合につかひて、後成恩寺關白判詞を書給ひしを一見し侍れは、曩祖濟時大將の事を讀侍けれは返すとて、包紙に書付侍し、

我そまつしみはてにける水底の月に歎しあとならねとも

返し

歎かしな君かひかりを賴む身はしつみもはてし水底の月

水底の月を哀となかめてそかゝるこことはの玉（花イ）もかり（よイ）ける

〔柳原家記錄〕九十四　持明院前宰相基春言談抄　一桃花坊對談申次、後成恩寺假（後下）

文明十三年四月二日

義尚兼良ノ詠草ヲ見ル

兼良姉小路基綱自歌合ニ判ス

文明十三年四月二日

歌(ウタ)合御張行之時、觀音寺(興福寺ノ塔頭名)相國へ歌御所望、然時ニ相國故障、重而後成恩寺ヨリ被申云、懐紙調様定而可有御所存歟、洞院攝政歌合之時、御農(裏)祖常盤井相國(權中納言)作名アリ、洞院ハ女房トアリ、任先規可有作名之由入魂アリ、重而猶辭退也、

〔新撰菟玖波集〕一 春連歌上

すみうねの煙も雪もきえおくよ
をのゝへうかはもえやそむらん

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕三 夏連歌

そてのうつりうちりかんそうし
さちとなのこもるの露をふく風よ

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕四 秋連歌

月やとる露も大野は暮はうよ
いろ〳〵千種よとかそうつろふ

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕六 冬連歌

あうめくさひしさとのをちうよ
むらうしいかは葉よたまる雪おちく

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕七 賀連歌

はゝゝみよも時のういるやさらるらん
きみよいさめのなたいこの御代

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕八 戀連歌上

あけあやの軒とさひしき雨れをと
ゑゝくとたうはその戸ひらうん

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕十一 羇旅連歌上

おきてゆく有明方の草枕
かりのやとりもうたいいろれち

後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕十四 雜連歌二

夜のあのうせやけとうあるらん

後成恩寺入道前關白太政大臣

○以下五首略ス、

○以下三首略ス、

○以下一首略ス、

いさり火のかすあらいれてこく舟に　後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕十八釋教連歌

鳥けさものよなるゝ法の師

驚れ山鹿のそれふの道とひく　後成恩寺入道前關白太政大臣

〔新撰菟玖波集〕十九發句上

髪こほをまゆ打けふる柳うか　後成恩寺入道前關白太政大臣

内裏よて千句の連歌侍しよ、

かめふさせこり浅つくさん春乃花　後成恩寺入道前關白太政大臣

白毫院の花れ下よて連歌よ、

山寺もりせ浅いいとぬさくらうか　後成恩寺入道前關白太政大臣

〔仕付方聞書〕一文明乃比、後成恩寺殿（一條殿、）伊勢物語御講尺の時、度々一獻候し比、杉原伊賀（貴座）に御酌とらせられし時に、被仰けるハ、將軍家こハ准后よあらせ給候間、近臣の面々ハ殿上人の位成へしとて、御酌を御免候つるを、我等若輩の時、同御座敷に祇候いさし承候つる、但年久敷成候間、おほえちうへ候哉、本ハあるましく候、又公方樣御酌ハ、女中よも大上﨟小

杉原賢盛ノ酌ヲ辭ス

奈良白毫院ニテ連歌チ行フ

内裏千句連歌發句

發句

上らうより外ハ御とりあく候、男衆、公家衆、御相伴衆、一家衆の外ハ伊勢守執申候、攝家よハ殿上人御取候、清花よハ諸大夫も御とり候、

一周忌近衞政家兼良一周忌ニ法華經チ贈ル

一字各

〔顯傳明名錄〕一名一字

花　一條殿兼良公

槐　一條殿兼良公

〔後法興院政家記〕七　文明十四年四月二日、庚子、降雨、西河前宰相（房任）來、後成恩寺殿一周忌也、法華經一部燒香代百疋送之、

四日、壬寅、晴、自一條幕下有使者、一昨日之禮也、

〔大乘院寺社雜事記〕八十一　文明十四年四月二日、雨下、

一後成恩寺殿下御一廻也、御佛事如形於淨土寺修之、料足五貫文下行之了、

尋尊淨土寺ニ法會チ行フ

依計會無殊儀、無念々々、坊來見參了、光臨、

〔大乘院寺社雜事記〕八十五　文明十五年四月二日、

三回忌

一後成恩寺殿第三廻也、於淨土寺如形御佛事成之、大安寺被出云々、

〔大乘院寺社雜事記〕百八　文明十九年卯月二日、

七周忌

一後成恩寺殿第七年也、於法花寺修之、長老以下兄弟ニ申合之、

法花寺ニ法會ヲ行フ

十三回忌冬夏孝經ノ章ヲ題ニ追悼和歌ヲ諸家ニ求ム

政家ノ詠歌

中御門宣胤ノ詠歌

〔政覺大僧正記〕二十　延德（長享元年）三年卯月二日、壬申、

一後成蘭（恩寺同ジ）殿御七年忌ナリ、仍御追善於法花寺御沙汰之、門跡風呂在之、一切經納所役如例、

〔後法興院政家記〕十八　明應二年四月二日、丙申、晴、〇中略今日後成恩寺（宋書）十三回忌、冬夏孝經章爲題事、廻也自兼日給歌題、開宗明義章、懷舊、懷紙也、關白分諸候（侯カ）（近衛尚嗣）章、懷舊以孝經廿二章爲題云々、余懷紙如常、

詠古文孝經和歌

從一位政家

開宗明義章

歌二行七字如常、博陸懷紙同之、或不載古文孝經、載章名題所、書載名文一句云々、

今日相副懷紙送二荷兩種於相國（一條冬良）許、故禪閤依爲公事師匠也、

〔宣胤卿記抜書〕明應二年四月二日、今日後成恩寺殿十三回也、自前殿（冬良）爲題孝經章、御勸進和歌、

夏日同詠三才章　和歌

權大納言宣胤（依主人同姓不加姓也、）

淨土寺ニ法會ヲ行フ

助德

十七回忌

上をあふき下をめくむそ天地乃中よたらぬ人はよとそさ

懷舊

仙人よことや問まし桃乃花ちりて久し袭ゆくゑいろよと

〔尋尊大僧正記〕十三　明應二年四月二日、

一後成恩寺殿十三廻、二貫弁杉原一束、壇（檀）紙一束、諷誦文遣之、於淨土寺修之、助德風呂立之、惠林寺殿御下知也、東門（峯南）院僧正來、

〔政覺大僧正記〕三十　明應二年卯月二日、丙申、

一後成蘭寺殿十三廻云々、仍淨土寺（江）御佛事被入了、御堂僧兩人被出者ナリ、

一惠林寺殿被仰時風呂、門跡上下入者ナリ、予如形奉訪、

〔大乘院寺社雜事記〕百十五　明應六年四月二日、

一後成恩寺殿十七年御佛事成之風呂在之、助德也、東門院來、

〔大乘院寺社雜事記〕百十一　明應六年四月二日、

一後成恩寺殿十七年御佛事成之、助德風呂等仰付之、福智院地藏堂修造ニ寄進之了、東門院僧正來、

二十五回忌

〔大乘院寺社雜事記〕百六十七 永正二年四月

後成恩寺、後蜜乘院（圓滿院殿尊）（龍心院殿尊）花頂殿廿五廻也、

〔大乘院寺社雜事記〕百六十七 永正二年四月二日、

一後成恩寺殿廿五廻佛寺、兩寺巡禮、

三十三回忌

三條西實隆追善和歌ヲ詠ズ

〔雪玉集〕六 雜 懷舊

續撰八永正十四後成恩寺關白卅三回追善

月日とそと戀くそあふく末の世よあまるそうりれ光ありおい

法華經授記品

續撰八永正十四二後成恩寺關白卅三廻追善

咲そ花の光戀つきてくれ竹乃四さひやおおし春波知らん

忌日

〔大乘院寺社雜事記〕九十 文明十六年四月二日、

一後成恩寺殿御忌日也、功德風呂立之、〇忌日ノコト、文明十七年、十八年、延德元年、二年、三年異事ナキニ依リ略ス、

〔政覺大僧正記〕六 文明十六年卯月二日、戊午、

一後成蘭（恩）寺殿御忌日也、功德風呂在之、〇忌日ノコト、文明十八年、延德元年、二年異事ナキニ依リ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕百三十九 明應三年四月二日、

一後成恩寺殿御忌日也、供具備之、於御靈供者、每月各於福智院供之、今日助

德風呂仰付之、三百文春辰ニ下行、燒手下部兩人也、去文明十三日（辛）辛丑薨給、當年ハ十四年也、〇忌日ノコト、明應五年、七年、八年異事ナキニ依リ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕百六十 明應九年四月二日、

一後成恩寺殿下御忌日、於法花寺隨求多ラニ頓寫供養之、法花經讀誦、尊覺供具備之、於地藏堂每月御靈供、〇忌日ノコト、文龜元年、二年、四年、永正三年各四月二日異事ナキニ依リ略ス、

〔大乘院寺社雜事記〕百七 文明十九年正月二日、

一後成恩寺殿御忌日、月忌也、小勤行、〇忌日ノコト、長享二年、延德元年、四年、明應二年、三年、四年、五年、六年、七年、八年、永正五年、各正月二日、明應九年三月二日、永正二年八月二日、四年十二月二日ノ條、異事ナキニ依リ略ス、

〇以下石碑建立ノコトニカ、ル、

〔大乘院寺社雜事記〕七十九 〇文明十三年十二月七日裏文書

小刀之事、被仰候折節、令所持候、可如何候哉、

橫四合惣上給候了、令祝著候、將又御石塔令遲々、誠背本意候、如何樣とも周忌中可廻計略候、於心中非疎略之儀候也、心事難盡紙筆候、恐々謹言、

十月十日　冬良

兒御中

法華寺ニ於テ隨求陀羅尼ヲ頓寫供養ス

月忌

冬良書狀

石碑ノ建立進捗セズ

隨心院嚴寶書狀

〔大乘院寺社雜事記〕○七十九　文明十三年十二月六日裏文書

委細御狀承候了、石委細物語候、一ヶ條事心得申候、又彼石塔事、何と〳〵せられ候へき、爰元のしきい中々申もおろかなる體共候、一向ニ我ら御所の事不存知候間、心安候、一みちニて當年とうへさへ大將あいり候いも候式候、骨をとうへおさめ候事さへせられす候、あさ汲しきまてニて候、我ら御りやうはかまいり左たるまてよて候、きと申候ても參ましき事共ニて候、毎々御推量候へく候、又善賢粉骨申つくしかたく、納返候つる物もとうり候はす候、筒以早便可下進候、法花無爲目出候、堯善體如仰候へく候、恐々謹言、

十月十日　嚴寶

是心院了高石碑ノ費千疋ヲ寄ス

〔大乘院寺社雜事記〕○百十三　延德四年七月三日、夜大雨下、

一石左衞門尉自三乃國罷上、是心院（了高）殿御文在之、紙五帖給之、モタヰ後成恩寺御石塔等足且千疋被上之云々、去月廿七日御文也、

〔大乘院寺社雜事記〕○百三十　○明應元年九月二十一日裏文書

文御うれしくおやえさせおとしまし候、せ心よりの物心え申て候、この御

冬良筆ノ墓所ニ參詣セズ

直指院慈養書狀

所へ申て、寺けへくとしくさつね候て申あとせ候へく候、又かミ五帖あいり候、又うすきいのやり候いす候、この文みたしうよくたし候へく候、しん御所御のやり候て、御めつらしさひし〳〵御さし給へく候、いつくもめてたき事にて、ふと〳〵御れやりまち入候よし申給候へく候、うしく、

慈養

大御所まいる　申給へ

御ちこ御中

東福寺常樂院ニ建ツ

〔大乘院寺社雜事記〕○百十三　明應元年九月三日、大雨下、

一直指院殿御書到來、後成恩寺殿御墓石塔、東福寺之常樂院ニ、去月廿六日ニ被立之、色々僧ニ被申合、石塔代八貫、供養方二貫、又色々ニ五百文下行云々、又妙花（（脫敎房））寺殿御墓石塔事、

〔大乘院寺社雜事記〕○百三十二　○明應元年十一月二十七日裏文書

一日大うさ事つけよ申入候つる、東福寺に御去るし廿六日たち候、去やうるうのそうをさのみ申候て、かる〳〵となり候やうニ申あとせて候、むりしは〳〵いあの御所の御やうも、このふんよて候やとニ、よきやうにと申

慈養書狀

敦房ノ石碑建立ハ延引

て候へハ、げゐもと申て候へと、千疋ゐてきり候いり候しいしを、八百疋ゐて申つけられ候、さりおうらそれよりハ、げんをいハゐうく候へく候、二百疋ゐてくやうをされ候、五十疋ハそこゐとおゐこやらん、いしともあつう井候こ入候はて御つう井候ぬ、さて人足の事ハ、いゐハ□□□所もけゐ〳〵と候ぬゐとこ、ふしんなとにもめしてつかゐ候ぬ、やうしやう寺の人夫を入候ハんゐとこ申つけて候、おゐもめし候御心やすく候物もさきの月はしめこと〳〵くゐさして候、めう花寺とのゝなと沈はゐてよとおほせられ候つれとも、いしきり候やうゐう廿日たて候よし申候ほとに、九月になり候ぬ、さきこおほせられ候、まつとく申候へとおほせられ候やうこ、ゐんみやう寺とのゝ御まゐこて候御のやり有て御ゐいり候へく候、お身ともこゐいり候へく候、御せきゐうたち候はゝ、うおらを御いと井そのうちよてをられ候う、のちの玄やうをん寺殿のゐ、御さうのをほきられ候やとこ、いま物ハ入候ハぬにて候、めう花寺殿のを御よて候ハゝ、この百疋を入候ハんもらんとおほえ候、この物をみな御うりありゐかり候ほとこ、むつかしくて、いうやともみて八月ちうよと申入候つる、よろつめてさた事申入候よし申給へ、かしく、

二日　ちきし院

大御所ゐいる御ちこ御中申給へ　慈養

○以下妻妾ノコトニカヽル、

〔實隆公記〕十六　延徳二年十月十日、己未、天霽、○中略後聞、今日關白母堂顯基朝臣姉也、逝去、四十八才云々、數日血塊所勞云々、故禪閤老後愛物也、法花寺、本光院、是心院附弟等一腹母儀也、

老後寵愛

〔尋尊大僧正記〕十一　延徳二年十月十二日、

一殿下御母三條殿一昨日十日入滅云々、難波令下向令申、

冬良ノ母町顯基女死ス

〔政覺大僧正記〕二十一　延徳二年十月十二日、辛酉、

一關白殿御袋、南御方、一昨日十日午刻、御歳四十八、御他界云々、言語道斷事也、難波修理亮罷下、巨細申、

一周忌

〔大乘院寺社雜事記〕百二十六　延徳三年十月十日、

一關白(冬良)殿御母儀南御方、今日一廻也、當月中御指合也、去年三十九歳入滅也、

〔大乘院寺社雜事記〕百三十　明應元年九月十一日、

一法花寺殿御母近衞殿尼前來臨、故三位（源康俊）入道息也、後成恩寺殿成就院ニ御座還御後、當年初而被下向了、

○兼良、近衞房嗣ト關白ヲ爭フコト、嘉吉二年十月是月ノ條ニ、三宮ニ准ゼラルヽコト、享德二年六月二十六日ノ條ニ、之ヲ辭スルコト、長祿二年十二月十三日ノ條ニ、源氏物語ヲ進講スルコト、寬正二年十一月二日、同三年十二月七日ノ條ニ、所領越前安居ノ地ヲ、朝倉敎景ノ弟慈視院光玖ニ侵サルヽコト、文正元年九月二日ノ條ニ、亂ヲ奈良ニ避クルコト、應仁二年八月十九日ノ條ニ、大乘院尋尊、米ヲ興福寺領ニ課シ、兼良ノ資ニ供スルコト、文明元年十月二十三日ノ條ニ、後花園法皇、御書及ビ御詠ヲ賜ヒ、歸京ヲ促シ給フコト、同年十二月七日ノ條ニ、兼良、所領紀伊池田莊ノ年貢ヲ督徵スルコト、同月十六日ノ條ニ、子敎房、信物ヲ贈リ、兼良ニ土佐下向ヲ勸ムルコト、文明七年二月十四日ノ條ニ、兼良、其所領攝津福原莊ヲ、春日社及ビ興福寺ニ寄附シテ、造營料ニ充テシムルコト、同年四月十五日ノ條ニ、幼子冬良ヲ敎房ノ猶子トシ、家督ニ定ムルコト、同年八月三日ノ條ニ、伊勢及ビ美濃ニ赴カントシ、奈良ヲ發スルコト、同年九月五日ノ條ニ、義政、兼良ニ和歌ノ點ヲ乞フコト、同月二十一日ノ條ニ、兼良、古今和歌集ヲ講ズルコト、同三年九月十八日ノ條ニ、花鳥餘情ヲ著スコト、同四年十二月是月ノ條ニ、奈良ヨリ美濃ニ遊ブコト、同五年五月二日ノ條ニ、薙髮スルコト、同年六月二十五日ノ條ニ、大和名勝ノ和歌ヲ詠ジ、南都百首ト名クルコト、同七年七月七日ノ條ニ、大內政弘ノ請ニ依リ、伊勢物語愚見抄ヲ寫シテ、之ヲ付囑スルコト、同八年七月是月ノ條ニ、奈良ヨリ京都ニ抵ルコト、同九年十二月十七日ノ條ニ、御宴ニ侍スルコト、同月二十三日ノ條ニ、細川聰明丸ノ部下茨木某ノ宿所ニ移ルコト、同十年正月十八日ノ條ニ、興福寺ヲシテ、其所領攝津福原莊ノ賦租ヲ督促セシムルコト、同年二月八日ノ條ニ、居ヲ室町第ノ東ニ移スコト、同年三月八日ノ條ニ、源氏物語ヲ講ズルコト、同年四月十日ノ條ニ、江家次第ヲ講ズルコト、同年六月五日ノ條ニ、越前ニ赴クコト、同十一年八月二十三日ノ條ニ、桃華藥葉ヲ著シ、子冬良ニ授クルコト、同十二年四月是月ノ條ニ、樵談治要ヲ著シ、足利義尙ノ問ニ答フルコト、幷ニ文明一統記ヲ著ハスコト、同年七

月二十八日ノ條ニ、江家次第ヲ進講スルコト、同年十月三日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕イ之部　一條兼良

○誓願寺文書（山城）
四月二十二日安堵狀

○北白川宮御文書
十二月二十二日書狀

三日、丁未、伊勢貞陸、伊勢大神宮ニ參詣ス、

〔親元日記〕六　三月卅日、甲辰、天晴、

一就兵庫殿（伊勢貞陸）御參宮之儀、御樽一兩種一荷、御進上了、

四月三日、丁未、雨、

一兵庫殿（伊勢貞陸）御參宮ニ、新三郎（蜷川親鄕）、

十三日、丁巳、曇雨、

一兵庫殿御下向、於路次不慮有御逗留之子細、令延引候了、

五月朔日、乙亥、曇微雨晴、

一松林院（豪雅）殿より、兵庫とのへ、御樫二荷兩種被進之、就御參宮御禮云々、御返事翌日被進之、

〔大乘院寺社雜事記〕七十　四月十六日、庚申、

一公方御代官伊勢□□（守貞カ）兵庫參宮、於關々不用過書、剩下向道猶以可取之由、支度之間、船ニテニケ上、希代不思儀（議）事也、末聞其例、公義（儀）無正體、作法不可過之、

〔實隆公記〕○文明十五年十月十一日裏文書

御家門さまより御書こあつらり、謹拜見仕候、祝著候、仰出され候こと、久祇候も申候いて、慮外千萬候、御懇の□畏存候、不食氣近日聊本復仕候事よて候、次今日御會御延引之由、得其意候、又兵庫助參宮事、不慮こ路次よて滯留之子細候て、一昨日九參著候、や□□明日可下向之由申上候、種々雜說候

文明十三年四月三日

諸關過書ヲ認メズシテ課稅ス　船ニテ歸京

蜷川親元書狀

しゝとも、くおぼしゝらぬ事こて候由、御心え候て、御披露こあつあり候へく候、ゝしく、

（錦川親元）不白」

四日、戊申、播磨守護赤松政則、太井源四郎ニ、同國一宮太井祝職及ビ所領ヲ（ウ八巻）「龜ゟう□（錦川親元）殿」ゟいる人々

還付ス、

〔伊和神社文書〕三〇播磨

播磨國一宮太井祝職、幷散在田畠等目録別紙在之、事、如元所返付也、早守先例、可専神役之状如件、

文明十三年四月四日

（赤松政則）兵部少輔（花押）

太井源四郎殿

播磨國完粟郡神戸庄一宮社太井祝職、散在田畠目録別紙在之、事、任去四日御判之旨、被返付訖、早如先例令全社役、可被致御祈禱精誠由、所被仰出也、仍執達如件、

文明拾參　卯月十日

則家（花押）

太井祝源四郎殿

〇政則、一宮神人ノ請ヲ允シ、太井祝職ヲ源四郎ニ返付スルコト、十二年十二月二十日ノ條ニ見ユ、

重能（花押）

則伊（花押）

五日、己酉、備後山内泰通、同國及ビ播磨ノ所領ヲ、其子豐通ニ譲ル、尋デ、同國守護山名政豐、之ヲ豐通ニ安堵セシム、

〔山内首藤文書（原題文徴）〕三〇長門

譲渡一跡事

合本領給所注文別帋在之、

右彼所領、泰通重代依爲私領、嫡子新左衞門尉豐通譲與所實也、但公方役等之事者、守先例、無不沙汰可勤也、幷弟共申付候在所事、任譲状之旨、無相違可渡付、條々申置候儀、万一相替事候者、可爲不孝（孝）敬仁候、如此申定候上者、於一跡者、不可有他人妨者也、仍爲後日状如件、

文明拾參年辛丑卯月五日　泰通（花押）

請地

山内新(豊通)左衛門尉殿

亡父上野介泰通知行分備後國播磨國所々幷請地等事、任譲與之旨、相續領掌不可有相違之狀如件、

文明十三年十月二日　(山名政豊)花押

山内新左衛門殿

〔山内首藤系圖〕

時通

泰通 山内上野守、法名高山浄昇、

豊成 新左衛門尉、大和守、○下略

○父時通備後地毘荘惣領職ヲ、泰通ニ譲ルコト、寶徳元年十二月晦日、及ビ同三年六月二十日ノ條ニ豊通之ヲ其子直通ニ譲ルコト、文明十五年九月二十六日ノ條ニ見ユ、又泰通母ノ契狀、便宜左ニ附收ス、

〔山内首藤文書(原題文徴)〕三長門

かくのことくに申さため候うへハ、此本ゑしやういつれニ候共、やん

くさるへく候、(泰通)高山のゆつりあとゝ申もの候ハヽ、ことにいつらうやうしよ、やうもんさるへく候、のちのためニらやうニ、ゑひ川、ゑもんよてうきおゐ候、

ちひのしやうの内、永代ニ我らうひ取□(候カ)て、かうさんへ(豊通)(花押)ゐいらを候ゑよゐやうの事、

合

一所　ちうまさ名、山下殿よりうい候、

一所　やすつね名、にし殿よりうい候、

一所　いしもさ名、こふけ、うりきん一つう也、きし左馬助殿よりうい候、此内ニふけいいまニ我らうゝへ候、いしもさいらうさんへゐいらせ候、

一所　かゐきさのくもんさやう、きしぬいのすけうさよりうい候て、うしろさうゐらと所領うるゐニゑ候て、うしろさうゐらいおりの寺へるいさいきしんまて候、くもん名いとのゝいまニ御ちきやうまて候、

右此まるのうりけん五ゐうさんへゐさしゐいらを候、□□此所れう

文明十三年四月五日

初七日名號御連歌

よう〳〵あるにより候て、ゑいさいのうさんへもさしあいらを候うゑい、御ちきやうさるへく候、もし〳〵此うりけんおちちり候て、いつくに候とも、又いつれのゑそんきやうさいの中候とも、ゑんさへもんとのゝちきやうて候うゑい、さをい候ましく候、もとのうりをんいつうさよりいて候とも、やんくさるへく候、うさんようしやうに御入候ときより、此まへあいらを候、此内いやさねにさんこふけの事い、いまに我らちきやうて候、そのやうの事い、御(時過)とくさうの時よりうさんの時まて、いまに御ちきやうて候、仍爲後日狀如件、

文明十三年丑七月廿八日　　ミおミ(花押)

ゑんさへもんとのへ　　ゐいらを候

八日、壬子、故一條兼良追悼連歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月八日、一條はきんのう一七日よおらを給ふ御心さしよ、御ときさせおいしまして、名のう御をん歌御はさあり、御人も、宮は御のうさ、ふしミとの、くもんゑゆ寺大納言、中ゐんの一位、のいちうをんは大納言、あねのうこうち新宰相、ミん部卿、

釋迦阿彌陀二佛名號

八日、早旦參內、以二佛名號有御連歌、釋迦阿彌陀也、

面哀傷

なけきよいことの葉もおき卯月のお脇申入之、

地口錢勅裁

むおしなみさよなくほとゝきす

御發句

○兼良薨去ノコト、本月二日ノ條ニ見ユ、

〔十輪院內府記〕四月七日、晴、入江殿御歸、自海住山以折紙、明日可有御連歌可參向之由催之、加奉字了、進人於南松院殿、

十一日、乙卯、稻荷祭、

〔東寺長者補任〕五　文明十三年辛丑四月十一日、祭禮有之、

〔東寺私用集〕一文明十三年辛丑四月十一日、祭禮有之、

〔資益王記〕三月廿日、、、、、稻荷祭禮今日午日也、地口勅裁事申出遣候、

稻荷社積錢半分ヲ納メンコトヲ乞フ

○稻荷社司、稻荷祭積錢ノコトニ就キテ、東寺ニ訴フルコト、便宜左ニ合敍ス、

〔東寺執行日記〕十四　三月廿四日、自稻荷申云、中門積錢五貫文之內半分可進之由、以兩使申云々、年預モ榮增他行之由、寺家雜掌返答了、曲事申也、去

積錢五貫文

文明十一年年預寶泉院之時、此事堅毎年可沙汰之由、社家衆五人請文年預方有之、案文者此坊ニモアリ、留主ノ間後ニ記之、

□人職掌座當頭傘儀祐　明頭傘定俊
中綱座當頭　祐乘　明頭　祐音
御酒座當頭　聽秀　明頭傘俊祐
八幡座當頭　太郎次郎　明頭　大炊法眼榮俊
粽座當頭　與俊　明頭傘宣俊
赤飯座兩大工各年也、

四月三日、稻荷ヨリ使アリ、積錢事、
八日、稻荷祭積錢ヲ、社家兎角申テ詫言申テ、出シ不可申カ、又ハ延引カト申間與丁ノ中ヘ相觸之、使了藏法師、道仲入道、御供錢無御沙汰申候、スクニ御山ヘ御返リ可有之由風聞アリ、若さ樣ニモ在者、與丁中ヨリ寺家ヘ可有注進歟、其時公方ヘ可申由也、自稻荷兩人來云、社務代、目代、御供錢、
十一日、稻荷積五貫文出之內　三百二文　中綱座
　　職掌　二百八十文
　　寄合座　二百六十文
　　八幡座　百卅二文
　　膝突布　百文
　　已上二貫八百九十四文　淨琳渡之、
　　殘一貫百文之內　四百十四文　別當分
　　四百十四文　執行分
　　二百七十二文　目代分四分一
文明十三辛丑四月十日、

〔東寺百合文書〕ち廿一口供僧方評定引付　〇山城
一稻荷社司兩人來、積錢事申、
十二日、丙辰、勝仁親王月次連歌御會、
〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　（伊井明茂）
んらあり、ふしミ殿も御ゐいりし、やうそんめしてをこう、ゆきうすうきついさゐいらもる、
〔實隆公記〕〇前田家本　四月十二日、御うたよて御さ
御會云々、主上渡御、源大納言、（久我宗綱）兵部卿、予、民部卿、言國、重治等朝臣、常茂、源富仲、

菅長胤(西坊城)等祇候、伏見殿同御參、頭役勵取之、予頭十月也、及黄昏退出、

勝仁親王御發句

御發句　親王御方

卯花や櫻の後ものある雪

五月

○五月以下月次連歌御會ノコト、便宜左ニ合敍ス、

渡御

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月十二日、宮れ御うさまて、御月かゝれ御きんうあり、御所さゝもなしあいらさらるゝ、ふしミ殿、御むろ、おとこさちをう〳〵ミこう、申はさゝくらの頭なり、御さう月あいる、めてさし、

頭役山科言國

六月

六月十二日、宮れ御うさまて、御月かゝれ御きん歌あり、おしあいらさらるゝ、

七月

紫宸殿ニテ涼ヲ納レ給フ

七月十二日、○略中宮れ御うさま、御月かゝれ御きんうあり、ふしミとのゝ□□まて、色々あいる、御さう月あいる、御ひし〳〵ミて、南殿へおらせおいしまして、御すゝミあり、

〔親長卿記〕十二　七月十二日、晴、參內、番也、於親王御方有御連歌、御月次云々、主上、親王御方、伏見殿、仁和寺宮、勸修寺宮、源大納言、予、民部卿、宗巧、泰仲、重

治朝臣、執筆、(冷泉)永宣、半井二位入道、(和氣明茂卿也)宿仕故障召進元長云々、

八月

頭役勸修寺宮常信法親王

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　八月十二日、○略中宮れ御うさまて、月かゝれ御れん歌、くをう寺れ新もんしゆ御とうかり、御てんミん□□□れ御さゝなり、

九月

九月十二日、○略中宮れ御うさまて、うし事まてあり、松木こしやうゆへまで○以下闕ク、

十月

頭役三條西實隆　白川忠富

十月十二日、御うさまてれ御連歌、御申はさ侍從中納言、ミん部卿なり、ふしみ殿、御むろゑ御あいり、中院ミこう、そのやういつそれ人もしこう、

〔十輪院內府記〕十月十二日、宮御方御連歌也、余初參候、入夜退出、

十一月

頭役甘露寺元長　唐橋在數

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　十一月十二日、御うさまてれ御連歌、右中辨、きよくら人申はさ、

〔十輪院內府記〕十一月十二日、晴、參宮御方御連歌、執筆右中辨元長衣冠非色指貫、貫首未拜賀之時猶如此、見舊記之由、昨日父卿演說、理致之事也、頭役元長發句同申入歟、晴てなをしはしい友や松の雪　庭のまく(まさこはカ)霜もをかれす

十二月

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　十二月十六日、御ゟゝされ御所
れ御連歌、ふしミとの、そんをきゝさゝ、ちも御あいり、源大納言、兵部卿あとの申

近衞政家、奈良ニ下リ、父房嗣ヲ省ス、尋デ、房嗣及ビ一乘院教玄、政家ト
共ニ京都ニ抵リテ、諸所ヲ遊覽シ、復奈良ニ下ル、

〔後法興院政家記〕六　四月十二日、丙辰、晴、奉使者於南都、申刻終南著一乘院
被來賜一荷兩種、禪閤（房嗣）御向顏祝著無極者也、
十七日、辛酉、晴陰、向一乘院入風呂、令隨身極、
十八日、壬戌、晴、相伴一乘院、令遊覽東大寺邊、歸路被來此亭、有盃酌事、
十九日、癸亥、自未明降雨、於景陽軒有盃酌事、
廿日、甲子、雨下、行向一乘院、入風呂、禪閤有渡御、有盃酌事、
廿二日、丙寅、陰、一乘院被來、賜一荷兩種、明日余上洛、禪閤幷一門可有御上洛也、
信樂人夫七人、柱人夫三人召下訖、自一門人夫五人、以上十五人也、
廿三日、丁卯、朝陰夕晴、是日令歸洛禪閤幷一乘院上洛、今日令逗留宇治、森坊、自
木津乘舟至釣殿、入夜見螢、

政家房嗣教玄ト會ス
教玄ト共ニ東大寺邊ヲ遊覽ス
宇治ニ逗留盤ヲ觀ル
房嗣上洛ス

廿四日、戊辰、晴、入夜雷雨、自宇治、禪閤、余、小童幷一門等上洛、
廿六日、庚午、晴、禪閤長谷聖護院房ニ有渡御、種二荷折二合被進之、
廿九日、癸酉、晴、〇中略今日禪閤自長谷石（岩下同ジ）藏有御出云々、南酒二荷、折代一緒被遣
之、
卅日、甲戌、晴、向長谷聖護院坊、泉石尤有其興、於亭有盃酌事、次向石藏實相院、禪
閤御座、此所有盃酌事、及晩歸宅、今日文（盛都）紀長老同參、
五月一日、乙亥、夜來降雨申刻止、伯民部卿、西川前宰相等來勸一盞、次禪閤自石
藏還御、則有御出座、
十一日、乙酉、陰、時々小雨灑、是日禪閤御下向南都、可有御在京之由、種々雖令申、
依無御在所、先還御也、來秋可有御上洛之由被仰出之、一乘院於京都有所用
云々、今日不被下向也、
廿一日、乙未、晴、一乘院被來、明日下向云々、

〔大乘院寺社雜事記〕七十　四月十三日、丁巳、小雨、
一〇中略關白殿十六日可有御下向云々、禪閤御同道可有御上洛御用云々、
十九日、癸亥、雨下、

房嗣長谷ニ聖護院道興ヲ訪フ
房嗣長谷ヨリ歸ル
房嗣奈良ニ下ルニ居所ナキ爲メ在洛セズ
教玄奈良ニ下ル

一關白殿十六日御下向、廿三日可有御上洛云々、

廿三日、丁卯、

一關白殿御上洛云々、若槻庄人夫一人、横田庄一人、狭舜申請京上了、彼御上洛便宜云々、九條若君上洛、毗沙門堂門跡（公承）弟子用也云々、

廿四日、戊辰、

一昨日關白幷禪閤一乘院殿同道上洛云々、

五月廿三日、丁酉、

一一乘院殿昨日御下向之由承之、

〔長興宿禰記〕中　四月廿五日己巳、晴、今日參近衞殿下、禪閤近日自南都御上洛之間、御禮之儀申上者也、一乘院門主（鷹司殿御連枝）、同御上洛、入御有御一獻、予被召御前、數盞被下之畢、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月廿九日、○略中おんゑれ前□□（うカ）南とよりれやるとて、御宮けよ二色二うゐいる、大しやう寺殿よりゑんとう一をしきゐいる、

十三日、丁巳、大内政弘、末武宮王（長安）ニ、長門大井鄕ノ地ヲ安堵セシム、

房嗣上洛ノ爲メ酒饌ヲ獻ズ

九條政忠ノ子毘沙門堂公承ノ弟子トナル

〔萩藩閥閱錄〕八十二末武與五郎　政弘ノ判

下　末武宮王

可令早領知長門國阿武郡大井鄕内參拾石地事

右件地事、任本知行之旨、所宛行也者、早守先例、可全領知之狀如件、

文明十三年卯月十三日

十五日、己未、月食、

〔實隆公記〕○前田家本　四月十五日、己未、月蝕不現、引雲相掩、于時杜鵑數聲有其感、

〔本朝統曆〕戊辰　辛丑文明十三年、癸巳、四大朔乙巳、己四、十五望、亥五、月蝕三分弱、亥三、七、

十六日、庚申、日吉祭延引、尋デ、之ヲ追行ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月十六日、○略中ひよしれまつりゑんまんなり、

廿八日、けふれ御さう月ゐいる、日よしれまつりまて、御神事なり、ふしミ殿

月食現ハレズ

延引

邦高親王參內

祭禮諸司料足注進狀

御あいり、夜よ入て御神事とけて、ひる御あいりおき御人さち御さふらひあり、御さう月あいる、

〔宣胤卿記〕四月十六日、庚申、晴、晩景雨聊降、○中略聞、日吉祭延引云々、

〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記　四月十六日、日吉祭延引、廿八日、日吉祭、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲七十六勅封二十三番雜々

注進

日吉祭諸司料足之事

百卅三疋　外記御訪

百疋　六位史御訪

百疋　召使御訪

四百六十七文　木工寮

貳十疋　掃部寮

已上四百疋

右注進如件、

文明十三年卯月　日

〔親元日記〕六　四月廿八日、壬申、天晴、

一日吉祭禮無爲之由、西勝房注進翌日到來了、

庚申和漢聯句竝ニ連歌御會、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月十六日、○中略うゐん御まゐりあり、御ゐらんいつそのの人をまて御はしまあり、

〔十輪院內府記〕四月十六日、庚申也、可參之由有催、南松院殿□□(入來カ)秉燭時分參內、御連句以前殘三十句、御連歌五十天明了、郭公頻鳴、依耳遲不聞、○三月次聯句御會ノ條參看、

〔實隆公記〕○前田家本　四月十六日、庚申、晴、○中略及晩小浴參內、今夜可令守庚申給可祗候之由、過日依被仰下也、中院一位、勸修寺中納(大カ)言、海住山大納言、勸修寺中納言、下官、源富仲等、元修祗候、去月七日蕭韶御聯句殘三十句有之、半更事終、御連歌五十韵被遊之、一折中院執筆、二折海住山大納言執筆、及曙事終、今夜爲源亞相番代候宿、曉更又鵑數聲鳴雲上之咫尺有興有感、

賦何木連歌

うれ色も葵うけうふ簾哉
まはおよそろき庭の卯花　中院一位、

〔新撰菟玖波集〕　十七聯句連歌　文明十三年四月、内裏より侍し和漢連句は中
よ、常學臥陶懶、　肖柏法師
わう身うき世をいつちかへらん

武田國信、犬追物ヲ行フ、

〔親元日記〕　六　四月十六日、庚申、
一武田殿犬追物、
　○コノ後、國信、屢犬追物ヲ行フコト、及ビ伊勢貞宗、一色義春、浦上則宗等、犬追物ヲ行フコト、便宜左ニ合紋ス、

〔親元日記〕　六　六月廿五日、戊辰、晴雨、天
一於武田殿、朝犬あり、
八月廿六日、戊辰、天晴、
一於武田殿犬追物、
九月十日、壬午、曇、

伊勢貞宗第犬追物
一色義春第犬追物
浦上則宗第犬追物
貞宗太刀折紙ヲ贈ル
犬追物日記

一武田殿犬追物二百疋、
一瑞笑軒（伊勢貞藤）御見物あり、於貴殿夕御臺ゐいる、

〔親元日記〕　六　四月廿九日、癸酉、天晴、
一朝犬あり、於貴殿朝御臺あり、（伊勢貞陸）兵庫殿御留守事之御返報ニ云々、又犬追物
百七十疋あり、其後御酒宴及深更、
六月七日、庚戌、天晴、
一於一色（義春）殿犬追物あり、貴殿御出、
七月二日、乙亥、天晴、
一貴殿浦上所へ御出、朝犬あり、犬過て御禮、貴殿より御太刀、持、御折帋、千疋
（そしめて）
一貴殿より御太刀、持、御馬、朝御臺ゐいる、其後御休
四日被納遣之、御使堤三兵庫殿へ渡之、
息、晝以後こふしうさめ御酒ゐいる、犬追物日記親元調之、

日記

藤宰相（高倉永繼）殿　小笠原備前（政清）守殿
有馬
赤松刑部大輔殿　浦上美作守殿
伊勢因幡（貞藤）守殿　布施下野（英基）守殿

文明十三年四月十六日

飯尾大和守(元運)殿　荒尾治部少輔殿

小笠原刑部少輔(元清)殿　伊勢與一殿

伊勢兵庫助殿

伊勢守(貞宗)殿

犬そてゝ御酒そしまる、乗燭、

初獻浦上酌まて貴殿へ申之、太刀、助包、馬、鹿毛、四日引進之、同時小寺藤兵衛尉、太刀、持、中村駿河守、太刀、持、浦上勘解由左衛門、太刀、持、上原次郎左衛門、太刀、持、浦上五郎、太刀、持、此五人方へ各太刀、持、以御使被送遣之、

兵庫殿へ御太刀、

以後貴殿御酌まて、亭主ニ盃そしめらる、御太刀、被持、御馬被遣之、其後又兵庫殿御酌まて、亭主ニ盃そしめて給、御太刀被遣之、

四日、丁丑、天晴、

一浦上方へ御使堤三兵、一昨日御約束之御馬、黒月毛、印雀目結、被引遣之、兵庫殿より御馬、河原毛、印雀目結、

一浦上一昨日之御禮まゐ參、太刀、長光、刀、國重、盃、堆紅、段子一端、赤地、引合、以上持參之、御對面、御酒給之、太刀家助、進之、久所持之由申之、又御太刀、月山、御鐙大つゐ直鉢、被遣之、

五日、戊寅、天晴、

一浦上兵庫とのへ、先日之御禮ニ參、昨夕於貴殿酌之間延引、太刀、國宗、馬、鹿毛、進之、以次新造御禮太刀、糸、千疋、

九月朔日、癸酉、天晴、雨、

一貴殿一宮殿犬追物ニ御出、

十七日、辛酉、賀茂祭、

〔京都御所東山御文庫記錄〕御湯殿上日記　甲二十二

もゐいる、

十七日、かそのまつりまて、御神事いうりなり、御うちまつりけ御さう月り

とゐいる、

〔宣胤卿記〕四月十七日、辛酉、晴、賀茂祭、亂中亂後不及沙汰、

小寺藤兵衛尉

伊勢貞陸則宗ニ馬ヲ贈ル

守矢政實　初陣仁科香坂等ヲ援ケ政滿ヲ和朝ト攻ムル長家光睦

捧莊

〔實隆公記〕○前田家本　四月十七日、辛酉、晴、今朝爲都護卿番代請取祇候、巳下刻退出、及晩歸參、賀茂祭、御內祭御盃有一兩獻、

〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記　四月十七日、今日賀茂祭也、

十九日、癸亥信濃小笠原長朝、山家光家ト兵ヲ構フ、是日、諏訪政滿、光家ヲ援ケテ、兵ヲ眞志野、府中ニ出シ、尋デ、歸ル、

〔守矢滿實書留〕○信濃　一小笠原民部大輔長朝代官廡生伯耆守朝重、御符祝三貫三百廿參、就然山家爲合力、諏方刑部大輔政滿伊那郡引卒、四月十九日、眞志野迄御門戶出、同廿三日、符(府)中御出陣、□(神カ)長二男神二郎政實始出陣、十六才、然仁科、香坂當方同心、不慮ニ和田城被責、井河山家無爲儀可有、五月六日御歸陣有、

〔守矢氏舊記〕○坤信濃　文明十二年、庚子、明年五月會御頭足

一左頭、捧庄小笠原民部大輔長朝代官廡生伯耆守朝重、御符祝三貫三百廿三文、○中略、此次年諏方勢符(府)中四月十九日出陣、神二郎初出陣申、無合戰、和田城責候、敵身方手負死人數多、

○長朝、仁科盛直ト戰フコト、十二年八月十六日ノ條ニ、藤澤有世ヲ援ケテ兵ヲ出シ、信濃山田城ヲ攻ムルコト、本年八月二十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔信府統記〕十八松本領古城記　筑摩郡中古城地城庄內組　小島村古城地、井河ノ城ト稱ス、沼城ナリ、本城地形少シ高シ、廣サ東西四十間程、南北五十六七間、東ノ方ニ虎口ノ跡一所アリ、其涯今ハ蕪地ニテ、草生ジ水ツキナリ、本城ノ內皆畑ニ成リタリ、土手形、矢倉臺ノ跡ト見ユル所塚ノ如クナリテアリ、四方沼ニテ流レモアリ、其內ニ取分ケ深キ所ヲ釜ト云フ、辰巳ノ隅ニ黑田釜ト云フアリ、其所ヘ南東ヨリ流ル、ヲ、鐙取リト云傳フ、所由アルニヤ、惣テ此地ノ流レ水上アル川ニアラズ、皆近邊ノ出水ナリ、西ノ方ノ川（是ヲ故號セルナルベシ、）幅六七間、（足入故渡ルコトナラズ、）此川ト本城ノ間、南ニテハ十七八間ノ所モアリ、北ニテハ七八間バカリアル所モアリ、皆田ニ成セリ、川ノ向フ西ノ方ニ鎌田村アリ、是ヨリ西南五六町バカリニ征矢野村アリ、此北ノ方マデ三ノ曲輪ニテ、今ニ堀ノ跡アリ、今ノ鎌田村ハ曲輪ノ內ナリシト云フ、此城邊ノ水皆北ヘ流レテ、薄川田川ヘ落ル、本城ノ地形モ南高シ、凡テ此近所ノ田ハ深田ノ足入多シ、（小笠原家ヨリ久シク在城アリテ、林ノ館ヘ移ラレシ後マデモ兼テ引移セルコト、委ク城主記ニ載ス、）嶋立右近（松本ノ地ヘ正元年、嶋立支族ナリ、）其後ハ坂西氏何某領セリ、（小笠原ノ城ヨリ戌亥ノ方二町二十間アリ、）小島村ハ松本ノ城ヨリ午ノ方八町三十間アリ、

文明十三年四月十九日

山家城

東寺秀興ノ死ヲ弔ス

〔信府統記〕十八 筑摩郡中古城地 古城記 山家組 中入山ノ古城地、中入村ヨリ丑寅ノ方五町、本城ノ平、南北十一間、申ヨリ寅ヘ十八間、今之ヲ山家ノ城ト云傳フ、山家薩摩守ト云フ者、永正ノ頃此邊ヲ領セリ、〇下略

二十日、甲子義政、鹿苑院ニ詣ル、

〔親元日記〕六 四月廿日、甲子、曇雨、

一御成鹿苑院、當年始、

廿二日、丙寅、曇晴、

一御成相國寺方丈、

〇義政、相國寺ニ詣ルコト、便宜合敍ス、

幕府公人奉行丹後守松田秀興卒ス、子數秀嗣グ、

〔親元日記〕六 四月廿日、甲子、晴、

一松田丹後守秀興逝去、于時公人奉行、

〔東寺百合文書〕ち廿一口供僧方評定引付 文明十三年 五月十六日、

〇山城(敏秀)一寺奉行松田對馬守老父丹後、他界云々、仍可有御訪歟□披露之處、乘儀(讓下同ジ)云、年預百疋可有持參旨評義了、

經歷

評定始奏事役

恩賞方奉行

的奉行

高倉第造營奉行

河上諸關停廢使節

公人奉行

〔齋藤基恒日記〕文安元年正月廿六日、政所內評定始、〇中略松八左秀興、

寶德四年壬申十二月同(二日)日、

管領京兆

一松田丹後守秀興參恩賞、

享德二年癸酉五月九日、內宮役先來(夷カ)被寄諸國段錢、頭人加州(假名爲信)開闔玄良(齋藤光豐)、國分、

〇中略松丹、秀興、

三年甲戌正月十一日、御評定、管領京兆、

奏事松丹秀興、

康正元年乙亥十二月、

一御的奉行松丹秀興承之、飯孫右依指合之清也、

二年丙子四月十一日、同日、高倉御所常御所立柱上棟、

奉行、飯總爲數、松丹秀興、飯加之清、

八月廿九日、河上諸關停廢使節、同九月十一日上洛、以納錢方二千疋給之、

玄良、松丹秀興、清八左貞秀、

一公人奉行、〇中略

松丹州秀興、宗棟、

法名

〔蔭涼軒日錄〕長祿三年十二月十五日、勝定院御佛事錢請取狀、奉懸于御目
也、○略中松田丹後守五貫文、○略下
四年六月十八日、○略中南禪寺瑞雲院失安堵御判事、檀那一色左京大夫(義直)殿、幷
大德院之狀奉懸于御目也、一色殿奉行松田丹後命之、
八月廿二日、○略中赤松次郎(政則)法師就大館兵庫助賀州知行分之事、以訴狀白之、
御糺明之間、可相待之由、可命訴人奉行松田丹後守之由被仰出也、皆歡喜之、
寬正二年八月十九日、林光院奉行事、以松田丹後守被仰付、卽命之、
九月廿七日、○略中三會院就借物之事、嚴漢都寺被召出之事、命院奉行松田丹
後守也、
三年七月十九日、○略中臨川寺領賀州宮腰內平木尤對寺家爲不義者、可逐放
之由、自寺家以連判之狀被歎申伺之、仍以寺奉行松田丹後守、伺彼訴狀、可成
御奉書之由命之、
六年十一月十九日、○略中天龍寺大衆者帳各加判、而異口同音、以東班五員之
內、殊以高都聞可被處遠流之由、被仰出之望有之、與伊勢(伊勢貞親)守幷寺奉行松田丹

訴人奉行寺林光院三會院

臨川寺

天龍寺

後守、飯尾兵衞大夫(貞有)、可屬無爲之事量之、

〔齋藤親基日記〕寬正七年正月廿六日、政所(春日亭)內評定著到、寬正七年正月廿六日、○中略不參
松丹秀興、
二月十七日、御前御沙汰始、○略中伺事次第、○略中松丹州秀興、○略下
廿五日、一列伺事在之、(可爲去廿一日出之、依御虫氣延引、)○中略秀興、
五月元、正十五日、相國寺新命入院御成在之、如先々右筆方參候、○略中秀興、
七月文元、正廿八日、番伺事在之、(二ケ度目、秀興、歡樂之間不參、)
文正二年丁亥正月廿六日、政所內談始、於春日亭可執行之由、雖被相觸之、若
公樣御所ニ御座候間、俄於住宅在之、
政所內評定著到、(文正二年正月廿六日、○中略、)松田丹後守、○下略、
二月廿三日、伺事番次第、(文正二、三、○中略、)二二廿
四番　松田丹後守、(秀興、○下略)

政所評定衆

右筆

十三回忌

〔春浦錄〕本光寺殿前丹州太守林翁棟公十三回忌
這香、國家棟梁、枝葉相聯、其香氣撥不散、厥根柢鑽彌堅、博山爐上纔拈出、大地
群生脫絆纏、大日本國（――――所鳩善利、爲覺靈資嚴性地者也、共惟

頂門一著、青寥々白的々、突出威音那畔、淨躶々赤洒々、顯露空却已前、謂之至聖命脈、名之列祖津國、前丹州〻〻禪定門、如是見得、履踐確然、早知言下無多子、信敎外有別傳、加之運籌千里決勝、聽訟万邦稱賢、親族葛藟蔓々、兒孫瓜瓞綿々、銀山鐵壁百千億劫、朝露水泡一十三年、畢竟落在何處、滿架薔薇香拂々、當階躑躅色娟々、正與麼時某巍々堂々臨玆勝筵、與諸人眉毛厮結、終日交肩、還相見广、以香點云、凜々威風今尙在、遼空一鍬過西天、噫、

○幕府、秀與ヲ諸國段錢總奉行ト爲スコト、十年六月二十日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕マヽ之部　松田秀與

○菊大路文書（三ノ城）

文明五年八月十六日奉書

二十三日、丁卯、御樂始、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　四月十五日、御らくをしめれもくろくいさゝるゝ、

廿二日、雨ふる、御らくれ御しゆらい御らくもん所よてあり、

廿三日、御らくをしめ、木ちやう所よてあり、御しよき、（ミ）宮れ（勝仁親王）御らさ御しやうあそをす、ふしミ殿、（敎季）きくていれ右ふ中院一ゐ、（通秀）そ（基有）れゝ前中納言、（松木宗綱）ひやうふ卿、（白川資益）をく二ゐ、二條前宰相、（平松實冬）四ゐしれ宰相中將、（季經）ときくまれあそん、（綾小路）としらをれ朝臣、（山科）そ（國）ととみ朝臣、地下まいより秋いしめて十一人あいる、（白川）もけうちれ朝臣、（田向）をけはるれ朝臣（豐原）もくろく万さいらく、三さいのきう、らんをゆう、五しやう樂れきう、大平樂れきう、小らう子、（季繼）ほんたい、をる〳〵と日の中まをつる、めてさし、つ祓れ御所よて御てんしん、御らをらけれ物、御さう月あいる、

〔宣胤卿記〕四月廿三日、丁卯、晴、今日內裏御樂、參用余袍借之間、遣俊量朝臣、御樂當年初度也、

〔實隆公記〕○前田家本　四月廿三日、丁卯、晴、○中略今日禁裏有御樂云々、當年初

樂目錄ヲ出サル

習禮

議定所ニテ行ハル人數

樂目錄

今年初度

度也、樂目錄參仕人々等、可尋記之、

〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記　四月廿三日、御樂有之、

○五月二十日、六月二十一日、御樂ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月廿日、御樂あり、御ろくもん所よてあい〳〵あり、宮ゝ御方、ふし見殿、さ□□□それ〳〵中納言、兵部卿、宰相中將、二條、中中納言、くらの頭、としろすけあそん、もとあつ、地下より秋しめて左つ弁五人、御こ庭よし、地下人（ヘカ）もいさるゝ、

六月廿一日、より秋めして御樂あるうとす、

〔親長卿記〕十二　五月廿日、晴、元長參內、有御樂云々、

〔歷代殘闕日記〕八十七言國卿記　五月廿日、御樂有之、

二十六日、庚午、義政夫妻參內シテ、宴ニ侍ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月廿五日、○中略あすれ御あ（イカ）うちきらるゝ、

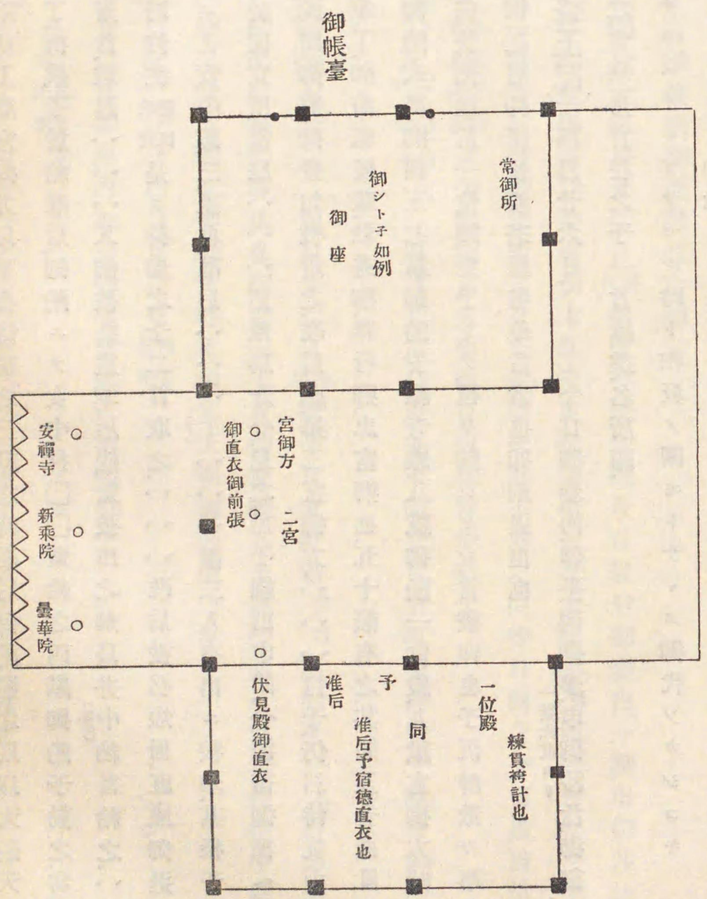
廿六日、むろまち殿御申はさ、あそれ御しやうしんゆへ、こくけんとくとてんそうよおほせら㒵て、九よりさきよ御あいり、御さ弁御あいりあるへきよ、おそくてまつ御しおうあるへきさ、されとも三（よカ）さんあとよ御さふらひあるやうよ、とくと御申あ㒵と、ゑひ㒵よよてそれ分御とそしゆそ（ママ）しうかさ紛てやうて御あいり、ゑよこんれうちおれとそ、御さう月、つきよなる、さういよて宮れ御ろされ御さう月よてあいりて、それもうへおおしくとをる、御あいりよりさきよ、いつそのことくをり十ろう、御おさへ物十ろう、御さう月れさ弁二、やおき十ろ、いおろう御さる三ろあいる、おんろすか□（さカ）紛てもゑ〳〵さつぬるよ、御てん左むまて十三こん、御よ弁れよし申、ゑんろ弁十こんあいる、御てんしんあまさあるおより、こんよそへてあいる、げふれ御人を、宮れ御方、ふしミ殿、あん（観心尼）をん寺殿、ゑんをう寺との、つうけん（元稙）寺殿、二條大（持通）ろうおとも御あいり、御しやくいつそのことく、三こんめよむろまちとれとりあいらせら㒵て、そうおあいれさんくも弁まてはなし、御しやく四おんよ大ろう、五おんよふしミ殿、六

酒饌ヲ獻ズ

人數一

おんまおんをん寺、七おんに御さ寸、八おんおおんをう寺殿、九おんま宮れ
御うさ御とりあり、十おんまでんしやくまでそうへさふ、くしまてあいる、
御さ寸れ御ともまでむろまち殿上らふ權大納言なりとある、御しやくと
もまであいらせさまふ、あけ程までの一こんなり、めてさし〳〵、いつものこ
とく御さうさあり、御さる内侍所ひむろしれとういんとのへあいる、
廿七日、○中略昨日れめてさ、てんりうへ文にて、むろまち殿へ御申あり、
〔蟬冕魚同〕四月廿一日、□□□□□廿六日准后御參内可參候由、爲准□(后)被
仰之、畏入由返事了、
廿六日、庚午、晴、今日准后參内、一獻申御沙汰、仍予午一點參内、直衣、生絹、平指貫、
平緒如常、殿上人雅冬(冬綱)、諸大夫賴秀(丹波)、番頭二人、單物著侍三人、内々乘輿、不可爲例者也、先立
寄伯卿許、直衣文、出盃祝著了、則參内、自唐門參了、自高遣戸堂上、于時勸修寺亞相、
侍從中納言實隆、祇候、准后漸可被參云云、其間鬼間候了、無幾程准后御參、内々
乘輿也、直廬長橋也、令著直衣、直衣、白文菱如常、指貫、白綾、大帷不重之、韈略之、自六月至九月如此、
御參御前、次予同參御前、常御所指圖注左、一位殿駕出車被寄長橋、練貫袴計也、

當座和歌
義政二條持通ニ祇候ヲ勸ム
持通參内



御陪膳上﨟、宮御方以下典侍役之、三獻之時准后御酌勸之、則以天酌天盃頂戴了、御銚子於給准后、御酌ニテ女中幷□□輩給之、四獻御酌予勤之、當座一續卅首、勅題、、、、、入御被染宸筆、居硯蓋被出之、飛鳥井中納言雅康給之、、、、、日野侍從資政朝臣、是ヲ持參之、予二首取之、、、、、准后被召短冊、直廬御退去、予酌ニテ女中悉三盃也、准后、、、、、(予)、、、、、兩三人召出ニ被參、其後予退御前、於便宜所當座、、、、、招飛鳥井令見之、無子細由申間、令淸書御前へ、、、、、此間御製御發句被遊之、准后脇、第三宮御方、、、、、、、目予、仍召侍從中納言執筆了、御前祇候輩、敎秀卿、雅行卿、忠富卿也、五十韻有之、其間及音曲亂舞、五獻御酌式部卿親王、七獻御酌安禪寺殿、八獻御酌一位殿、九獻宮御方、時宜公武共快然、准后一位殿對予シテ、種々御シヤレ言被仰也、予沉醉散々事也、今日依准后仰祇候、祝著難盡筆舌者也、卯刻退出也、

〔資益王記〕四月廿六日、ヽ――今日御參內、御臺同御參、申御沙汰、御劔中將(一獻武家ヨリ)(白川資氏)持之、當座卅首在之、予一首詠進、名所關、

サラニイマヲサマル時ト相坂ノ關モトサヽヌ御代ソカシコキ

寄星戀〇歌闕ク、

〔親長卿記〕十二　四月卅日、陰、〇略中今日聞、去廿六日有御參內、每年事也、有三十首御續歌、御連歌五十韻云々、

〔宣胤卿記〕四月廿六日、庚午晴、僧招請如例、今日准后御參內、一獻申御沙汰、每年之佳例也、御臺同御參、御大飮深更御退出云々、大閤二條殿同御參云々、今日爲賜一獻、各可參番衆所云々、余故障、大略不參之由、後日聞之、今日指貫借遣兩人、侍從中納言、民部卿、又御所洗人夫事、昨日遣切符於衞士、

〔實隆公記〕〇前田家本　四月廿六日、庚午、天晴、今日室町殿參內、一獻申御沙汰也、

〔長興宿禰記〕中　四月廿六日、庚午、晴、今日室町殿、准后、同御臺、一品、有御參內、御一獻准后申御沙汰也、御歌三十首、御連歌五十韻御張行、執筆侍從中納言實隆卿、二條大閤有御參會、終夜御宴、天明御退出云々、

〔親元日記〕六　四月廿二日、丙寅晴、

一來廿六日御參內、御美物事諸家へ被觸申之、

廿四日、戊辰、天晴、夜雨雪、

一淡路(細川成之)殿より明後日之美物進納、鳥三、鯛十、鳥賊卅、使石成彥左衞門尉、

勅題三十首御續歌

御連歌音曲亂舞

義政夫妻持通ニ向ヒ諧謔ヲ弄ス

番衆ヲ召シ酒饌ヲ賜フ

獻上ノ酒饌ヲ諸家ニ徵ス

細川成之等ノ進獻

廿五日、己巳、天晴、

一赤松(政則)殿より明日之御美物進納之、鴈一、鳥五、鷺三、海月一桶、鮒鮓廿、上原次郎左衛門尉、

一武田(國信)殿より同前、宍や引五、貝鮑五十、上原七郎右衛門尉、

一細川勝久(勝久)殿より同前、鴈一、干鯛十、鮒鮓十、杉彌三郎、

一一色(義直)殿より同前、ひしくゐ一、鯛五、小倉彈正、

一菅領(畠山政長)より同、ひしくゐ一、鴈二、鳥五、ます三、宍や引三、遊佐與次、

一細川兵部少輔(政之)殿より、鯛十、かさめ一折、廿五、くらけ一桶、飯尾次郎左衛門尉、

但此三種ハ廿六日ヨ被納之、

一御一獻方へ渡分、

くゝい一、ひしくゐ二、かん三、鳥十、鯛十、鮒鮓五十、鹽引五、くらけ一桶、貝鮑五十、いり卅、

以上十種、此内白鳥、もし廿不足分、貴殿より被進之、

此分以目錄得傳奏御意、小預方へ渡之、御使淵田、うけとり高橋行松、兩判、

獻進ノ目錄
赤松政則
武田國信
細川勝久
一色義直
畠山政長
細川政之

廿六日、庚午、天晴、

一御參內、御一獻之間ニ、貴殿(伊勢貞陸)、因幡殿、於兵庫殿(貞陸)御屋形御休息あり、御湯つけまいる、其後御酒あり、乍次貴殿へしめて御出之間、自兵庫殿御太刀、御馬御進上、又貴殿より御太刀、御馬被進申、珍重之(々々カ)、

廿七日、辛未、天晴、

一御參內美物相殘分、

かん一、とり三、鷺三、たい十五、千鯛十、ます三、鹽引三、かさめ廿五、くらけ一おけ、

以上九種

此分目錄因幡とのへ御局へ御申入ありて、依御左右御末へ被納進之、御使山田、□□疋田九郎左衛門方ヨ渡之云々、

二十八日、壬申、前權中納言正二位唐橋在綱薨ズ、

〔宣胤卿記〕四月廿八日、壬申、雨下、後聞、今日前菅中納言在綱卿薨去云々、菅氏長者也、

〔東寺過去帳〕正二位前中納言在綱卿 慈恩院殿 眞海祖父、吉祥院長者、文明十三四廿七、七十六歟、明六

官歷

マテ十七年、

〔公卿補任〕非參議從三位菅在綱　嘉吉四年正月十八日敍、父式部大輔在直卿、母、文安三年大藏卿、上階已前任之、爲猶敍留歟可尋、十二月十二日任參木、同四年三月十七日兼丹波權守、同五年正月廿九日辭參議、年月日敍正三位、〇以四十、上享德二年月日敍從二位、年月日任治部卿、長祿元年十月十一日喪、父、寬正元年月日敍正二位、九月八日任權中納言、同月十日辭、同五年七月日爲長者、〇以四十二、上文明九年十二月日勅免、〇以四十三、上

〔尊卑分脈〕菅原氏　唐橋

世系

在直

策 在綱 本在教、長者、式部少甫、大藏卿、文章博士、少納言、正二、權中納言、參議、文明十三、薨

策 在永 文章博士、少納言、參議、從三、式部大輔、長享二、九五卒、

○在綱、京都二條三條間ノ荒地ヲ賜ハルコト、長祿三年五月是月ノ條ニ、氏長者ニ補セラルヽコト、寬正五年七月是月ノ條ニ、西陣ニ在ルノ罪ヲ赦サルヽコト、文明九年十二月是月ノ條ニ見ユ、

是月、義尚、點眉ヲ廢シ、折烏帽子ヲ著ス、

異裝ニ依リ義政ヲ省セズ

〔宣胤卿記〕四月八日、壬子、晴、〇中略聞、近日大樹令著折烏帽子給、被置御眉毛、立烏帽一向不可有御著用云々、仍准后御亭無御參、以外事也、

〔親元日記〕六　十月六日、丁未、雨、

一御方御所樣御ゑやう、御地うちんよ、色々の落葉を、こき梅、うをむめ、松のおちとを、もへきニ御ぬいめつけよ調進之、

○親元日記所載ノ義尚著衣ノコト詳ナラザレドモ便宜合敍ス、

松木宗綱、伊勢ヨリ歸京ス、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月三日、（松木宗綱）ひやう部卿、いせよりれうりてそんよ、ゑこう、御まゐ二色、御さる一うゐる、御さう月さふ、雨ろせふく、

○宗綱、伊勢ニ下ル日、及ビ歸京ノ日詳ナラズ、姑ク本書ニ據リテ揭書ス、

五月小乙亥朔盡

一日、乙亥、御祝、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月一日、あさ御さゝつきあ
いる、○中略、およひの御いわひのことし、ふしミ殿御つゝかせ御申、

三日、丁丑、石見三隅貞信、益田兼堯、同宗兼ニ、誓書ヲ遣リテ、其所領同國伊
甘鄉等ヲ競望セザルコトヲ約ス、

〔益田家什書〕五十七　「裏在判」（朱書）

於今度一亂中、益田之御一跡御判申請之由被聞召候、更以無其儀候、縱雖
有御判之物幷支證等、末代不可致競望候、殊御知行分伊甘鄉事、雖如何之
躰之支證所持仕候、可爲反古候、自今以後不可有望之儀候、若於子孫、背此
旨候者、以此一筆、可被達上聞候、若此儀被及御不快候者、此書違不可成證
狀候、此條々僞候者、
伊勢天照大神宮、熊野三所權現、八幡大菩薩可罷蒙御罰候、
仍書違之狀如件、

文明拾參年五月三日

益田越中（兼堯）殿
益田孫次郎（宗兼）殿

貞信判　「裏ニ在判」（朱書）

○貞信、兼堯ト石見大濱ニ於テ和解シ、尋デ、盟書ヲ遣ルコト、九年九月
二十七日ノ條ニ見ユ、

五日、己卯、賀茂競馬、勝仁親王、尊敦親王等、濟ニ之ヲ覽給フ、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月五日、○中略、宮の御うさ、二
宮、御ゑのひ事よて、けさと御らむさらるゝ、ふしみ殿も御いてあり、むろま
ちとのゝ二宮の御あやよくのよし御申ありて、御くるまよて、御ともよ上
らぬ、新大もも、御あちや〳〵なと御あいり、御るすことに、大もも、をひ
さゝしき御てうしあいらさらるゝよ、そやくくもん御よて、御ともれ女そ
うさち返とりもろさふて、御ひさしよて御さう月けとをりあいる、めてさし、

〔宣胤卿記〕五月五日、己卯、晴、○中略、今日賀茂競馬、親王御方被立御車御見物、第
五番時喧嘩出來云々、

〔長興宿禰記〕中　五月五日、己卯、晴、賀茂競馬如例年、親王御出、御立車御見物

邦高親王モ御覽セラル
大納言典侍酒饌ヲ獻ズ

一乘院敎玄見物ス
近衞房嗣等見物ス

云々、被(尊)下一乘院門(敎玄)跡同道御見物内々儀也云々、

〔後法興院政家記〕六　五月五日、己卯、晴、禪閤(近衞房嗣)、余、小童(尙通)、一乘院等令見物競馬、棧敷經藏也、聖(道興)門又有見物、令參會、

端午節供、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　五月四日、山くさまいれまきいつ

邦高親王藥玉ヲ獻ゼラル

そのことくあいりて、御くすりとそきらるゝ、ふしミ殿より御くすさまあ
いる、〇中略なうさねやうふれ御うすやうあいらもる、けさとくさやうふ
ふきあいらもる、

義政ニ藥玉ヲ賜フ

五日、あさ御さう月あいる、五てういつそのまきあいらもる、おりさねもあ
いらもる、〇中略けふれ御ゆも大もを御あいり、御とん〳〵(へ)いつそのことくあ
いる、ふしミとのより御□□□御つり丹御申あり、むろまち殿へれ御くもを
さねいつを昨日□□あいらさらるゝ、御とくに日まてけさとくてんそう御
つり丹まてあいらさらるゝ、

〔親長卿記〕十二　五月五日、晴、入夜參內、依御祝也、

中御門宣胤ヲシテ、謎連歌ヲ詠進セシム、是日、之ヲ上ル、

〔宣胤卿記〕五月五日、己卯、晴、端午佳節、幸甚々々、顯乘來、今日謎連歌付侍從中納言進禁裏、可書進之由、以彼卿先日被仰下之故也、昨日持參之處、御聯句無骨之間不進、他人無此類、余始而沙汰之、

滕仁親王ニ謎ヲ獻ズ

ある雨乃晴ぬるあとや草れ露　蕗也
こゑいうへある萩れ玄さらせ　御器發句脫後日直進之、
曉れ月のいる後まとろみて　茜
鐘まういうり夢そみしうき　粥
菊れうへそらへい露れあともあし　沓
草まこゑある萩れ下うせ　將基(碁)
立うへる旅とてさをさそいまし　直垂
みるをいしめれあつまちの末　道
春れくる方より花のやころひ(て脫カ)　東方朔　菟　此分可然之由被仰下、
山の尾上うまりうをミぬる　鍰(大佛)　松山　同
又別紙注之、進親王御方解樣い不付之、
一とし立うへる年れそしめ

シト、

御製謎ヲ賜フ

一梅ゝ木を水よゐてうへよ
一屋ゝ軒のあやめ
一氷ゝ上魚躍て孝子ゝ例(アト)をゝこそ
一無上無二あるゝ雪ゝうちの笋　巫
一空ニ入てうへを飛去ゝ列子う乘物　迦葉
一そゝうそうせしうら嶋うへる　マシラ
一西川(行カ)ゝさとりて後髪をそる　經
一あゐ日よひゐおし舟ゝ上浪ゝそこ　鐙
一紅の糸くさりて虫とゐる　虹
一水魚ノヘ双テ成字　漁人
一風終成雨聲　香又せら鷹名

十四日、戊子、晴、〇中略晝以兵部卿、先日余作進謎連歌神妙之由被仰下、其内解樣被替被仰下、又發句解樣御不審、可思案改歟之由被仰下、又御製作一被仰下解申了、

前妙心寺住持宗深、雪江同寺敷地ノ内ヲ、法弟住持宗隆景川ニ付屬ス、

大檀越ハ御歷代ハ外護ハ細川政元

〔妙心寺文書〕〇十山城龍泉菴

正法山妙心禪寺敷地未申角方十五丈者、付屬當住景川和尚了也、妙心禪寺敷地者、元來花園院之御所跡也、到今以今上皇帝代々爲大檀越也、外護者細川九郎政元也、

文明十三白端午節

東堂比丘宗深(花押)
朱印

七日、辛巳、紫野今宮祭、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月七日、宏(半井常茂)やうもおもし一ゐいらせる、いま宮ゝまつりゝ御物いゝともゐいらせる、

〔宣胤卿記〕五月六日、庚辰、晴、〇中略明日今宮祭禮物忌札泰清(西洞院)卿送之、

七日、辛巳、晴今日今宮祭也、物忌札今朝又寮頭有宗(土御門)朝臣送之、

御小弓アリ、是夜、黑戸御所ニ行幸シ給フ、又紫宸殿ニ渡御シテ、御涼ヲ納レサセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月七日、〇中略すゝめこゆゝあそいす、ふしゝ殿、御むろも御ゐいり、おゝよひ別てんよくろとへなりて、御

小歌アリ
宮女酒饌ヲ獻ジ御宴アリ
爲親ノ子爲學童形ニテ初テ出仕ス
爲學代始ノ御禮
官歷

さう月あいる、夕うさやとよ、ゑゝてんゐなりて、御もゝそあり、月おもしろくて、御さう月あいりて、こうさなとまてもあり、

十二日、一日南てんおての御ひとんれ廿よ、上らぬ、新大ももし、御あちやゝ、中内、大もなとあいらさらるゝ、もちとそ、そのやうふしそとのゝ御ちうけん、いしゝとうさふ、おひうことおひしれき（ら カ）ゝの御申ともよて、御ひしゝあり、

九日、癸未、少納言從四位上五條爲親卒ス、

〔宣胤卿記〕五月九日、癸未、晴、○中略後聞、今日少納言菅原爲親朝臣死去、廿六歲、內損長病存內事也、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　四月廿三日、○略中五條れあとよなるへきちこれしめて、ゑゆつし、御さいめんあり、御まあ二色二うあいる、

七月九日、五てうのちこ、代いしめれ御ひいよ、ゑこう、二色、御さる二うあいる、御さいめんあり、

〔諸家傳〕十二下五條　爲親

文章博士、

式部少輔

少納言、文正二年月日正五位下、廿歲、文明四年正月廿八日從四位下、廿五歲、同九年十二月十三日從四位上、廿歲、

〔親長卿記〕六　文明七年二月一日、晴、○中略除目聞書到來書加之、○中略

攝津權守菅原爲親　兼

〔宮內省圖書寮所藏文書〕敍位除目女敍位古文書　文明十二三廿九、

縣召除目聞書○中略

越中權介菅原爲親　兼

〔尊卑分脈〕菅原氏　爲賢

爲親　策、文章博士、式部少輔、少納言、從四上、早世、

爲學

〔爲學卿記〕永正十年癸酉三月九日、○略中五月雖亡父卅三年當五月、今日取越如形營佛事賞不斷光院衆谷（各カ）僧、而三部經一部讀誦有之、

〔資益王記〕文明十六年三月十三日、

故五條爲親死去後、今五條、文治丸、高辻長直妻可爲子之由、彼實母申定、下向播

系圖

爲親ノ室　死ス
三十三回忌

始行

□(歟)、當年正月死去之由注進候、彼實母可爲高□(辻カ)妻之子之由、令契約候上者、不可著服候哉否之由、被尋仰出候、入見參候樣、御返事可有御申候、

忠富

故五條爲親死去之後、今五條、(文治丸、)高辻長直妻可爲子之由、彼實母令契約之間、不可著服否事、彼子長直爲子、遺跡可相續分候者、猶實母之著服之條、勿論事候哉、

資益

○爲親、和歌聯句御會ニ列スルコト、六年六月二十五日ノ條ニ、庚申續歌御會ニ列スルコト、九年閏正月十一日ノ條ニ、久我通博ト山城東久我莊ヲ爭ヒ、之ヲ安堵スルコト、同年十一月三日ノ條ニ見ユ、

十日、甲申、畠山義就疾ミ、興福寺南圓堂ニ一萬度護摩ヲ修シテ、之ヲ祈禳セシム、

〔大乘院寺社雜事記〕七十　五

一自河内敎興寺書狀到來、(六日狀也、)屋形違例無殊事云々、

十日、甲申、

一畠山右衞門佐祈願南圓堂御間一萬度事、自今日始之云々、

五月八日、壬午、

義就死ストノ世評

〔東寺執行日記〕十四　五月廿八日、畠山右衞門介(佐)殿死去人々申之隱密之間、更不知治定云々、

十一日、乙酉、是ヨリ先、前中納言四條隆量、永ク美濃ニ留リテ勅譴ヲ蒙ル、是日、之ヲ宥シ給フ、

酒饌ヲ獻ズ

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二(御湯殿上日記)　五月十一日、○(略)中四條さうかすけ卿御ゐ事色々□□つきて、御めんの御おほせあり、

隆量歸京ス

十三日、○(略)中四條けい中納言よりうて、御めんの御ふいめんあり、

甘露寺親長ニ懇リ勅免ヲ乞フ

〔宣胤卿記〕四月十七日、辛酉、晴、○(略)中(甘露寺親長)勅免事以按察可申入云々、

應仁亂後美濃ニ滯留ス

五月十一日、乙酉、陰、○(略)中次行四條前中納言(隆卿、量許、借屋也、)去月自濃州上洛、勅免事申之、未被免云々、非殊科怠、亂中不仕在國、京都落居以後、于今不參洛事等也、一向無足、美濃守護(土岐成頼)加扶持許也云々、○(略)中勸修寺大(教秀)納言相語云、四條前中納言事今日御免云々、明後日可參內之由申之云々、

無足ニヨリ土岐成頼ノ扶持ヲ受ク

十六日、庚寅、山城伏見ノ民鬪爭ス、尋デ、義政ヲシテ之ヲ鎭セシム、

般舟三昧院ノ狼藉ヲ愛クルヲ憂ヘ給フ　義政テシテ深草ニテ沙汰セシム

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月十六日、○略中ふしミよけんくゐいてくるよしきこゆる、

十七日、○略中ふしゐのくしょつきて、御寺ゑをんらうをきもやとて、むろまちとのへ、ふうくさへやう所おさるへきよし御申ありて、おさるゝよし御申、□そのやうきんろうともへゑおほをいゝさるゝ、よせ事けゝつまり五んよむれよしきこゆる、

十八日、ふしミろおほをいゝさされさるゑるしょ、□（むカ）ねよなるよし申、めてゝし、

朝倉氏景、越前玉藏坊ヲ祈願所ト爲ス、

〔劍神社文書〕○一越前　當坊之事、爲祈願所、可被致請誠（精）之狀如件、

文明拾參　五月十六日　玉藏坊　氏景（花押）

十八日、壬辰大和談山神社常燈消ユ、中御門宣胤、陰陽頭土御門有宗ヲシテ

寺僧勘文ヲ求ム　土御門有宗ノ勘文

之ヲ勘セシム、

〔宣胤卿記〕五月廿六日、庚子、晴、○略中自多武峯狀披見之處、今月十八日申時、大明神寶前定燈悉消了、占形可下賜云々、則尋遣寮頭有宗（土御門）朝臣、

廿七日、辛丑、晴陰不定、夜雨、多武峯占形到來、遣寺家使、

惟異吉凶、（今月十八日申時、多武峯大明神御寶前定燈悉消候事、）

占今月十八日壬辰時、加申河魁臨壬爲用將白虎□□中從魁大裳、終傳送玄武□□卦、遇聯茹御行年卯上切曹玄武、

推之、可有御病事幷損亡等事歟、期惟日以後廿日之內、及來九月十月節中、並戊巳日也、兼被致祈禱者、其咎自銷乎、

文明十三年五月廿七日　陰陽頭安倍朝臣有宗

十九日、癸巳、飛鳥井雅康、甘露寺親長ヲシテ、鞠場懸木ヲ剪開セシム、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月十九日、○略中あもう寺ゑこうして、御らゝゐれ松をかきらるゝ、

〔親長卿記〕十二　五月十九日、陰、飛鳥井中納言雅康、送使者云、今日禁裏御懸木（亂中年一向不透）、可切透、一人難奉行、予同令祇候可透云々、答可參之由、午剋許

參內、仰侍從中納言(三條西實隆)相博也、
未剋許飛黃門參仕、下、予同出御懸方之庭者、遲參相待移剋、其後兩人相計四
本松切透了、及數年之間成大木了、仍梢許有枝無下枝、少々見計切之、入夜夕
立降、
廿一日、晴、〇中略御懸木猶有切殘方、可切之由有仰、足代已下可用意之由、卽仰
民部卿、
二十三日、丁酉、前興福寺別當權僧正松林院兼雅寂ス、
〔大乘院日記目錄〕三 五月廿三日、卯刻兼雅權僧正入滅、四十八、坊務三十个
年、
〔大乘院寺社雜事記〕七十六 二月六日、雨下、
一松林院僧正去月十二日參候以後無出仕、違例之由被申、大方之養性歟と
相存之處、以外之由聞及之間驚入、遣專實之處、松井笠坊各以外之由令申
云々、珍事々々、平臥之間、大納言得(兼雅)業罷出述子細云々、
三月三日、
一御節供、手長大納言(松林院兼雅)得業、役送親舜、大納言得業相語、兼雅僧正所勞珍事也、

笠坊之藥も不合、松井之藥も不合、且又兩人共以檢(拾カ下同ジ)之手も力も無之云々、
予仰、早々令上洛、竹田ニ可有對面之條、可然旨仰了、
廿一日、
一松林院僧正違例大事也、松井法眼以下撿之間、令上洛、可見參竹田法印(昭慶)之
由仰遣之了、去三日兼親得業ニ此子細仰了、今日次之間念比ニ仰遣了、
廿四日、
一長敎來、松林院事等仰合之、上洛可然旨仰了、於于今者無益歟云々、珍事以
外違例也云々、
廿七日、
一松林院來、晦日可上洛云々、可然事也、
〔大乘院寺社雜事記〕七十七 卯月五日、己酉、
一松林院僧正上洛、違例難義之間、爲見參醫師也、
廿一日、乙丑、雨下、
一松林院僧正違例、京都醫師共拾(捨カ)之云々、兼親得業近日違例云々、
五月十八日、
文明十三年五月二十三日

尋尊兼雅ニ竹田昭慶ノ診ヲ求メシム

兼雅京都ニ至ル

一去十一日松林院下向、違例以外云々、
廿二日、
一松林院僧正違例、於于今者、難義可出來條必定云々、去廿日夕方權僧正(珍覺)御奈良ニ歸ル
政覺兼雅ノ病ヲ訪フ
房内々被行向、乍伏見參申畏入云々、則以大納言得業、杉原一束、文殊一福(幀)
進上之、凡不便無極事也、當門下無人、門跡冷(零)落珍事也、近日廣橋一門蒙神
罰各令入滅、一家滅亡之上者、中々無申計事也、慈恩院(光慶)得業一人相殘、是又
寂ス
進退所存更以無憑體也、
廿三日、丁酉、
一松林院僧正卯剋入滅、(四十八、)十不便々々、中々不及是非、
廿六日、
一松林院僧正葬禮於白毫寺在之云々、代々般若寺也、大儀之間令隱密、如此
白毫寺ニ葬儀ヲ行フ
相計云々、

〔大乘院寺社雜事記〕(七十八下)　七月十三日、

一今朝夢見之、兼雅僧正來、予曰、何所ニ生ソ、都率天ニ生云々、又予生所如何、
可爲都率天也、何ニモ人天上之間、可爲善所也、細々ニ可有光臨由予仰之、
而夢覺了、

〔親元日記〕(六)　四月六日、庚戌、天晴、

一松林院殿御違例爲御養生、與風御上洛云々、貴殿へ折二合、樫二ヲ被送進
之、
五月廿三日、丁酉、曇雨、
一南都松林院僧正(兼雅、四十八歲云々、)今朝(卯剋)御他界之由、自大納言殿(兼親、(行))より御
注進酉剋到來、

〔興福寺別當次第〕(三)　○大和

子、○中略
權別當權大僧都兼雅
法印權大僧都兼雅、(松林院、廿二、日文明十三年丑五月入滅、四十八、)
寬正六年乙酉五月十二日、三度長者宣於松林院請取、同六月六日、於興西
院渡印鎰了、應仁元年五月四日、夜奉納印鎰於寺庫、

〔尊卑分脈〕(藤氏　廣橋　內麿公流)

兼鄕

百箇日
一周忌

興福寺河口莊等ノ兼親ニ給地ヲ安堵ス

〔興〕兼雅別當僧正、清水寺別當、貞兼僧正弟子、松林院、

〔大乘院寺社雜事記〕七十八下　九月四日、夜下雨

一〇中略松林院僧正百ヶ日也、

〔大乘院寺社雜事記〕八十一　文明十四年五月廿三日、

一松林院兼雅僧正一廻也、風呂在之、

〔大乘院日記目錄〕三　八月六日、松林院得業兼親參上、籠居以後初也、

〔大乘院寺社雜事記〕七十八下　八月廿四日、

一松林院兼雅僧正之闕分河口庄給主幷外河、小矢部、楠本、小山庄給主、人夫威儀供等事等三通成奉書、御請同三通到來、奘舜、泰弘奉了(役)、役人親舜近日籠居之間、爲代官分、內々奘舜持向了、小衣也、大納言得業明日京都御禮ニ可上洛云々、仍補任共急申故也、故也、

卅日、

一訓英書狀到來、松林院禮物事也、

〔大乘院寺社雜事記〕七十九　十二月十一日、

一松林院安堵之禮物百卅貫文事、長敎房方ニ足向之間、早々無御沙汰可渡之由、汰汰人衆中ニ奉書遣之了、渡長敎了、清賢書上之、使竹千代丸、田樂頭于時仰事借物之內五返辨之故也、

兼親代始ノ禮物ヲ幕府ニ進ム

〔親元日記〕六　八月廿七日、己巳、天晴、

一松林院殿兼親御代始御禮御申、

公方樣へ千疋、御方御所樣へ(伊勢貞弘)御太刀、糸、御馬、雲雀毛、上樣へ御折二合、御棰三荷御進上、御出仕ニ與一殿を被副申之、貴殿へ御棰二荷、兩種、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　九月廿九日、〇中略おられそう(ゐカ)

御湯殿上日記　御ゆをまいる、おり二ゐう、御さる三ゐうゐいる、

二十六日、庚子、御生母大炊御門信子ノ執奏ニ依リテ、善勝寺長者ヲ、西川房任ニ安堵セシメラル、

〔宣胤卿記〕五月廿六日、庚子、晴、〇中略　(大炊御門信子)納言勅免、依東洞院殿御申、當年中者、西川可存知由被仰下云々、西川前宰相(房任)來、善勝寺長者事、雖四條前中(隆量)納言補スルコト、十年七月二十六日ノ條ニ見ユ、

二十七日、辛丑、延曆寺六月會、

〔親長卿記〕十二　五月廿五日、晴、參內、〇中略　六月會供給金輪院沙汰分千五百疋、

今日旦千疋沙汰之、於坂本請取之、(會行事傳置之、)
廿七日、晴、六月自(會脫)今日始行云々、供給半分、近年四ヶ日住山、來月一日可登山也、
廿九日、晴、及晩元長參內、六月會先奏奏之、
六月一日、晴、元長登山、(平與、如先々借用執當眞全、)予同登山、有例講、次有論匠如例、入夜三度使之後□堂有賀儀、
今日申遣綱所許、闕請定事可爲今日歟之由、思外(給カ)之處無其儀然者可申是非之處、是又無音、併不存□實歟、返答云、自講師可注送事遲々、其子細只今可申入處、遲々計會云々、
二日、晴、圓明沙汰分供給千五百疋、雜色男使雅常(雜掌カ)申遣之、晝夜出仕如例、事、仰會行事、遣公人可催促之由仰之、卽相副勅金輪院沙汰分供給之殘今日沙汰之、(自會行事許送之、)岩井坊來閑談、
圓明沙汰分供給千五百疋、今日沙汰之、今夕例講之後綱所來、□(從カ)人來也、闕請定也、入夜參堅義如恒、
三日、晴、○略中晝夜出仕如常、宰相注記弘俊、來、隨身一盞閑談、都維那下行、貳十疋遣之、

四日、晴、遣引物於坊主許、(杉原檀紙十帖、帶一筋、)
三無人之間、申送講師許之處、西塔僧等忩申、何樣ニモ可出仕云々、辨侍已下相尋之處、猶不見云々、重仰其子細、此上者先歸西塔、晩景可執行之由申之、及晩例講、入夜出仕如常、
〔宣胤卿記〕六月一日、甲辰、天晴、○略中六月會勅使藏人辨元長也、近年供給半分(三千疋、)沙汰之間、略行粧等、始終不住山、是又近年之作法也、仍元長今朝參向、都護同登山云々、
六日、晴、晩向甘露寺許、六月會一昨日結願、昨日十一月開(會脫カ)白、仍今日都護、左少丞下山云々、
○延曆寺霜月會ノコト、便宜左ニ合敍ス、
〔親長卿記〕十二　六月三日、晴、參詣八部元三、(大師御自筆影也、令開之、御)岩井坊爲案內者同(道導カ)、今日公文所公善來閑談、十一月會可開白之由、講師申之、然者可逗留云々、得其意之由返答、講師來、無案內之間、同道公文所云々、羞一盞、(持來一橋如恒、)予同可出座之由、公文所申之、再往雖令斟酌、頻命之間出座、講師召具御童子召

請之、一獻之後各歸了、
五日、晴、午後二度使來、仍令用意霜月會供給事、仰講師、五百疋到來、下行公人了、（辨侍五十疋、力者七十疋、）六月結願之時、被付行之時、力者五十疋、辨侍三十疋下行之、雖然今度一夜逗留之由歎申之間、加增了、
大內政弘ノ宰陶弘護、大神宮ニ參詣シテ、京都ニ抵リ、尋デ、歸ル、
〔親元日記〕六　五月廿七日、辛丑、天晴、
一陶尾張守弘護、以所々物詣之便、密ニ上洛、彼宿所へ親元罷向勸盃、（弘護物詣ノ爲メ密ニ京都ニ上ル）
六月二日、乙巳、天晴、
一陶尾張守方より貴殿へ御禮、使安村因幡守、（文藏主同道、）太刀、（清則、金覆輪、）鞍覆、（赤毛氈、）面革十枚、弓廿張、（白木、）蘆屋釜十、以上、使者幷ニ文藏主ニ御對面、（弘護伊勢貞宗ニ物ヲ贈ル）
三日、丙午、天晴、
一陶方へ爲昨日之御禮、□□使者罷向、被遣色々太刀、（行房、轡、明珍、）鞦三具、（赤根、木塚沓三足、馬、鹿毛駮、印雀目結、）以上、（貞宗ノ答禮）
十四日、丁巳、雨晴、殘
一陶尾張守方より白鳥一進之、被遣御狀、

〔陶弘護肖像贊〕○防　周　泉福院殿前尾州太守建忠孝勳禪定門肖像
（文明十三年）辛丑歲、詣伊勢神宮而秋還、○上下略、全文ハ十四年五月二十七日、弘護卒去ノ條ニ收ム、
二十八日、壬寅、勝仁親王御所御樂アリ、
〔京都御所東山御文庫記錄〕甲　御湯殿上日記　五月廿八日、○略　中宮ヘ御ラス
まて、御樂いつよりも御人あまタ□□□ふしミ殿、ひやう部卿、宰相中將、く
られうミ、あや中將、ゑむき、左少辨、地下まで○以下闕ク、
義尙、三寶院義覺ヲシテ修法セシム、
〔親元日記〕六　五月廿八日、壬寅、雨晴、徹
一御方御所御修法始行、三寶院殿、
安藝武田國信入道宗勳、其子信親ト大內政弘トノ爭ヲ和解センコトヲ、幕府ニ請フ、
〔古文書〕第貳拾集
（編者）「武田ミの狀案　文明十三五」
一大內方（政弘）ゟ治部少（武田信親）輔間事、御執合肝要候、可然候樣被仰定候者、眞實可爲祝著候、恐々謹言、

文明十三年五月二十八日

伊勢貞宗

五月廿八日

伊勢(貞宗)殿御宿所

宗勳(武田)有判

一就安藝守(武田元綱カ)身上事、自大内方被申候之趣、連々承候、御指南之上者不及是非、可致和睦候、仍割分事雖不可有甲斐々々敷事候、何樣可申合候、不可有等閑候、恐々謹言、

五月廿八日

伊勢殿御宿所

宗勳有判

是月、梶井宮堯胤法親王ヲシテ、祈禱セシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二御湯殿上日記　五月二日、〇中うち非殿より御いのりの御けちくをんをもる〳〵とて、御あて物、御くをんしゆ、御ふくをあいる、

〇堯胤法親王ニ祈禱セシメラル、コト、其日ヲ詳ニセズ、姑ク本書ニ據リテ掲書ス、

義政、勘合船ヲ朝鮮ニ派シテ、大和圓成寺ノ爲ニ、大藏經ヲ求ム、尋デ、朝鮮王李娖、之ニ應ジテ復書ス、

〔從東山殿高麗國ヘ被誂遣土産註文〕

高麗國よりまいるへき物御用捨條々

一別幅事、先々も不定候之間、爲御心得、兩通寫進之候、以前遣候十六種かきのせ候、別幅之内、加增之分をはしるしわけ候、無御用物には合點候、くらるくち、かうろ貳、あかゝねのほん貳、筆百、山鳩雌雄幷貳つかい、此五色いる無御用候、

一御藥事、三十種御註文に出候之間、御序をのせられ候て進之候、御所望之趣涯分申とゝけられ候て、可有進上候、此内牛黄ことに御太切候、先々よりおゝくまいり候やうに、可有奔走候、

一象牙事、あかき筋のなく候て、いかにもうつくしく白候はんするを進上あるへく候、今度くたされ候つる高麗よりまいり候わりふの象牙よく候間、其類を可被相尋候、

一禽獸之類之事、船中にて被飼候はんするを煩敷候歟、又は御用にもなく候、不可有御渡候、

文明十三年五月是月

藥三十種　牛黄ヲ必要トス
象牙　割符ノ象牙
禽獸ハ將來スベカラズ

珍草　一草花事、めつらしき物候はゝ、根にても又は實にても候へ、種を可被渡候、

斜皮　本朝にある物は無御用候、

一斜皮事、青赤黑三種御用候、いつれも近年渡候は、色わろく候て、はけたる所候之間、不立御用候、いかにも色うつくしく候て、はけさる皮を渡候やうに可有料簡候、是は兩度の別幅には十張と候へ共、それよりおゝくまいり候やうに可被申候、

奉行松田貞康　右條々口狀にては、以後可有相違之儀候之間、心得られやすき樣に、以和字大概註進之候也、

朝鮮王李姜ノ返書　文明十三年五月日

爲渡大藏經、從和州忍辱山（（額成寺））渡船也、貞康奉行、自東山殿被出御印、同御用之御物等被仰付、仍如此註遣也、歸朝返牒別幅以下者、可有蔭凉軒也、

〔續善隣國寶記〕

奉復
日本國王殿下

朝鮮國王李姜謹封

朝鮮國王李姜奉復日本國王殿下、我國與貴朝、世熟敦信睦、而滄海遼隔、久切

象牙符ヲ券契トス　企想、今因貴使備諳動履佳勝、仍蒙厚貺、良用欣感、所示助緣及大藏經、就付回使、具在別幅、象牙符本爲兩國相驗、以防姦僞耳、何必一二次第賫來、而後可信耶、來使未諳本意、欲置而去、故付使還送、昭亮、胡椒劑藥所需其種、幸因來使寄與、所冀珍重自愛、不宣、

圓成寺大藏經請來二合船錢錄　（（文明十四））成化十八年五月十二日　朝鮮國王李姜

〔圓成寺文書〕（（大和））

大藏請來二合船錢錄

文明十三年辛丑十二月十三日

薬師院　蓮舜（花押）

薪代下ノ關ニテ買入

○此間關文繼目

三百文（タキ、）ノ代、
九月十二日
五十文下ノセキニテ
廿日
二百文（タキ、）ノ代、

同日
五十文□□□
同下ノセキニテ
五百文（キノ）代、
同下ノセキニテ
五百文（タキ、）ノ代、

文明十三年五月是月

文明十三年五月是月

油代　同日下ノセキアフラ二百文ノ代、
同日下ノセキニテ二百文ノ代、
同廿八日卅五文ノ代、
十一月廿一日百文ノ代、
十二月十九日フ子ウケトルニ百文トキサカテ、

酒手　正月之用

魚代　四十文大キチ二フシ代、

鹽代　十文一升代、キモノ
十文二升代、シチ
卅文クシカノ代、キ

酒代　十八日百文ノ代、シチ
廿日マテ分合貳貫六百九十七文
十八日五十文ノ代、サケ

高麗灘　二月一日ヨリ
五十□□□

同廿三日百五十文タキ代、
廿四日三十六文松ノ代、トホシ
廿八日廿五文松ノ代、トホシ
同日五十五文松ノ代、トホシ
廿日四百文廿五テウ代、トマノカス

廿文一升ノ代、クリノ
五文ノ代、マメ
十二文二升代、イワシノ
十七日百文ノサケノ代、舟タツルトキ

十二日百□□□□□□サケノ代、カウラキナタニテ

舟方賃　十三日貳拾貫文米廿五俵アタル、二合舟ノ代、
同日拾貫文舟方十人ノチン、
四月十日四タン半ノリコシニ出ス、
同日十二タン舟方ノノリコシニ出ス、

禮錢　二月一日二百文内田トノ二合、舟ノ禮、
船主　二日三百文フナヌシノ方ヘノ禮セン、
問屋　同日五十文トキヤノウチノ物ニトラスル、
餅代　同日二百七十文舟方ノモチノ代、
三日百文サケノ代、

百文十五日ノサケノ代、
□月六三十文舟方ノサイノ代、
□日□□文ホムシロノ代、

合四百三十文分

其都合四貫三百四十二文

十二月廿一日ヨリ　二合舟飯料日記

文明十三年五月是月

正月十七日一貫二百文同方代米十一俵ニアタル、

同日百文トイ方ヘノ禮、
同日百五十文舟ヌシノウチ物ニトラスル、
十一日二百文ハタトノエノレイセン、
同日百文□ニカウセンノトキ□□カヤクノ禮、
二百文七日八日兩日ノサケノ代、

三月日五十文舟方ノサイノ代、

高麗米

三斗一升四合　大ツコモリマテノ分

正月一日ヨリノ分（カウライ米）
十日マテノ分　五斗一升二合
廿一日ヨリツコモリマテ　六斗四升

二月一日ヨリ
廿六人ツヽ、七斗二升
廿一日ヨリツコモリマテ　六斗四升

三月一日ヨリ
十日マテ　六斗四升
廿一日ヨリ同廿九日アサイマテ　五斗三升二合
三月廿九日　二合舟ノソタリラウ米　七斗

以上合六石四斗一升一合（カ）

□□半（小物三人ノソテホソ）　センソウ殿

十一日ヨリ廿日マテノ分
六斗五升五合

以上一石八斗一升五合

十一日ヨリ廿日マテノ分
七斗二升四合

以上二石八升四合

十一日ヨリ廿日マテ
六斗四升

以上一石八斗一升二合

蓮舜

鍛冶番匠　釜山海

明上官人（ミヤコノホリ）
正官人
〇此間闕文繼目

以上合廿九段（モンメンノ分）
以上合十三段（ホイノ分）
〇此間闕文繼目

一セントヲヤ□□下合
〇ニシヲタワウ　直アニ
〇サキ九シノホフシ　合廿七人

三人（ニテノ物、中シ一人下へ二人、）
〇此間闕文繼目

以上合拾石六斗一升（六月廿日ヨリ同十月廿日マテノ入メ）
十五月分人別毎月一升ツヽ、ノ下行也、
以上合三石三斗　舟方ノリ米ノ下行

合三石八斗三升（カチ番シヤウ、スミヤキノカレコレノ分飯ノ入目、）
三斗大般若ノ御布施（フサンカキニテ御僧六人ニ出ス、）

文明十三年五月是月

文明十三年五月是月

廿二日ミナミ 一貫文ノセキヤヤコ兩人ニ出ス、

兵庫關

廿四日 米ツキノ百文ケンスキ、

堺ヨリ兵庫迄船賃

廿五日 四百七十文アツカミ一ソクノ代、

上乘禮錢

廿六日 二百文ヒコ三郎テラノホリラウフツニ出ス、

廿七日 五百十文チソカ二枚、フスヘカヲ一枚代、

廿八日 二百文サンシヨ方へ出ス、

廿三日ヨリ廿九日マテノ分 百文サウシノ代、

以上合七貫六百六十四文

二月一日ヨリ日記

一日 百文御ヤトエノ禮セン、

○此間闕文繼目

文明拾參年辛丑 七月十一日

サンヨウニ合（北陸） 高麗舟中辛米以下日記

○此間闕文繼目

同セキヤ 三百文カモン方へ出ス、

同日 百文五郎丸ニナラノホリラウフツニ出ス、

廿六日 百三文サカキヨリヒヤウコマテセンチン、

廿六日 三貫文サカキマテ米百石ノセンチンニ出ス、

廿八日 百文レウハノリセン、

同日 二百文舟方へノ酒テ、御經上ル時、

同日 二百文一日ノ酒テ、

（花押）

□□廿一日 以上一石九斗二升八合

惣合五石七斗五升八合

（文明十三年）七月一日ヨリ日記

以上壹石八斗九升

同十一日ヨリ 以上二石□□□□九合

廿一日ヨリ 以上一石八斗二升四合カツコモリマテ也、

惣合五石九斗三升カ

後七月一日ヨリ

十日マテノ分 以上合一石八斗四升八合

十一日ヨリ廿日マテ 以上合一石八斗四升四合

廿九日マテ 以上合一石六斗六升四合

惣合五石三斗五升六合

八月一日ヨリ

十日マテノ分 以上合一石八斗四升八合

同十一日ヨリ 以上合一石七斗一升四合

舟升定

使者榮弘朝鮮ニ到ル義政ノ書

十五日
一貫文　代米七斗五升（カ）
廿一日
一貫文　七斗八升（舟升ツ、）
同廿五日
一貫六百文　□（代カ）米一石二斗（舟升七升八合ツ、ノケツ、舟升定、）

合八貫六百文　九月分
（ツコモリマテノ分）
惣合五石七斗六升五合
六月一日ヨリ
以上一石九斗
十一日ヨリ
以上一石九斗三升

〔成宗大王實錄〕（百十四）

壬寅十三年（大明成化十八年）四月朔己亥、（九日）丁未、日本國王遣榮弘首座等來聘、（中略、夷千島王遐叉使チコトニカヽル、）日本國書契曰、日本國王源義政、奉（朝鮮ニ遣スコト）復朝鮮國王殿下、兩國千里、世修鄰好、天知地知人焉瘦哉、然而比年我國搶攘、百色暫廢、是以久阻音耗、間闊之罪不可逭也、汗愧汗愧、先是甲午歲（文明六年）、我使者歸國、仍剖象牙符十枚、以爲往來之信、賜兢加焉、（文明六年十二月是月ノ條參看、）今後有聘問、如次授之以爲驗、莫訝、抑我和州有教寺、曰圓城（咸下同ジ）釋明禪者、安彌陀像而有年焉、昔大唐有妙智居士者、念誦彌陀、日夕不懈、一夕夢、神人告曰、欲拜眞佛、須詣日本國圓城云々、夢乃覺、乃追尋瑞夢來于我國、到彼寺親拜眞容、而成始願、然則靈

兵火ノ爲メ燬ク再興ノ資チ求ム
大藏經チ求ム
胡椒種チ覓ム
慶尚道所在ノ大藏經チ贖ル
藥師寺立助緣再興西光院再助緣ヲ目ヲ群臣ニ議ル

驗擧國竭（渴）仰矣、爰丙戌歲（文正元年）、爲兵火佛閣僧宇悉化烏有之地、只幸本尊一軀存也、無所供香華、於茲主寺事者告曰、苟非求助於上國、何以復金碧之舊觀耶、故差釋氏榮弘首座、授第一牙符、遣諭其意、且又欲求大藏經安置寺內、以爲一方殖福之地、庶幾分法寶以利邊民、施資財、以興梵利（刹）、則上國之化無所不至也、菲薄方物具于別幅、伏冀采納、不宣、別幅、裝金屛風二張、綵畫扇一百把、長刀一十柄、大刀一十把、大紅漆木車按大小計七十事、大紅漆淺方盆大小計二十事、銚子二柄、提子二箇、紅漆木桶二箇、（略）中（十七日）乙卯、禮曹啓曰、本曹宴日本國使臣日、言胡椒種覓送事、答云、不產於本國、乃產於南蠻、故琉球國常請於南蠻、本國又請於琉球國、其種似難得之也、傳曰、彼雖云不產、然胡椒自日本來、則日本可請於琉球國以送、其以傳請送來之意、並錄書契諭之、丙（十八日）辰、禮曹啓、日本國王求請大藏經一件、則以慶尚道所在賜、送圓城寺重創助緣、則前例戊子（應仁二年）年、融圓法印來請藥師寺助緣、緜布正布各二千匹、綿紬五百匹、甲午年、正球首座來請西光院重創助緣、綿布正布各五百匹、（文明六年十二月是月ノ條參看、）今則年險、依右例爲難、於甲午年例各減一百匹、以送何如、命示領敦寧以上、鄭昌孫、韓明澮、沈澮議、交隣之禮固當優厚、依正球首座賜給例、尹士昕、尹壕議、依啓目施行、尹弼商、李克培議、近間

榮弘等ヲ饗ス

日本通信久絕、且書啓求請辭緣懇切、交隣之禮不可過略、甲午年正球首座只給綿布正布各五百匹、今用此例、而又各減一百匹似略、參酌融圓法印及正球首座兩例、綿紬三百匹、綿布三百疋、正布四百疋、共一千匹、及大藏經一件賜送何如、洪應議、依啓目施行爲便、若緣人情、務爲優厚、而不知調度已竭、國用虛耗者、古今通患、今別貢於上國、又迫於交隣、財用之費視古頗繁、伏惟上裁從弼商等議、丁巳(十九日)、上將宴日本國使、其接見時所語之辭、命議于領敦寧以上、鄭昌孫、韓明澮、洪應、李克培、尹壕議、使臣若云久闕通信、答云、去己卯(長祿三年)年、遣宋處儉等、未至對馬島、全船溺死、其後因貴國兵亂路梗、久未通信、前年聞兵亂寢息、遣李亨元等、到對馬島、聞兵亂未息還來、使臣若請與通信使偕行、答以隨後入送何如、上御仁政殿、接見日本國使臣僧榮弘等二十人、月山大君婿、德源君曙、儀賓鄭顯祖、及鄭昌孫、韓明澮、洪應、李克培、尹壕進爵、命上副官人進爵、賜物有差、

〔成宗大王實錄〕百四十一

五月朔己巳、(一日)庚午、御慶會樓下、接見日本國使榮弘等二十人、上命禮曹判書李坡、傳于榮弘等曰、爾等歸期已逼、今日爲設宴以慰其極醉飲、榮弘等啓曰、殿下恩德說不能盡、榮弘進第六爵、傳曰、爾國王遣爾等通信、予甚喜焉、爾等其歸爾國、細告予意于王、榮弘對曰、殿下恩德豈敢暫忘、當歸

報國王、副宮長信藏主進第七爵、仍賜物有差、宴罷遂觀宗親射、日昃還宮、庚辰、(二日)

日本國王源義政使僧榮弘、夷千島主遐又所遣宮內卿辭、其答日本國王書曰、我國與貴朝世敦信睦、而滄海遼隔、久切企想、今因貴使、備諳動履佳勝蒙厚貺、良用欣感、所示助緣及大藏經、就付回使、具在別幅、象牙本爲兩國相驗、以防奸僞耳、何必一二次第賚來而後可信耶、來使未諳本意、欲置而去、故付使回送、照亮、胡椒劑藥所需其種、幸因來使寄與、別幅、綿紬三百匹、綿布三百匹、正布四百匹、大藏經一部、白細綿紬一十匹、白細苧布一十匹、黑細麻布一十匹、八參一百斤、豹皮五張、虎皮五張、雜彩花席一十張、滿花席一十張、滿花方席一十張、豹皮心虎皮邊鹿皮裏坐子一事、藍斜皮一十張、海松子五百斤、淸蜜二十斗、厚紙一十卷、蠟燭一百柄、大鐃鈸一事、中鐃鈸一事、法鼓一面、鍮錚一事、中鐲一事、雲板一事、犀角一隻、莞靑二兩、白龍骨一斤、何首烏二斤、硇砂一十兩、雌黃二斤、朴硝一斤、陽起石三兩、蘆薈三兩、石鍾乳五兩、光明砂一十兩、自然銅一斤、蛇床子一斤、膃肭臍三部、蓽撥二斤、山茨菰一斤、牛黃三部、敗龜四部、澤瀉二斤、白鮮皮二

斤、〇略下

六月大 甲辰朔 盡

一日、甲辰、御祝、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二 御湯殿上日記

六月一日、あさ御いわいつ
そのことく、御さゝ月いつ(し)ものことく、ふしミ殿ならしまさすめてたさ御
申、

薩摩木場重著、其所領同國木場原ノ地ヲ、入來院重豐ニ譲與ス、

〔薩藩舊記〕前集二十八 入來院氏文書

木場但馬守
重著

進上 御使

種田圖書殿

御こゝろさしありかたく存候、よて木場但馬守重著之私領こはの原之内
の、水田平田大丸一反、野中田一反、下つる一反、以上三反、重豐にあけ申候事
實也、此之外ぬく谷にほりま地所々候を私之、心あて共仕候事候、於以後モ
奉憑候之外無之、仍爲後日證文如件、

文明十三年 辛丑 六月一日

木場但馬守重著(花押)

進上 御使

種田圖書殿

一日、乙巳、攝津淨橋寺住持善空ニ、同寺領ヲ安堵セシム、

〔淨橋寺文書〕○津攝

攝州有馬郡淨橋寺領田園幷山林曠野等之事、加元可令領知給者、依天氣執
達如件、

文明十三年六月二日

左中將(花押)

謹上 當寺住持善空上人御房

當寺領田園幷山林曠野方(脇)至目錄證文等、去文明五年十一月廿六日(四)祿之
時粉(紛)失云々、然間任當知行之旨、不可有相違之由、既今月二日被成下勅裁之
上者、彌寺家可爲來際龜鏡者、天氣所候也、仍執達如件、

文明十三年六月十一日

左中將(花押)

謹上 淨橋寺住持善空上人御房

五日、戊申、祇園社立柱

〔長興宿禰記〕中

六月五日、戊申、晴、今日祇園社立柱云々、兵亂中燒失之後、貴

賤勸進有造立之沙汰云々、不及日時定之儀、非公儀故哉、

〔宣胤卿記〕六月六日、晴、〇中略今日祇園社立柱云々、

〔東寺執行日記〕十四六月六日、祇園社事初アリ、勸進沙汰申候、但番匠鍛冶相論聞之同御湯立アリ、湯不立令申候也、

〔如是院年代記〕六月五日、祇園釿始、

幕府室町第作事始、

在通室町第作事惣色日記ヲ勸進ス

〔在盛卿記〕二月小、御方御所様御歳十七、巽御造作、天醫御方也、

十五日、庚申、今日室町御所御作事惣色日記勸進之、結城十郎奉、

室町御所御造作雜事惣色日、

今月廿一日丙寅、時卯辰、

三月八日壬午、時卯

二月十五日　從三位在通

折紙結城十郎方へ返事也、

三月八日勸進申入候、可得御意候、恐々謹言、

二月十五日　在通

同築地造作始日時勸文

木屋ヲ建ツ

結城下

五月十八日、壬辰、

室町御所御築地御造作始日時、

今月廿八日壬寅、時卯、

可被立御木屋日時、

六月五日戊申、時辰、

可被築始御築地日時、

同日戊申、時未、

可被立雜舍日時、

十一日甲寅、時卯未、

可被立假於釘貫日時、

十三日丙辰、時卯、

五月十八日　從三位在通

〔親元日記〕六月五日、戊申、天晴、

一室町花御所御作事始、被立御木屋、

畠山政長
赤松氏細川氏一色義直武田信等築地ヲ分擔
造作事奉行
造作總奉行
畠山政長

奉行

〔長興宿禰記〕中　六月五日、戊申、晴、〇中略中是日室町殿花御所被築始、四方築地東方管領（畠山政長）、畠山金吾、北方赤松一同築之、南（西カ）方今日令始之、西面細川黨、南方一色、武田被仰付云々、御殿新造木屋一宇今日立之、作事奉行番衆十人、其外布施（英基）下野守、松田豊前守（貞康）、同對馬守（敏秀）等奉行也、御造作總奉行管領存知云々、

〔後法興院政家記〕六　六月五日、戊申、晴、自今日、武家室町亭築地執企之云々、

〔大乘院寺社雜事記〕七十六　二月十一日、

一勸修寺中納言光臨、〇中略

室町殿跡ニ、可被立御所之由、雖及御沙汰、不成立、不可得事也云々、

〇室町第火クルコト、八年十一月十三日ノ條ニ、幕府同庭ヲ修築スルコト、十年三月二十九日ノ條ニ、同第修理段錢ヲ安藝ニ課スルコト、同年五月二十六日ノ條ニ、修理段錢ヲ諸國ニ課スルコト、同年十二月十二日ノ條ニ、同第造營事始ノコト、十一年二月十三日ノ條ニ見ユ、

七日、庚戌、前大僧正隨心院嚴寶ヲ、東大寺別當ニ補ス、

〔大乘院日記目錄〕三　六月七日、隨心院前大僧正嚴寶、任東大寺別當、

義政平家琵琶ヲ好ム

齋藤利國出家セン

八月六日、東大寺別當職事畏入由、滿寺書狀到來、朔日寺務書狀付彼寺了、

〔大乘院寺社雜事記〕七十七　〇文明十三年五月晦日裏文書

御狀委細拜見申候、石女子上洛候由申候へ共、未見來候、彼別當事尙々可申候、江次第御談義ニ、今ちと暖氣ニ成候て、細々可有參內候間、定而さやうの時直ニ御申候へきやと存候、彼開帳事心得申候、彼灌頂やせ定法寺の宿坊にて始行候つる、無爲目出候、京都一向無殊事候、當年いまゝ無御參內候間、ゐひ事までにて候、准后の御方へも、一向ニ御禮出仕停止御隱居分候、平家御すきにて、城間一（地）ゑき、行一、（二）ゑゆ一四人細々ニひろゑんにこゑゝまり、あゝま汰風ニふけ物をいとらも、座頭ニ成ても、因果猶以うゐゆく候□□申候、東大寺別當何事候歟、此方儀いやもく候へく候、惣寺之儀いうゝと存計候、美濃右馬允可入道分候、來月ふと〳〵まいり候て、長谷へもまいり候へく候、遠國の左右迄御待入候時分候、近衞殿（政家）來月始御下向候へく候、聖護院（道興）も可有同道候歟、恐々謹言、〇近衞政家奈良ニ下ルコト、四月十二日ノ條ニ見ユ、

二月十一日　大乘院殿（尋尊）御返事　嚴寶」

〔大乘院寺社雜事記〕七十 六月五日、

一自隨心院殿昨日書狀、今日自一乘院殿送給、東大寺別當職事勅許云々、一兩日中宣下可寫給云々、珍重事也、

十五日、雨下、土用、

一隨心院殿より使者下向、東大寺々務事無相違宣下云々、

上卿侍從中納言
文明十三年六月七日 宣旨

前大僧正嚴寶

宜爲東大寺別當、

藏人左少辨藤原元長 奉

十七日、

一東大寺衆徒水門來、條々仰合之、寺務方御得分三乃國分無正躰之間、於其餘者一向無之、如形分ハ取出ニ被出之云々、所出分事大綱申分條々、

大晦日役神祭樂人方下行、

正月仕丁共參申圓鏡酒給之、

二月堂後七日佛行衆食米四石計、

美濃ノ東大寺領正體ナシ

日宣案

五月五日菖蒲葺仕丁下行、

六月大佛々聖每日一斗、

七月同、

八幡定燈井手庄月別一貫文足向、

廿一日、小雨下、

一東大寺年預五師方ニ、以成實遣口宣案、以親嚴大僧正御例、寺務事被宣下候得其意可披露由也、畏入可令披露云々、又自古市兄弟方、內々深井坊、密乘坊、實相坊以下方ニ、可被給可加評定之由申遣之了、是於隨心院殿者避遮樣也、下地先例等事候、可覺悟由入魂分也、

廿二日、

一水門來、年預五師爲集儀、內々尋申條々、寺務御覺悟分如何、此條々在之、

一寺務代事、

一所出共事、

一出世後見事、

一寺役共事、

一本末相論事、

予返事

東大寺大乘院尋尊ニ寺務代等ノ事ヲ聞ク

尋尊ノ返事

寺務代出世後見ハ寺務代ハ冥家ヲ補ス出世後見ハ僧綱以上

一寺務代出世後見事、寺家御請以後、早々計略勿論也、本式寺務代ハ良家分也、出世後見ハ僧綱已上者也、然而寺務代歟、出世後見歟、此條一味仁故安樂切持之、于今成業也、寺務ハ勸修寺殿也、然者今度も可爲一人者也、

所出

一所出事、六月七月大佛々聖等勿論事也、本年二月堂本供養等事、可有御沙汰也、

東寺ト東大寺本末相論

一東寺与東大寺本末相論事、東大、興福等四ヶ本寺事、爲何寺可及本末相論哉、聊就眞言儀、中古申子細在之、其段ハ各別事也、爲東寺當寺別當兼帶事、及度々先例也、

寺役ノ事

一寺役事、大佛年始御燈明事、三昧堂普賢講等事ハ、近年東南院殿以下不及御沙汰歟、但可有御沙汰事勿論寺役也、淮分可及御了簡也、

〔大乘院寺社雜事記〕

七十八上　東大寺別當職事條々　隨心院殿　大乘院號

隨心院殿東大寺別當職御慶賀事

上卿侍從中納言

文明十三年六月七日

一宣下案到來

宣旨

親嚴寺務ニ補スルノ例ニ據ル

前大僧正嚴寶

宜爲東大寺別當、

藏人左少辨藤原元長奉

六月廿日、口宣案送給之間、以井上成實、遣東大寺年預五師方、安(宴)內者之間、水門佐五師同道畢云々、畏入令披露、可申御返事云々、件寺務職事者、去文明七年十二月、東室擬講光任蒙仰了、就大內新(故)助出陣、山城國井手之玉井庄成不知行之間、二月堂後七日本供米闕如了、爲寺務非可入立之間、無力任掟法、寺務職事辭退申了、同九年以來寺務未補也、近日又爲先途可望申仁體一切無之云々、無勿躰間、內々予申勸之、代々隨心院事ハ、此寺務事御競望事也、只今三乃國寺務領等一向不知行之間、於得分者、一粒一錢雖不可有之歟之間、可然旨申勸之、仍宣下事無相違、珍重々々、隨心院殿本願唐橋大僧正御房親嚴、文曆二年令任寺務職給御例也、今度彼例再興、誠以神慮之至、珍重々々、

一水門佐五師內々集會評定子細伺申入之、東大寺八宗兼學寺也、唯眞言宗

寺務事、被任先例條、是無相違者也、就其條々、尋申御學(脱)語子細承度旨云々、

一寺務代事、良家分仁御沙汰事、

一出世後見事、僧綱分躰可沙汰事、

一御寺役事、

一六月七月大佛々聖米下行事、來年二月堂本供米以下諸下行事、

一東寺與東大寺ハ本末相論事有之、此條〇以下闕ク、

〔大乘院寺社雜事記〕七十八下

一自隨心院殿御書到來、則遣年預五師方了、使者成實、八月一日、

東大寺ヲ東寺文應二年聊儀(脱)絕之子細在之歟、然而其以來東南院兩代令任一長者職給其外兩寺之門跡、自他之先途被遂之上者、自今以後、彌以可爲如往古候、東寺可爲東大寺末寺也、此等之趣、可有傳達年預五師方也、恐々謹言、

八月一日　嚴寶

大乘院殿　引合立文也、

東寺前長者御書到來候、千万珍重候、早々可被披露之由、被仰出候、恐々謹言、

八月一日　伊與法眼繼舜判

年預五師御房　折紙也、

六日、戊申、神吉、

一東大寺返事到來、

就當寺別當職之儀、東寺前長者之御書到來、千万珍重候、仍御寺務代幷出世御後見早々被仰定候者、可目出候旨、御披露所仰候之由、滿寺之評定候也、恐々謹言、

八月六日　年預五師延惠

伊與法眼御房　杉原立文也、

就當寺別當職之御儀、隨心院殿御書撰吉日致披露之間、返事被遣之候歟、只今被申候、可然樣御披露可目出候、如此之間、早々御寺務代出世御後見之躰被仰定候者、可然候、此段遲々候へハ不可叶事候、隨心院殿ゟ

嚴寶ノ書狀東寺ト東大寺トノ義絕ハ東大寺ノ末

書狀之御事者、致披露之處、每篇以出世御後見被申事之間、御後見之躰治定候者、其時以書狀、御禮可被申趣評定候、宣下之事已致披露之間、只今返上候、度々以面申承候故、先以無爲之御儀於身祝著候、御心中奉察候、恐々謹言、

八月六日　　延惠

井上殿　進之

尙々、早々被仰定候者、可目出候、衆儀之趣佐五師子細御存知候、隨心院殿へ之書狀之御事、以出世御後見可被申趣、能々御披露所仰候、

東大寺領美濃大井莊

同茜部莊寺務替引出物

十六日、

一東大寺美乃國寺領初任等事等門徒申、大井庄御寺務替御引出物反錢七十貫、則可致其沙汰者也云々、

同延引用途百卅貫文、是ハ被任寺務而明年被仰付之故、號延引用途也、或云延引反錢、

茜部庄請口每年五十七貫文、

十八日、雨下、

一先日宣下幷年預五師書狀、三乃御年貢以下注文、隨心院殿ニ令進之了、使專實中間也、土佐若君事、同巨細申上之、

九月十日、風雨下、

一寺務出世御後見職事、以北野山可申遣實乘坊了、重而又可申之、猶不事行者、古市可罷向之由申者也、

〔大乘院寺社雜事記〕九　七十　十月十五日、子丑月蝕云々、一向不蝕如何、

一自東大寺書狀到來、不可說事也、

廿一日、

一去十五日返事遣東大寺畢、就密乘坊了、

廿四日、

一古市來、東大寺密乘坊英祐僧都出世後見幷寺務代事、如故順□僧都之例領狀申、寺門儀每事無爲之間、其子細申入之、則密乘坊方へ罷出云々、

十一月九日、庚辰、

一順圓遣密乘坊方了、東大寺々務方事仰合之、

近衛政家任大臣ヲ賀ス

〔東大寺別當譜〕第一百六十四　前大僧正嚴寶眞言宗、隨心院兼東南院、　文明十三年六月七日任、口宣、按(案)在隨心院文庫、關白左大臣兼良公男、

八日、辛亥、權大納言德大寺實淳ヲ內大臣ニ任ジ、舊ニ仍リテ、右近衛大將ヲ兼ネシム、

〔公卿補任〕四十三　內大臣從二位藤(德大寺)實淳、卅七、六月八日任、元權大納言、同日大將、還宣旨、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　六月八日、○中略とくさひしれ

右大將內大臣れきん下にちんれきあり、上卿うゐいちうきんれ大納言ふ行元ふゐう左少辨なり、さんしやうゐいる、

〔後法興院政家記〕六　六月九日、壬子、晴陰、時々小雨、去夜於陣任大臣宣下云(內府)々、上卿海住山大納言、遣使者於德大寺、賀任槐御使悅喜之由也、令對面、

十五日、戊午、降雨、○中略自內府許有使者、就任槐御使悅喜之由(仰脫カ)也、宿召進元長了、今日宣下也、右大將(德大寺實淳)任槐、內大臣、奉行元長、上卿海住山大納言也、自本家有少訪、仍陣官人外記等參仕、

仰詞　諸司ノ下行等本人ノ沙汰ナルハ近年ノ式

拜賀

仰詞、右大將藤原朝臣宣任內大臣、只內大臣官ハカリ可仰之由仰了、還宣旨

內大臣右近大將如元、

〔宣胤卿記〕六月一日、甲辰、天晴、○中略番頭實淳(禁裏小番)卿任槐事勅許之間、次第被引上、○禁裏小番ノコト、年末雜載、禁中ノ條ニ見ユ、任槐宣下、陣儀消息儀未定云々、

八日、晴、今日德大寺大納言實淳卿任內大臣、於陣被宣下、奉行藏人左少辨元長、上卿海住山大納言也、自德大寺相語之故參云々、諸司下行等本人沙汰云々、近年式也、

十一日、晴、○中略余向德大寺賀任槐事、

〔十輪院內府記〕六月十五日、自內府以諸大夫(物ヵ)被謝先度禮、以青侍遣狀、仍不及返事哉、對面謝之、

〔相顯抄〕內大臣(藤)同實淳　文明十三六八任、元權大納言、同十七三廿三辭、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十三　御湯殿上日記　文明十四年八月十日、とく大寺の內ふとういひるあり、五らう御さる五ゐいる、

〔十輪院內府記〕文明十四年八月十日、○中略今夜內府奏慶云々、扈從公卿、海住山大納言、一條大納言、拜賀直(罷向)、侍從中納言、新中納言、番長一人、下臈三人云

々、

〔親長卿記〕十三　文明十四年八月九日、晴、内府（右大將實淳公）拜賀也、海住山大納言、無由緒、一條大納言、實久、新中納言、永繼、侍從中納言、小倉宰相中將、季熙、（高倉）永康、基春、（持明院）基數等、卜部兼致扈從、地下前駈四人也、

〔長興宿禰記〕下　文明十四年八月十日、丙子、晴、今夜德大寺內府實淳公（右大將）拜賀也、海住山大納言高清卿、清水谷新大納言實久卿、藤中納言永繼卿、（侍從）三條中納言實隆卿、小倉宰相中將殿上人四人、諸大夫四人、近衞番長等相從之云々、散狀寫之、

旱魃ニ依リ、諸寺ニ命ジテ、雨ヲ祈ラシム、

〔後法興院政家記〕六　六月四日、丁未、晴、民間有炎旱愁云々、

〔宣胤卿記〕六月十二日、晴、夕立、但此邊不及濕土、近日炎旱以外事云々、

〔大乘院寺社雜事記〕七十七　六月十三日、

一就祈雨倫旨（綸下同ジ）到來、左少辨元長奉也、自寺務七大寺以下如例相觸之、去八日倫旨、

〔東寺百合文書〕ち廿一口供僧方評定引付　文明十三年辛丑　六月八日、

○山城

興福寺別當尊譽奈良七大寺ニ通達ス

一近日炎旱之間、自今日於北面、水天眞言三百反可被滿云々、

九日、主子、勅題ヲ廷臣ニ賜ヒテ、和歌ヲ詠進セシメラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記　六月九日、三しゐけ御さいはて、御さんしやくとそろひてとりうさねらるゝ、

〔十輪院內府記〕六月七日、○中略　自戶部（白川忠富）弁四辻（季經）宰相中將、明後日內裏御會歌題、

折紙

三首題

宣胤飛鳥井雅康ニ詠草ノ合點ヲ求ム

〔宣胤卿記〕六月三日、晴、○中略　留守有民部卿折紙云々、披見之處、

夕顏　泉　麓柴

右御題、來九日可令詠進給之由、被仰出候、可爲御短冊候也、

六月三日　　忠富

西殿

中御門殿

則參內、被加御人數事、以民部卿畏申了、先立寄民部卿休所也、禁中也、

七日、晴、○中略　行飛鳥井中納言（雅康）亭、明後日禁裏三首詠草爲談合也、留守云々、仍一條預置也、晩遣人合點返之、

九日、晴、夕立、○略中禁裏三首書載私短冊、今朝付遣民部卿、

十一日、甲寅權大納言中院通秀、猶子通世ヲ久我氏ニ復センコトヲ奏ス、

〔十輪院内府記〕六月十一日、旬可祭之處、此間爲養生服藥、仍斟酌、入晩番參候、入夜參御前、種々被仰又申入了、身上事申上、又房任卿事申入、又通世可爲久我之由申入、不可然、土御門斷絕、堀川如無、久我中院相殘之處、一流斷絕不可然、早可爲猶子云々、併可爲叡慮之由申入了、

義政、等持寺ニ詣ル、

〔親元日記〕六　六月十一日、甲寅、天晴、

一御成等持寺、御時、直ヨ淨土寺山ヘ御成云々、貴殿御供、

十三日、丙辰、天晴夜雨、

一御成等持院、御時、

義尚、甘露寺親長ニ、和歌懷紙等ヲ借覽ス、

〔親長卿記〕十二　六月十一日、晴、月次會也、飯尾加賀大夫清房、蜷川新右衞門親元頭役也、

海住山大納言、中御門中納言、(高倉永通)藤宰相、(姉小路)新宰相、基綱、(和氣)富就朝臣、(伊勢)貞頼、(高倉)永康、元連、(飯尾)清房、親元、良世等也、自大納言殿(室町殿)被下御使、(貞宣)伊勢(伊弾正)、自然懷紙短尺等在之者可召進云々、月次懷紙等之外、無殊事之由申之、可召進之由御使申之、仍自正月懷紙當座短尺等進上之、今日懷紙短尺等進上之間、不及披講也、

〔宣胤卿記〕六月十一日、晴、甘露(寺脱カ)亭月次和歌會也、兼日三首、當座卅首如例、頭役飯尾加賀守清房、蜷川新右衞門親元兩人也、參會人數、海住山大(亭主、余、藤宰相、姉小路(萬里小路春房)(甘露寺元長)、左少辨(高倉永康)、藤侍從、富就朝臣、伊勢次郎左衞門(貞經)、飯尾大和守、同加賀守、蜷川新右衞門、良世等也、自大樹有御使、(伊勢弾正)、今日懷紙短尺幷度々可入見參者、則付御使進之、仍不及披講、盃杓以後各分散、

〔親長卿記〕十二　九月廿一日、晴、去十一日歌合可借進之由、有大納言殿仰、御方御所、進上了、

○親長第月次和歌會ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔親長卿記〕十二　正月廿一日、晴、○略今日月次會始也、元長幷飯尾大和前司元連等頭役也、入來人々、中院一品、(通秀、極位之後辭亞相云々、先年還任之後未及拜賀)勸修寺亞相、海住山亞相、中御門黄門、藤相公、姉小路新宰相、富就朝臣、俊通、(北小路)伊勢次郎左衞門貞頼、新也、元連、飯尾與三左衞門爲規景益、良世等也、有披講、々師元長、讀師

土御門氏　絶エ堀川氏亦衰フ

等持院ニ詣ル

月次和歌會頭役飯尾清房蜷川親元

正月以來月次懷紙及ビ當座短册ヲ進ズ

三首兼題當座三十首

正月會始頭役甘露寺元長飯尾元連

中院一品、有三獻、事了人々歸了、

二月頭役中院通秀

〔十輪院内府記〕正月廿一日、天晴、〇中略晝過時分向按察卿會、兼題柳絲綠新、當座三首、（十脱カ）

〔宣胤卿記〕正月廿一日、丙申、晴、〇中略今日都護亭月次會也、先行一條前黃許、（落水谷實久）次中院一品許、（去七日實一品事、并去十三日通世元服事、）次向都護許、參會人數、中院一品、勸修寺大、海住山大、亭主、余、藤宰相、新宰相、樂邦院、左少辨富（勸修寺家）就朝臣、俊通、武家輩伊勢次郎左衛門尉、飯尾大和守、元連、同與三左衛門、樂人景益、經師良世等也、頭役左少丞、大和守兩人也、酒後有披講、入夜之間、披講以前歸宅、兼日懷紙題柳糸綠新、當座卅首各雅康卿出題也、當座余三首詠之、

〔實隆公記〕〇家本前田正月廿一日、丙申、晴、〇中略今日都護親長、卿月次會也、懷帋題柳絲綠新、遣之、依故障不能向、

〔親長卿記〕十二　二月十六日、晴、月次會、（式日引也、）延中院一品、（頭役也、）海住、侍（山脱カ）從中納言、藤宰相、（五辻宗仲）宗巧、（飯尾加賀）富就朝臣、清房、親元、良世等也、有披講、々師良世、讀師海住山也、發□（聲）予如恒、

〔十輪院内府記〕二月十六日、廿露寺會頭役也、百疋遣之、然半分返送之、披講

元長ノ嫁娶ニ依リ月次會延引

三月勸修寺教秀頭役

之時、景益可付之由、余入魂、仍付之、入夜起座、侍等遲參、召具雜色一人歸宅、

〔宣胤卿記〕二月十一日、丙辰、晴、〇略中今夜左少辨元長廿五、嫁娶云々、藤宰相永繼卿、女也、依此經營、今日月次會延引、

十六日、辛酉、晴、〇略中今日按察亭月次會也、依窮屈令懈怠、遣懷紙了、

〔實隆公記〕〇家本前田二月十六日、辛酉、晴窮屈終日平臥之式也、今日都護卿月次會也、仍罷向、中院、海住山、藤宰相、予等、其外武邊輩少々在座、當座三十首有披講、入夜歸宅、

〔親長卿記〕十二　三月十一日、晴、月次會也、勸修寺大納言頭役也、中御門中納言、侍從中納言、藤宰相、新宰相、富就朝臣、俊通、貞賴（伊勢次郎左衛門尉）爲規、親元、良世等也、有披講、々師俊通、讀師予勸之、

〔宣胤卿記〕三月十一日、乙酉、晴、今日都護亭月次會也、頭役勸修寺大納言也、參會人數、勸修寺大、（讀師）亭主、侍從中、藤宰相、新宰（發聲）、左少、富就朝臣、俊通、伊勢次郎左衛門（貞賴）尉、飯尾與三左衛門尉、樂人景益、經師良世、蜷川新右衛門尉、龍首座等也、盃酌以後有披講、事了歸宅、秉燭以前也、

〔實隆公記〕〇家本前田三月十一日、乙酉、晴、〇中略今日按察卿月次會也、仍罷向、

當座三十首有披講、

五月

〔親長卿記〕十二　五月十一日、陰、細雨下、今日月次會也、勸修寺大納言、海住山大納言、中御門中納言、新宰相、（基綱）宗圦、富就朝臣、俊通、清房、良世等也、有披講、々師俊通、讀師中御門中納言、

〔宣胤卿記〕五月十一日、乙酉、陰、申程微雨、〇（略）中行甘露寺、今日月次會也、參會人數、勸修寺、海住山等亞相、亭主、余、新宰相樂邦院、宗圦、左少辨、富就朝臣、俊通、清房、景益、良世等也、頭役俊通、良世兩人也、讀師余、講師俊通、晩頭歸宅、

〔親長卿記〕十二　七月廿九日、晴、今月々次會也、依種々指合延引、藤侍從（永康、）頭役也、海住山大納言、侍從中納言、永康等也、依無人當座三十首披講、々師良世、讀師海住山也、

〔宣胤卿記〕七月十八日、終日雨下、向都護亭、今日月次會依產穢延引云々、〇（略）中此產穢ハ都護青侍家事也、依爲都護門內、俄儀不及相隔令穢了、

廿四日、晴、〇（略）中食後向都護許、月次會度々延引、可爲今日、〇（略）中會又延引、

廿九日、晴、〇（略）中今日甘露寺月次會、依伯母御事不出、

〔親長卿記〕十二　八月十日、晴、月次會也、姉小路宰相頭役也、海住山大納言、

七月　頭役高倉永康

八月　頭役姉小路基綱

產穢ニ依リ延引

侍從中納言、永康、富就朝臣、俊通、清（房脫）等也、依無人當座三十首許披講也、講師俊通、讀師侍從中納言也、

九月十一日、晴、月次會、內府頭役也、今日有褒貶歌合、來臨人々、右府、內府、中院一品、海住山大納言、予、侍從中納言、中御門中納言、姉小路宰相、頭辨政顯朝臣、元長、永康、富就朝臣、俊通、平（伊勢）貞頼等也、

十月十一日、晴、月次會也、

十一月十一日、晴、月次會也、中御門中納言頭役也、中院一品、海住山大納言、中御門中納言、侍從中納言、藤宰相、姉小路宰相、永康、富就朝臣、貞頼、飯尾加賀守清房等也、當座三十首有披講、々師景益、讀師中院一品也、依入夜、兼日不披講、

〔西園寺家記錄〕（二十八實遠公記）十一月十一日、自曉雨下、午時計晴、按察卿亭爲月次式日、懷紙送遣、

〔十輪院內府記〕十一月十一日、細雨卽晴、參小番、晝過向按察會、兼題當座等如恒、余讀師、講當座計也、入夜參御前御宴云々、

〔西園寺家記錄〕（二十八實遠公記）十二月四日、同（天晴）按察卿亭月次也、懷紙送遣□、

〔十輪院內府記〕十二月四日、甘會遣懷紙、

九月　頭役德大寺實淳　褒貶歌合

十一月　頭役中御門宣胤

親王返歌ヲ賜フ
蹴鞠御會
籠中ヨリ蹴鞠ナ叡覧アラセラル
德大寺實淳酒饌ヲ獻ズ
邦高親王道永法親王勸修寺宮常信御見物

十二日、乙卯、勝仁親王、水干ヲ飛鳥井雅康ニ賜フ、雅康、和歌ヲ上リテ恩ヲ謝シ奉ル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記

六月十二日、○中略宮ゟ御方よりあもり申よ御もいりんゑふ、御返ことよさんさくりひてあいる、御返歌つゝむさるゝ、ゑうちやく申さるゝ、

十三日、丙辰、勝仁親王、飛鳥井雅康ニ、蹴鞠組烏帽子懸ノ免許ヲ受ケサセラル、

〔京都御所東山御文庫記錄〕甲二十二　御湯殿上日記

六月十三日、御ろゝへまよて御まりあり、御もりけまよされて御らんきらるゝ、宮ゟ御ろさけふ□御ろおり、御ろまらけゟ物、御さる、御ひし〳〵なり、めてさし〳〵、つうけん寺との□ろつしきも入あいらきらるゝ、（邦高親王）ふしみ殿、御（道永法親王）むろ〳〵（常信）んしゆ寺新そんしゆ、御もそれうちまよゑのひまあいらきらるゝ、

〔親長卿記〕十二　六月十三日、晴、及晚參內、於親王御方可有御鞠之故也、先

親王御立ノ時禮ハ大臣ト同ジ
參候ノ人々
繼塵記
女房奉書

日予祇候之時、可爲十三日之由、可仰飛鳥井之由有仰、參候人々、

內大臣、實淳（醍）源大納言、雅行、菊亭大納言、公興、予、飛鳥井中納言、雅康、（高倉）藤宰相、永繼、已上西上南（中山）宣親朝臣、元長、（甘露寺）以量、（勘）基富、永康、（高倉）源富仲、已上北上西面同座、（五辻）貞久縣主、諸平縣主、已上北上西面同座、

有兩度、初度親王御對中納言、第二度予候之、（縮）飛鳥井今日曲足有其粉、事畢、於親王御方有一獻、人々申沙汰也、三獻之後退出、

〔宣胤卿記〕六月十三日、晴、○略中今日於親王御方但御懸、黑戶有御鞠、內府源大、菊亭大、按察、飛鳥井中、藤宰相、頭中將、左少辨、以量、基富、永康、源富仲、賀茂輩兩人云々、各葛袴云々、

〔十輪院內府記〕六月十三日、樂林來、先度御鞠之時、第一親王與內大臣參議以下、而伏見宮二品式部卿、御立之時、無禮如何、余對云、親王有禮與大臣齊歟、後醍醐院奉稱帥宮之時、節會御參之時、諸卿可致禮哉之事奏聞、然而諸卿可動座之條、還而可失威儀、只參議計可然云々、以此記思之、參議平伏勿論歟、此事見繼塵記、

〔京都御所東山御文庫記錄〕勅封百五十五　女房奉書

一條冬良ノ弟

圓滿院久シク門跡ナシ

（端裏書）文明十三

「仰　六十四」

昨日は御まり申御さたよて、おもしろくおほしめし候、ことに御さう月ともまいらせられ候て、めてたくおほしめし候、さ候へハ、くミの御ゑほうしかけ御さたあらせられ候、おほしめしもより候ハす候、ことの外なる御左よしんの事まて候に、かやうの事まて申御さた候、御うれしくおほしめし候なから、みちのためもいろ〳〵とおほしめし候、猶々昨日のくれ、うす〳〵のこりおほくおほしめし候よし、心えて申とて候、うしく、

あまそう毋の中納言とのへ

圓滿院政尊寂ス、

〔宣胤卿記〕五月廿四日、戊戌、陰、〇中略參一條殿、御中陰以後未參、〇一條家良薨去ノコト、四月二日ノ條ニ見ユ、又花頂附弟左幕下御弟、御病氣及數日、爲訪申也、參御平臥之所、自去月九日同遍之御體云々、

六月廿一日、朝間雨下、屬晴、〇中略次參左幕下、去十三日圓滿院殿左幕下御弟、師匠（教助）花頂僧正、令逝去給云々、雖御長病存內、禪閤去四月二日薨給無程之條、驚嘆無極、圓滿院事久無其門跡、花頂僧正相兼之、仍雖彼僧正之附弟、爲圓滿院分、近年御

隨心院殿實書狀

腫物

得度、當年十七歲、可惜々々、可悲々々、

〔大乘院日記目錄〕三　六月十三日、花頂新門主政尊入滅、十七、

〔大乘院寺社雜事記〕七十　四月廿四日、戊辰、

一花頂弟子御違例以外云々、珍事、自隨門申給、

〔大乘院寺社雜事記〕七十八下　〇雜記裏文書

從便宜一筆令申候、花頂新門主違例事、專實定而先日委細申候哉、連々養□□種々了簡候へ共、如今者□□□□□及難儀候歟、あさゝし□□外聞實儀非直□□□□□れもあふなく候、□令申候、恐々謹言、

卯月廿四日　　嚴寶

大乘院殿人々御中

〔大乘院寺社雜事記〕七十　五月廿三日、丁酉、

一一乘院殿昨日御下向之由承候、隨心院殿事傳在之、花頂新門主腫物不本復云々、珍事大略大事々々、

六月十六日、

文明十三年六月十三日

一花頂新門主政尊、去十三日夕方圓寂、十七歲也、

龍花院
法系

一周忌
二十五回忌

〔攝家系圖〕一條殿流

兼良——

寺—君母（從三位顯郷女）同花頂殿、政尊、文明十三年六月十三日入滅、十七、

龍花院、

〔柳原家記錄〕百二十三井寺血脈幷傳法中傳系部類

圓滿院三門跡管領之號後實藏院、長吏、

大僧正敎助 鳳栖院贈相國持忠公息、普廣院贈相國御猶子、

政尊 號花王院、御早世、御入室敎助、直敍法眼、御入滅文明六（十三脫）十三、後成恩寺關白兼良公御息、爲慈照院贈相義政公御猶子、御出家受法敎助僧正、

〔大乘院寺社雜事記〕八十一 文明十四年六月十三日、

一花頂禪師一廻也、

〔大乘院寺社雜事記〕百六十七 永正二年四月扉裏 後成恩寺、後密乘院、花頂殿廿五廻也、

○政尊、唐院ニ入ラントスルコト、五年、年末雜載、佛寺ノ條ニ、義政ノ猶子トナルコト、十年七月二十四日ノ條ニ見ユ、

十五日、戊午、義尙、生母日野氏ト共ニ、近江葛川無動寺ニ參籠ス、

〔親元日記〕六 六月十四日、丁巳、雨晴、

祈禱會一七日ノ參籠

伊勢貞宗警衛ス景岱ノ詩

一兵庫殿より御進上、御折帋調之、明日之御禮、

上さはへ千疋、御方御所さはへ御太刀、糸、御馬、

十五日、戊午、雨、

一御方御所樣、上樣葛川へ御成、御參籠、貴殿御參、御物奉行御物上樣御分二荷、御方御所一荷、蜷河中務丞、野依若狹守、

廿一日、甲子、雨、

一葛川より還御、

〔長興宿禰記〕中 六月十五日、戊午、雨下、今日將軍權大納言、御參籠葛河、御母儀一位殿、御同道、自今日彼寺祈禱會也、爲御加治一七ヶ日御參籠云々、

廿一日、甲子、晴、今日將軍幷御母儀、自葛川御還向也、

〔後法興院政家記〕六 六月十五日、戊午、降雨、

自（頭書）今日七日御臺幷大樹參籠葛川云々、

〔翰林葫蘆集〕三 辛丑六月十五日昧早、大將軍遊葛川、勢州太守從之、蓋護行臺也、其暮余偶常德、東雲出詩見示曰、一雨蕭々凉意生、將軍今有葛川行、吾公亦是騎從長、只恨淸風吹未晴、誦之數回、不唯句之美、而藹然有純